Osaka University Knowledge Archive

Title	感情・感覚のレトリック　（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85201
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト 2020

感情・感覚のレトリック

渡　辺　秀　樹
大　森　文　子
後　藤　秀　貴
友　繁　有　輝
寺　浦　麻　由
岡　部　未　希
竹　森　ありさ
Luke Malik
Alena Govorounova

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

感情・感覚のレトリック
（言語文化共同研究プロジェクト 2020）

目次

特集　シェイクスピア　ソネット集のレトリック再考	渡辺　秀樹	1
ソネットに見える繰り返しのレトリック再考 “when～, then ～” の繰り返しを中心に	渡辺　秀樹	3
Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック	大森　文子	15
シェイクスピアのソネット 50 番 日本語訳の考察を絡めて	寺浦　麻由	29
シェイクスピアのソネット 147 番における平行構造と メタファー	岡部　未希	41
精神の座としての〈腹〉の史的展開再考 中世以前の表現に注目して	後藤　秀貴	51
アメリカ大統領の就任演説（1960 年~2021 年）における 平行法の分析	友繁　有輝	65
英語色彩語を含む強意直喩表現の分析 文脈と媒体の関係	竹森　ありさ	75
Logical Positvism, Metaphor, and (Non)Cognitivism	Luke Malik	85
The Un-cancelable Literary Work: Does Literature’s Relational Ontology Assure Its Survival beyond Cancel Culture	Alena Govorounova	103

特集　Shakespeare's *Sonnets* のレトリック再考

2019 年度と 2020 年度の認知レトリック論では、それぞれ後期に「英詩のレトリック」をテーマとしてソネット形式の英詩を精読した。注目したのは音韻の効果、同一語句の繰り返し、類義語による言い換え、統語構造の理解、そして各篇の基底をなす概念メタファーである。この 2 年間の成果として当演習に参加した教員と博士課程院生による短論を並べ、「特集　Shakespeare's *Sonnets* のレトリック再考」として発表する。渡辺秀樹はソネットに見える繰り返しのレトリック効果について、音韻、語、統語構造の各レベルから再考した。大森文子はソネットの 4 部構成の最後の 2 行連句が果たす機能について再考し、各編で用いられたメタファーに着目して逆転のレトリック効果を解説している。この 2 論では別の観点から第 12 篇、19 篇、30 篇、60 篇をともに論じている。寺浦麻由と岡部未希は、演習でそれぞれが担当した第 50 番と第 147 番を再度精読し、確認したレトリックの諸相を非常に細かく、また総合的に描き出している。

演習では、音韻については頭韻・脚韻のみならず母音韻(assonance)や子音韻(consonance)も考慮に入れるように、先に九鬼周造の「押韻論」で試みられたソネット形式の日本語 14 行詩での押韻パタンや、Wilfred Owen の詩に特徴的な slant rhyme を参考にした。類義語による言い換えは重要概念や中心テーマに対して行われるのであり、同一表現の繰り返しによるその語句自体の強調と対比・比較すべきこと、単なる同音の繰り返しではなく、頭韻・脚韻構成音がその詩のテーマとなる（概念を表す）語の構成音となっている現象 (hypogram) が時に見られることを理解した。語の繰り返しでは、名詞 love が「愛の神」「愛情」「愛する人」のように、また名詞 time が「(擬人化された）時」「時間」「時代」のように別義で繰り返される場合に注目し、繰り返されるときの形容語のヴァリエーションを重視した。

統語構造の理解については、脚韻合わせによる語順の倒置などよりも、実は難解である接続詞によって繋がれた文と文の関係の考察に力を入れた。古英語の "þa…, þa…." や " þær…., þær…." などの起源をもつ相関構造(correlative constructions) "when…, then…" "where…, there…"　や and yet や but による転換、接続詞が省略されている並列構造 (asyndeton) の理解、1609 年版の句読点(punctuation)と編纂者の用いた現代式句読点に対する批判など、英語史に関する講義も行った。

概念メタファーについては＜人生は旅＞＜人生は四季＞＜一生は一日＞＜人は植物＞＜生命は炎＞＜この世は舞台＞＜世界は人体＞（＜偽りだらけの世界は病い＞）＜愛は病い＞＜愛は貪食者＞＜愛は旅＞などに基づく篇を受講生が担当し、音韻と配語レトリックに加えて概念メタファーを構成する語彙場を論じた。発表では翻訳によるメタファー表現の消失、増訳による原典にない要素の出現現象をテーマとする参加者もいて、日本語訳諸版は格好の参考文献となった。

2008 年度以降数年毎に半期のゼミで読んで来た *The Sonnets* を、2016 年 Shakespeare 没後 400 周年からは毎年後期に戯曲とも合わせ読んで来た。自分が院生の当時に雑誌に出た記事 "Shall I Die or Shall I Fly" (*Time* 1985) を参考記事にすると、担当受講生が、今や電子版でアクセスできる当該写本のコピーを配布して説明するなど、フィロロジー専門ではないゼミでも、かなり学術的な議論を行なうことができた。記事で紹介されている「へぼ詩」、これを読むと、やはり若書きへぼ詩か別人作のように思えたが、確かに Romeo & Juliet の語句が散見された。

このような演習を続けているうちに、自然、校訂版や注釈が手元に増えたが、それらの中で認知レトリック論の授業テーマに役立ち、最も刺激を受けたのは Helen Vendler, *The Art of Shakespeare's Sonnets* (1997) である。Vendler は、ソネットの第 1・2・3 四行連句と最終 2 行の 4 部構成の各部に同一語が現れる現象に着目し、主題を提示する Key Word として重視する独特の解釈法を提示した。人物関係を探る伝記批評、ソネット形式のレトリックの系譜批評、戯曲の台詞との呼応の指摘、最近ではコーパス言語学の手法で使用語句の分布と統計数値を示す研究も増えている。これらを尻目に本文精読・再読によって、音韻的・語彙的な各編の構造を詳細に、時に図式で示した本書は、1609 年版の影印を添えて 17 世紀初頭と現代の punctuation の相違にも自然と気づかせる。日本人が本文校訂までした注釈書には大場建治編『ソネット詩集』(研究社 2018) があり、これは演習参加者 9 名中 5 名がいつも持参していた人気の参考書であったが、大場は Vendler を無視しており、文献一覧にも載せていない。その理由はわからない。

編集者しるす

ソネットに見える繰り返しのレトリック再考
“when～then～” の繰り返しを中心に [1]

渡辺　秀樹

§ *The Sonnets* に見られる様々なレベルでの繰り返しとその効果

名詞・形容詞・動詞・副詞という実詞が 1 編中で 3 回、4 回繰り返されるのは反義語との対照とともに *The Sonnets* の常套レトリックである。例えば young, youth はしばしば old, age, decrepit などと近接して現れ、summer が出れば他の季節名も出る。ソネット 14 行の 4 部構成で、第 1 四行連句から第 3 連句までが同じ主題の変奏を繰り返して、結句 2 行がそれをまとめたり逆転したりというもっと大きな構造的な繰り返しもあるし、第 153 篇で典型的に見られるように、4 部全てに fire が現れ（3, 5, 9, 14）これが key word となっている。第 99 篇では、第 2 行で “sweet thief” “thy sweet” と 2 回出た sweet は、最終行で “sweet or colour” 「色香」つまり「優れた心持ちと容姿」とまとめられて epanalepsis を構成し、第 2 行、7 行、10 行、最終行に繰り返される動詞 stolen-steal と平行して詩の主題を提示している。ソネット全 154 編に見られる「繰り返し表現」のレトリック考察に先立ち、研究者や愛読者に周知の繰り返しの例を、異なる 3 つのレベルで見ておく。

音韻の繰り返しの例では母音韻や類音列挙もあるが、ここでは頭韻の効果的使用例を見たい。Shakespeare は行中 (intra-linear) はもちろん行間頭韻 (inter-linear alliteration)が特徴で、これが単なる音合わせではなく、主題となる数個の語句が同音で始まり、または主題となる語句が浮かぶように (hypogram) 頭韻を用いることが多い。明らかな例は第 9 篇である（以下の引用では Sonnet 番号はローマ数字で示し、繰り返されている語句や議論の対象とする語は太字か下線で強調する）。

IX.[2]
Is it for fear to **wet** a **widow’s** eye
That thou consum'st thy self in single life?
Ah, if thou issueless shalt hap to die
The **world** will **wail** thee like a makeless **wife**.
The **world** will be thy **widow** and still **weep**
That thou no form of thee hast left behind,
When every private **widow** well may keep,
By children’s eyes, her husband’s shape in mind.
Look what an unthrift in the **world** doth spend
Shifts but his place, for still the **world** enjoys it;
But beauty’s **waste** hath in the **world** an end,
And kept unused the user so destroys it:
　No love toward others in that bosom sits
　That on himself such murd’rous shame commits.

一読、顕著な語頭<w>音に気づくが、これは第 1 四行連句が枠となる第 1 行と第 4 行で、そしてその 2 行のみで<w>音を 5 回繰り返して決めた、全体を支配する基調音である。14 行中に名詞 world と widow がそれぞれ 5 回と 3 回繰り返されて、「この世」が「寡婦」となるという主張を

---

[1] 本論文の執筆には、以下の科研費 2 件の補助を受けている。基盤研究(C)1「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）、基盤研究(C)1「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）。

[2] *The Sonnets* の現代校訂テクストは、校訂者それぞれの解釈を反映して句読点にかなりの相違が見られ、読者の解釈に影響する。この第 9 篇では Vendler (1997) や嶺 (1974) は 3 行目冒頭を “Ah!” と感嘆符を付けているが、川西 (1971)、Duncan-Jones (1997)、Burrow (2002) は “Ah,” としている。1609 年版ではセミコロン “Ah;” である。次の第 135 篇では 1609 年版の “*Will*” という大文字イタリック表記が現代校訂版では大文字表記にされ、他の will は小文字で印刷されているので、読者は初めから固有名・名前は大文字表記の方、小文字の方は助動詞か「意志・欲望」の意の名詞の解釈に拘束される。行末のコロン、セミコロン、ピリオドの差が統語的・構造的解釈を左右するのだが、本論ではその問題にも少しだけ立ち入る。以下の *Sonnets* からの引用は Burrow の句読点と大文字小文字表記に従う。

定めている。[3]　この基調音を、あるいは通奏低音を、ふたつの名詞に絡む主要動詞 wet, wail, weep, waste が全て<w>音を繰り返して、ユニゾンのように倍加する効果をあげている。本詩の主張「美青年が独身を貫けば、美しい子を産んで幸せになる女性が寡婦となるばかりか、青年の美が受け継がれずに消えて、この世自体が寡婦となる」に含まれる青年と「妻」になるべき女性「寡婦」の関係と、青年と「この世」というより大きな枠組み、これらが全て<w>音で始まるのである。名詞 world は 5 回、widow が 3 回、wife は 1 回という頻度も、「妻」に成るはずの女性の嘆きよりも青年の美を失うことになる「この世」の嘆きが大きいことを数値で印象づけているようだ。

このような頭韻に対して語末の音の意図的な繰り返しはないのだろうか。私は次の第 37 篇をその非常に美しい例として示したい。

XXXVII.
As a decrepit father takes delight
To see his active child do deeds of **youth**,
So I, made lame by Fortune's dearest spite,
Take all my comfort of thy **worth** and **truth**.
For whether <u>beauty</u>, **birth**, or **wealth**, or <u>wit</u>,
Or any of these all, or all, or more,
Entitled in thy parts, do crowned sit,
I make my love engrafted to this store.
So then I am not lame, poor, nor despised,
Whilst that this shadow <u>doth</u> such substance give
That I in thy abundance am sufficed,
And by a part of all thy glory live.
  Look what is best, that best I wish in thee;
  This wish I have, then ten times happy me.

第 1 連では 2 行目と 4 行目に youth と truth が脚韻を踏んで、「若い」青年の「誠実」の美点をまず強調するが、その第 4 行には前に worth「真価=merit」が thy worth and truth" と binominal の対句で現れており、これが第 2 連でさらに列挙される美点を先行してまとめているようだ。[4]　太字で示した 5 語は語尾 –th を共有する抽象名詞で、青年の美点を子音韻 (consonance) で関連付けており、さらには第 5 行で "beauty, birth, or wealth, or wit," と beauty と birth、wealth と wit が頭韻で結ばれてもいる。これら首尾の同音連結により、列挙された美質がさも本質的に繋がりがあるかのように示す効果をあげていると思う。第 6 行以降にはこの語尾 –th が第 10 行の 3 人称単数 doth 以外には出ないことも指摘したい。下にこれら 7 語の関係を 2 様に図示しよう。

youth を青年の言い換えと取る場合

		youth			青年の言い換え
		thy worth			価値
birth	beauty	wealth	truth	wit	美点

youth を青年の美点の 1 つと取る場合

		thy worth			君の価値
youth	truth	birth	beauty	wealth	美点

[3] Duncan-Jones (1997, p. 128) は "The alliteration has a somewhat theatrical effect of emphasis." という注を付けている。また Vendler (1997, p.84) は 1609 年版での綴り <widdow> の鏡面構造（w-i-d-d-o-w)）を重視して、<w> は double-u であることから、Shakespeare は本篇で<w><u>音を語頭、語中、語尾にちりばめていると指摘している。

[4] 川西 (1971, p. 103) は第 4 行の truth について「ソネット集の中で true, truth はそれぞれの場合に応じて sincerity, loyalty, genuineness, uprightness, closeness to an ideal pattern など様々の意味を持つことに注意」と述べている。また大場 (2018, p. 89) は「**5. Birth, wealth** この「比喩的」表現を "the fair youth" 「実体」と安易に結びつけてはなるまい」と警告している。Duncan-Jones (p. 184) "**4 worth and truth** Since [Sonnets] 33-6 have dealt with the young man's betrayal of his friend, his sensual fault (35.9) and blots (36. 3), the celebration here of his *worth and truth* must entail an appropriation of the young man's weakness so effective that he can now be regarded as faultless." も参照。

語の繰り返しで有名なのは Will Sonnets と呼ばれる第 135 篇、136 篇での will の列挙である。

CXXXV.
Whoever hath her wish, thou hast thy **Will**,
And **Will** to boot, and **Will** in over-plus;
More than enough am I that vexed thee still,
To thy sweet **will** making addition thus.
Wilt thou, whose **will** is large and spacious,
Not once vouchsafe to hide my **will** in thine?
Shall **will** in others seem right gracious,
And in my **will** no fair acceptance shine?
The sea, all water, yet receives rain still,
And in abundance addeth to his store;
So thou, being rich in **Will**, add to thy **Will**
One **will** of mine, to make thy large **Will** more.
Let 'no' unkind, no fair beseechers kill:
Think all but one, and me in that one **Will**.

CXXXVI.
If thy soul check thee that I come so near,
Swear to thy blind soul that I was thy **Will**,
And **will**, thy soul knows, is admitted there:
Thus far for love my love-suit, sweet, fulfil.
Will will fulfil the treasure of thy love,
Ay, fill it full with **wills**, and my **will** one.
In things of great receipt with ease we prove
Among a number one is reckoned none;
Then in the number let me pass untold,
Though in thy store's account I one must be;
For nothing hold me, so it please thee hold
That nothing me, a something sweet to thee.
Make but my name thy love, and love that still,
And then thou lov'st me for my name is **Will**.

この 2 編では will がそれぞれ 14 回、7 回、William の愛称、「意志・欲望」の意の名詞、ここから「性器」のほのめかしで、また助動詞として出現する。この will の繰り返しの音効果は、第 135 番では still, kill による脚韻によって強められているが、第 136 番では一歩進んで 4-6 行の full、fill、その複合形による行中の繰り返しで強化されており、5-6 行と 13-14 行での love の 6 度の使用とともに、繰り返しの重層が達成されている。これらは音韻的には面白い詩ではあるが、主張されている深い愛欲は、執拗な繰り返しと奇想によって、かえって軽薄なものに感じられる。[5]

では第 19 篇の（擬人化された）時の神への呼びかけはどうであろうか。

XIX.
Devouring **Time**, blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood,
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-lived phoenix in her blood,
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,
And do whate'er thou wilt, swift-footed **Time**,
To the wide world and all her fading sweets:
But I forbid thee one most heinous crime,
O! carve not with thy hours my love's fair brow,

[5] Duncan-Jones (p. 386) も "**5 Will will fulfill** 'William/sexual desire will gratify': the threefold –ill sound creates a comic or satirical effect, as well as hinting at the 'ill' or evil nature of what is proposed." と真剣さの欠如を感じている。

Nor draw no lines there with thine antique pen.
Him in thy course untainted do allow
For beauty's pattern to succeeding men.
Yet, do thy worst, old **Time**: despite thy wrong,
My love shall in my verse ever live young.

本篇では 3 つの四行連句と結尾の 2 行の 4 部構成はとらずに 3 部構成になっている（Burrow の句読・校訂では）。7 行目までの内容「勇きも美しきも喰らいつくす時」に対して、8 行から 12 行で「しかし、私の愛する美青年の額には皺を刻まないでくれ」と懇願する詩人が、一転、最終 2 行で「どんなものでも滅ぼしてしまう時、その暴虐をほしいままにせよ、しかし私の詩の中に刻まれた青年の美は、詩と共に永遠に残る」と、自らの詩の永遠性を青年の美に託して歌い上げているのだ。第 1 行、第 6 行、第 13 行で呼びかけらえた Time には形容辞が付いており、このヴァリエーションが本詩の眼目で、その主張を強調しているのである（1609 年版では初めの 2 例は小文字表記の time で、最後が "ould Time"と擬人化を明示しているが、Burrow は 3 例とも大文字にしている）。用いられた形容辞は、例えば Joshua Poole, *English Parnassus*（1657, p.207）を見れば、ルネッサンス期の英詩の常套句であり、それ自体は Shakespeare の個性や才能を示すものではないが、順番が物を言う。[6]もし初め、あるいは 2 番目に "old Time" が出たらどうなったであろう。最終 2 行での "My love shall in my verse ever live young." の形容詞 young との対比が曖昧にならないだろうか。他の篇でもしばしば反義語の近接した使用が見られるが、例えば 30 篇でも "And with old woes new wail my dear time's waste;" のように old と new を 1 行中で対比させている。最終連で「老いた時よ」と呼び掛けることで、何者をも老いさせ死なせる時に対して、「その青年の美と共に、私の詩は永遠に若いまま残る」との主張が鮮明になるのである。400 年以上前に書かれた *The Sonnets* を今、筆者が論じていることが、この最終連の主張を証明している。次ぎの大森論文では第 19 篇を最後の yet の逆転効果から論じているので合わせ読まれたい。[7]

同一語の繰り返しに異なる形容辞が付く例は他にも見える。第 71 篇では the world (3)「世間」、the vile world (4)「悪逆な世の中」、the wise world (13) 「賢しらな人々」と名詞 world が異なる意味で 3 度繰り返されて、詩人が美青年に対して「私が死んだらすぐ忘れてくれ、私などと関わったということがあなたに対する世の評価を落とすから」という（偽の）懇願を強調している。

語の繰り返しが、詩中で連続する 2 語の繋ぎにより生じた音によって倍加された例は Helen Vendler (p.148) が挙げている。彼女は第 26 篇の第 5 行までに見える witness, wit, wit（太字部）の連続が、後続行の "show it" "bestow it" with, sweet（下線部）によって音読された時に、または視覚的に繰り返されていると指摘した。その指摘から思い至ったことを述べたい。

XXVI.
Lord of my love, to whom in vassalage
Thy merit hath my duty strongly knit,
To thee I send this written ambassage
To **witness** duty, not to show my **wit**;
Duty so great, which **wit** so poor as mine
May make seem bare, in wanting words to show it,
But that I hope some good conceit of thine
In thy soul's thought (all naked) will bestow it:

---

[6] Poole は "Time" の項で、aged, eating, feathered, fleeting, flying, stealing, swift-winged, winged など「老い」「(空飛ぶ）速やかさ」「貪食」を意味する語を、アルファベット順ではなく任意に並べている。そのリストの中程にある devouring, swift-footed の連結表記は、Shakespeare のソネット第 19 篇での使用の写しであろう。

[7] Duncan-Jones (p. 148) はこの"old Time"について "the poet acknowledges time's antiquity, with capitalization that may be authorial, but also, as he approaches his solution to the problem of time's power, feels able to address him colloquially as an 'old fellow'. "と最後の呼びかけで「親しみ」の意を old に込めていると見ている。私は"old boy"「やあ、おい君」などの呼びかけに通じると思い、*The Oxford English Dictionary* (on-line)で見出し語 *old boy* を見ると、初例は Shakespeare の同時代劇作家 Ben Johnson であった（"1602 B. Jonson *Poetaster* iii. iv. sig. F Thou shalt impart the wine, Old boy "）。このことからも、やはり 3 度の呼びかけでの形容詞 old は、最後に来るべきである。

Till whatsoever star that guides my moving
Points on me graciously with fair aspect,
And puts apparel on my tottered loving
To show me worthy of thy sweet respect.
  Then may I dare to boast how I do love thee;
  Till then, not show my head where thou mayst prove me.

この第 26 篇では詩人は、第 1 四行連で「この詩は貴殿の臣下としての私の義務を示すために書くのであって、自分の機知・文才を示すためではない」と書いている。第 4 行で前後に振り分けられた動詞 witness と名詞 wit は第 2 行の knit との脚韻によって際立って、むしろ連結されており、これが、「反語的否認」(apophasis, depulsio) のレトリックで、自らの wit「機知・文才」について書くのであると述べてしまっている。ここのところを Vendler が "This showy nonshowing and not-as-yet showing" (p. 148) と書いているのは面白い。第 2 連では初めに"wit so poor"「貴殿の美質を描写するだけの文才は私にはない」と言いながら、第 6 行と 8 行の脚韻部、つまり最も目立つ位置に "show it" と"bestow it" を置き、その it は wit の言い換えで最終弱音節に当たるのだが、直前の強勢のある動詞の<w>音と連続して、音読の際には極めて明瞭に wit の音を響かせる。つまり第 1 連の挨拶・言明は虚となり、自らの wit を言い立てるのである。Vendler はここまで述べてはいないが、続けて第 10 行の with と第 12 行の sweet にも視覚的・聴覚的な wit の反響をみる。が、私はそこはとらない。むしろ第 6 行の "wanting words" によって構成される第 4 行からの行間頭韻 (interlinear alliteration) が、第 2 連への wit の持越し、言い立てを支えていると見る。

以上、同一音、同一実詞（名詞・動詞）の繰り返し効果を見て来た。では機能語の繰り返はどういうものだろうか。深刻な思いが伝わる等位接続詞 and の繰り返しが第 66 篇に見られる。

LXVI.
Tired with all these, for restful death I cry:
As to behold desert a beggar born,
And needy nothing trimm'd in jollity,
And purest faith unhappily forsworn,
And gilded honour shamefully misplaced,
And maiden virtue rudely strumpeted,
And right perfection wrongfully disgraced,
And strength by limping sway disabled
And art made tongue-tied by authority,
And folly, doctor-like, controlling skill,
And simple truth miscalled simplicity,
And captive good attending captain ill.
  Tired with all these, from these would I be gone,
  Save that, to die, I leave my love alone.

行頭で10回繰り返される (anaphora) and が列挙する世の不条理は、冒頭の "Tired with all these" で後方照応的 (cataphoric) に示され、結句第13行では前方照応的 (anaphoric) に再度まとめられて、これらが envelop pattern をなしてそれらを包み込み、あるいは隔語句反復 (epanalepsis) をなす指示の繰り返しにより指弾する形を取っている。[8] そして行頭以外の位置のandの使用は、冒頭と末尾の2行も含めて周到に避けられていることを指摘せねばならない。

このソネットを読んだ時に私の頭に浮かんだのは『ロミオとジュリエット』の第1幕1場、恋の定義がオクシモロン表現で執拗に言い換えられる台詞である。日本の歌舞伎や落語でも「言い立て」という物の名前を列挙するレトリックがある。シェイクスピアの戯曲にも時折みられる言い立てのような列挙は、あまりに続くと、ひとつひとつの表現を味わう前に茫然としてしまい、軽薄感が生まれるのは避けられないだろう。で、深刻さと哀感・恐怖を高める列挙ならば、『リチャード三世』5幕3場、リチャードに殺された王族・貴族らの亡霊が次々と現れる様子、この行列

[8] Duncan-Jones (p. 512) は "tired with all these" の繰り返しを epimone「執拗な繰り返し」の例としている。

の長さが与える効果にも似ていようか。[9] 本詩の and の多用について Vendler は「このandの連続は、舌がもつれたようで「雄弁」とはまるで言えない（中略）まるで仮面劇の役者が一人一人舞台を過ぎて行く時に、（詩の読者の）同時代人で似ている人の顔を思い浮かべた時にのみ、この詩が生き生きとしたものになるのだ」と述べているのは傾聴に値する。[10]

次節で論じるのは機能語の繰り返しで、同一接続詞が行頭に繰り返される事例を比較する。繰り返される語は4部構成（1-4, 5-8, 9-12, 13-14）の各連冒頭に典型的に現れることを確認しておく。例えば、疑問詞whyが3度繰り返される第67篇では、第2四行連句冒頭の5行目と7行目、第3四行連句の冒頭9行目冒頭のwhyが2行、2行、4行の疑問文を導いている。

§ when と then の繰り返し

周知のとおりShakespeareのSonnetsのほとんどが、第1四行連句から第3四行連句までの12行と、そこで述べられた内容をまとめる、ないし逆転させる最終二行の4部構成を取っているので、接続詞whenの導く従属節と、それを受けるthenが導く主節は各連の冒頭に現れることが多い。154篇中でwhenで始まるのは10篇あり（第2, 12, 15, 29, 30, 43, 64, 88, 106, 138編）、第1四行連と第2連の冒頭がwhen-thenで呼応する単純な形式は第2編に見える。

II.
When forty winters shall besiege thy brow,
And dig deep trenches in thy beauty's field,
Thy youth's proud livery so gazed on now
Will be a tattered weed of small worth held:
Then, being asked **where** all thy beauty lies,
Where all the treasure of thy lusty days,
To say within thine own deep-sunken eyes
Were an all-eating shame, and thriftless praise.
How much more praise deserv'd thy beauty's use
If thou couldst answer 'This fair child of mine
Shall sum my count, and make my old excuse',
Proving his beauty by succession thine.
This were to be new made **when** thou art old,
And see thy blood warm **when** thou feel'st it cold.

第1四行連句の内容を受ける第2連がthenで始まると、すぐに疑問詞whereの繰り返し "Ubi sunt" の変奏に引き継がれ、青年が老いて、消えてしまった美の在処が問われる、と「その時に」「我が子に引き継がれたのだよ」と言うことこそ、今の青年の美の証しとなるのだという主張がwhen-then, where-where の枠組みで提示されて、最終連の when 節の繰り返しで「あなたが老いた時」という時間設定が中心テーマであると再確認されるわけである。

さて、この構造は次にあげる第106編にも見られ、when と then がともに "I see" という主語と動詞を導いて平行構造をなし、第11行と13行の "they looked" と "we…behold" に視覚動詞のヴァリ―ションで引き継がれている。この「私が～を見る時」という措辞は、後で見るように、第12篇、第15編あたりから現れて、第64篇で完了形の3度の繰り返しとなって最高度に達する。第1行の "wasted time" に注意しておこう。

CVI.
When in the chronicle of <u>wasted</u> time
<u>I see</u> descriptions of the fairest wights,
And beauty making beautiful old rhyme
In praise of ladies dead, and lovely knights;
Then in the blazon of sweet beauty's best,

[9] 大場 (p. 148) は「*Lear* 3.2, 嵐の場を締めくくる Fool の 'prophecy' の戯れ歌を思い浮かべる」と言う。
[10] "The sonnet "comes alive" only if readers "animate" it by reflecting, as each character in the masque passes by, on the contemporary face they would attach to each personage." (*The Art of Shakespeare's Sonnets.* 1997, p. 310)

Of hand, of foot, of lip, of eye, of brow,
I see their antique pen would have expressed
Even such a beauty as you master now.
So all their praises are but prophecies
Of this our time, all you prefiguring,
And, for they looked but with divining eyes,
They had not skill enough your worth to sing:
For we, which now behold these present days,
Have eyes to wonder, but lack tongues to praise.

この第1四行連句と第2連句の構造が一段階複雑になったものが、第2連冒頭にwhenが繰り返されて2つの四行連句従属節が第3連句冒頭のthenに引き継がれる第15編、第2第3四行連句冒頭にthenが繰り返される第30編である。

XV.
When I consider every thing that grows
Holds in perfection but a little moment;
That this huge stage presenteth naught but shows,
Whereon the stars in secret influence comment;
When I perceive that men as plants increase,
Cheered and checked even by the self-same sky,
Vaunt in their youthful sap, at height decrease,
And wear their brave state out of memory;
Then the conceit of this inconstant stay
Sets you most rich in youth before my sight,
Where wasteful **time** debateth with decay
To change your day of youth to sullied night,
And all in war with **Time** for love of you,
As he takes from you, I engraft you new.

第 15 篇では第 1 連と第 2 連が 4 行ずつで形作る従属節を第 3 連の第 9 行 Then が主節で受けて、最終連での切れ目がなく、前半 8 行と後半 6 行の 2 部構成を成している。ここでは名詞 time が第 11 行と 13 行で繰り返されており、初めの方に wasteful という形容辞が付いているが 1609 年版、Borrow の校訂でも小文字表記であり、13 行の Time は擬人化を明示した大文字表記であることを確認したい。第 19 篇の議論参照。

一見似ているが、さらに複雑な統語構造を示すのは第 30 篇である。

XXX.
When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
And with old woes new wail my dear **time's** waste;
Then can I drown an eye (unused to flow)
For precious friends hid in death's dateless night,
And weep afresh love's long-since-cancelled woe,
And moan th' expense of many a vanished sight;
Then can I grieve at grievances fore-gone,
And heavily from woe to woe tell o'er
The sad account of fore-bemoaned moan,
Which I new pay as if not paid before.
But if the while I think on thee (dear friend)
All losses are restored and sorrows end.

ここでは後出の、より複雑な when と then の繰り返しに見られる統語的特徴が既に表れている。それは "When I consider…" "When I perceive…" や "When I summon up remembrance" "Then can I

drown an eye” “Then can I grieve” のように主語を揃えて、述語部分（動詞と目的語）をヴァリエーションで変化させる手法である。第 1 四行連句内では第 1-2 行の従属節を第 3-4 行の主節が“I sigh”で受けており、これが第 5 行 “Then can I drown an eye” と同じ主語 I に続く weep （第 7 行）、moan（第 8 行）、第 9 行“Then can I grieve”に連なって、「溜息をつく」「涙を流す」「悲しむ」という悲哀のヴァリエーション表現を提示するが、第 2 四行連句と第 3 連が第 1 連の主節として並列・進行しているのか、第 3-4 行の内容の拡大的言い換えであるのか、読み方は定められない。この統語構造の曖昧・混乱は、数々の悲しみに思い巡らし、数え立てて沈み込む精神状態を写しているような効果がないだろうか。この似ている統語形式の第 15 編と 30 篇を並べて読めば、時（の神）Time に付く常套形容辞 waste(ful) が「何物をも荒廃させる・衰えさせる」の意味から「数々の悲哀で時を無駄に過ごしてしまった」という意味に変化していることが掴める。この第 30 篇については次の大森論で、その逆転のレトリックが論じられているので参照されたい。

次の第 43 篇では when が行頭で 3 回、行中で 2 回出るが、「昼と夜、いずれにおいて詩人は美青年の姿を鮮明に見ることが出来るか」という時に関わる問に、時の副詞 when が多用されていることを指摘したい。「昼夜」の言い換えとして [ait] の母音韻で結ばれた名詞・形容詞 bright, light, night, sight(less) が 10 回繰り返されて、when の繰り返しと交互に響くのが本詩の音韻効果である。

XLIII.
When most I wink, **then** do mine eyes best see,
For all the day they view things unrespected,
But **when** I sleep, in dreams they look on thee,
And darkly <u>bright</u>, are <u>bright</u> in dark directed.
Then thou, whose shadow shadows doth make <u>bright</u>,
How would thy shadow’s form form happy show,
To the clear day with thy much clearer <u>light</u>,
When to unseeing eyes thy shade shines so?
How would (I say) mine eyes be blessed made
By looking on thee in the living day,
When in dead <u>night</u> thy fair imperfect shade
Through heavy sleep on <u>sightless</u> eyes doth stay?
All days are <u>nights</u> to see till I see thee,
And <u>nights</u> <u>bright</u> days **when** dreams do show thee me.

次に見るのは第 1 行、第 3 行、第 5 行で when が導く従属節が 3 度繰り返されて、それらを受ける Then の主節が第 3 四行連句まで持ち越された例で、かつ最終行にまた when が出て来るのだが、その遅延と繰り返しの効果はいかなるものであろうか。

XII.
When <u>I do count</u> the clock that tells the **time**,
And <u>see</u> the brave day sunk in hideous night;
When <u>I behold</u> the violet past prime,
And sable curls, all silvered o’er with white;
When lofty trees <u>I see</u> barren of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer’s green all girded up in sheaves,
Borne on the bier with white and bristly beard,
Then of thy beauty <u>do I question make</u>,
That thou among <u>the wastes of **time**</u> must go,
Since sweets and beauties do themselves forsake,
And die as fast as they see others grow,
And nothing ’gainst <u>**Time’s** scythe</u> can make defence
Save breed to brave him **when** he takes thee hence.

この第 12 篇は最後に論じる第 64 番とともに、 “when-then” の繰り返しパタンが「時による破壊と変化」という主題と結びついて、154 篇中で最高度に展開されていると私は見る。まず注目すべ

きは、第 1 行で聞こえる “count the clock that tells the time” の[k]音 3 回、[t]音 4 回、時計の ticktack 音の模写で、これは Vendler も大場も指摘している。ここを導く when 以下の主語 I に続く動詞 “I do count” は、 “and (I) see” “I behold” “I see” と聴覚から視覚へ移行する。この “When I see” は第 15 番、第 30 番と同じ。3 度繰り返される名詞 time は第 1 行では、「(時計の刻む) 時刻」、第 10 行では「時間」、第 13 行で「時の神」として擬人化され、詩人の格闘の相手として立ち上がるのだ。この流れは typographical の形でも示されており、1609 年版では、小文字、小文字、大文字として印刷しており、校訂者 Burrow はその通りにしている。

最終行半ばで when が再出するのは前の第 43 篇と同じである。第 43 篇では「昼と夜、いずれにおいて私は貴方の姿をはっきり見るのか」という問いと自答に、最終的に結論づけるのがこの最終節となっている。第 12 篇の方では、あたかも詩人の愛する青年の生涯の最後の時と一致するが如く、最終行の最終節に現れている。両者とも、14 行中で when が先行して何度も鳴り響くことにより、極めて繊細でかつ持続的な愛情の確認、その音表象となっていないだろうか。

そして when と then が各四行連句の初めに繰り返されて variation による変奏を成す高度の構成を持つのが第 64 編である。この詩で then が用いられないのは何故か。

LXIV.
When I have seen by **Time's** fell hand defaced
The rich proud cost of outworn buried age,
When sometime lofty towers I see down razed
And brass eternal slave to mortal rage;
When I have seen the hungry ocean gain
Advantage on the kingdom of the shore,
And the firm soil win of the wat'ry main,
Increasing store with loss, and loss with store;
When I have seen such interchange of state,
Or state itself confounded to decay,
Ruin hath taught me thus to ruminate,
That **Time** will come and take my love away.
This thought is as a death which cannot choose
But weep to have that which it fears to lose.

この第64篇は、第12篇と全く同じく、第1行、第3行、第5行にwhenが3度繰り返されているが、第12篇でそれら3個の従属節を9行目のthenが受けて構造を成している一方、第64篇では再び切れ目の9行目にwhenが繰り返されて、thenが導くはずの主節、つまり主意は第11～12行 “Ruin hath taught me thus to ruminate/ That Time will come and take my love away.”であることは、第1行が “When I have seen by Time's fell hand defaced” で始まって、この12行の冒頭と結尾に置かれた擬人化されたTimeがepanalepsisの構造で主題として強調されていることから明白である。この「時（による諸々の変化と消滅）」を印象付けるために「時」の接続詞whenが4回繰り返されているのは偶然ではない。先に見た第12篇では when に続く動詞が現在形で“I do count” “I behold” “I see”と言い換えられていたが、第64篇ではそのうちの動詞 see が完了形で3度繰り返されて、動詞部の言い換えと繰り返しの対照をなしている。さらには主題となる「時」time は第12篇では第1行、第10行、第13行に繰り返され、第64篇では第1行と第12行に現れて、ともに「包み込み構造」(envelop pattern) ないし「隔語句反復」 (epanalepsis) と言うべきパタンで強調されている。このレトリックの存在から、その主題とレトリックの変奏と言えるだろう。冒頭の “Time's fell hand” のイメージは第12行の “take my love away” に繋がって、「時の神の残酷な手によって、私の愛する人が連れ去られる時」という言辞を形作る。で、初めの疑問に戻るが、これらのwhenに導かれた従属節は、結果を示す主節に引き取られず、宙ぶらりんとなっている。それは最終2行の内容「その時のことを考えただけで死んだも同然となる私は、失いたくなくて泣くばかりである」で知れる。どうなるか全くわからないから、thenで引き取って述べることができないのである。

第12篇との関連で述べなければならないことは1609年版での印刷表記である。先に述べたBurrow版のように、第12篇第13行は “Times sieth”[ママ]「時の大鎌」と大文字表記であるが、第64篇第1行では “times fell hand” と小文字表記になっている。ここを多くの校訂者は大文字表記にし

て擬人化を明示している。比較すべきは同想「時の破壊」のテーマを歌った第60篇で、こちらでは擬人化された「時」は第8行と9行に登場し、第8行では行頭 And の後で小文字表記、第9行では行頭で大文字になっている。第60篇では第12行に "his sieth to mow" 、第14行に "his cruell hand" と「時の神の大鎌」と「時の神の残酷な手」の両方が揃っているが、もちろんhisは小文字表記。で、結論であるが、第12篇の "Time's scythe" は、時の神の持ち物 (attribute) と共起しているから擬人化、大文字表記が当然であり、「時の手」と身体部位名が出れば、やはり擬人化を明示するため、現代校訂版では大文字表記が適当であろう。上で示した解釈も、大文字表記の Time が第1行と第12行に出て epanalepsis を構成する意味を説明している。[11]

このように接続詞 when と then が、特に 4 部構成の各部冒頭に繰り返される篇を続けて読んでみれば、名詞 time が頻出すること、「時の神」「時間」「時代」「世相」「時刻」のように 1 篇中で異なる意味で用いられていること、他の実詞も並行して繰り返されている場合が多いこと、waste の概念が顕著であること（XII, XV, XXX, CIV）、「私が～を見る時」という措辞が共通していること（XII, LXIV, CVI）がわかる。時の接続詞・疑問詞 when や副詞 then が多用されるのが「時」time を歌う詩であることは、もっともな事だろう。

結論であるが、本論の引用が基づく版の校訂者 Colin Burrow が『ソネット集研究ガイド』(2007) に寄せた論文から、まず引用する。

"The sonnets invite close inward attention. Their language seems to slip in sense from line to line and from phrase to phrase: probably if you do not find at least <u>four different currents of meaning in each line</u> you have missed something, and even if you find more than four you probably still have missed something." (p.145)

ここを初めて読んだ時には Burrow がその後ではっきりと書いていない「各行の意味の 4 種の流れ」とは何を指すのかわからなかった。大森文子教授の示唆で、Burrow がこの引用部の直前に自分を含めて最近の 4 名の校訂者とその版を挙げていることから、「校訂者は自らの読みを込めたソネット集を校訂提供している」その、それぞれの読み方を指すらしいことがわかった。[12] しかし私は、ここまで繰り返しの諸相を再考して来て、その言葉を自分流に解釈し、ソネット集では、1) 音韻による繰り返し、2) 語による繰り返し、3) 文法構造・措辞による繰り返しが並行・錯綜し、4) これらは何度も現れて幾つかの主題を繰り返し、強調しているのである、と考える便としたい。

---

[11] 第 60 篇の "cruel hand"と第 12 篇の"fell hand"を見て思い出されるのは、戯曲 *Twelfth Night* の 1 幕 1 場で Orsino 公爵が「Olivia 姫を一目見てから、残酷な猟犬が牡鹿 (hart) を追い詰めるように、私の心 (heart) は欲望に駆り立てられている」との台詞で、 "That instant was I turned into a hart, And my desires, like fell and cruel hounds, E'er since pursue me." (Dover Wilson 版より引用) と類義形容詞 fell と cruel が binominal で使われることである。

[12] 大森教授の示唆（読み）は校訂本に対する批評眼を持つために有益であるので、ここに引用する。
「これは Editing the Sonnets というタイトルがついたチャプターで、「シェイクスピアの Sonnets が、編者の手にかかることにより、『編者の sonnets』になる」という観点から、現代の Editor の名前を 4 名（Kerrigan, Vendler, Burrow, Duncan-Jones）挙げ、目の前のテクストに対する critical attitude を読者に勧めており、「Editor というものはテクストに対して恐ろしいことをするもので、それが彼らの仕事だ」（Editors do dreadful things to texts. That is their job.）と述べ、 「私たちは彼らが principle にのっとってその仕事をしたことを期待し、テクストに何をしたのかを明らかにしてほしいと期待する」というのが直前の文脈です。そこから考えたのは、Burrow は編者がテクストに加える変更によってテクスト自体の意味が変わる、読者はそれを意識しなければならないということを言おうとしており、…probably if you do not find at least <u>four different currents of meaning in each line</u> you have missed something, and even if you find more than four you probably still have missed something. というのは、「読者は（現代は上記のように少なくとも編者が 4 名はいるのだから、それぞれの）少なくとも異なる 4 つの意味の流れを把握することができなければ、何かを見落としていることになるのであり、(4 名分の）4 通りの意味以上の異なる意味を見つけられたとしても、それでもおそらくまだ何かを見落としているのだ。」ということでしょう。」

参考文献

Allot, Robert, 1600. *England's Parnassus.* (1970) Scoler Press Limited.
Booth, Stephan, 1978. *Shakespeare's Sonnets*. (Revised Edition) Yale University Press.
-----, 2007. "The Value of the sonnets" In Schoenfeldt (2007) pp. 15-26.
Burrow, Colin ed., 2002. *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford University Press.
-----, 2007. "Editing the Sonnets" In Schoenfeldt (2007) pp. 145-162.
Duncan-Jones, Katherine, ed., 1997. *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.
Friedrich, Otto, 1985. "Shall I Die? Shall I Fly…: A US scholar claims discovery of a poem by Shakespeare," *Time Magazine*. December 9, 1985, p. 34.
Gollancz, Israel, 1919. *Shakespeare's Sonnets* (Temple Shakespeare). J. M. Dent.
Poole, Joshua, 1657. *The English Parnassus.* The Facsimile Reprint. (1972) Scoler Press Limited.
Post, Jonathan F. S., 2017. Shakespeare's Sonnets and Poems (A Very Short Introduction). Oxford University Press.
Rubinstein, Frankie, 1989. *Shakespeare's Sexual Puns and Their Significance*. (Second Edition) Macmillan.
Schoenfeldt, Michael, ed., 2007. *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. Blackwell.
Taylor, Gary, 1985. "Some Manuscripts of Shakespeare's Sonnets." Bulletin of the John Rylands Library. 68, pp.210-46.
Tilly, Morris Palmer, 1950. *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries.* University of Michigan Press.
Vendler, Helen, 1997. *The Art of Shakespeare's Sonnet*. Harvard University Press.
-----, 2007. "Formal Pleasure in the *Sonnets*" In Schoenfeldt (2007) pp. 27-44.
Wilson, John Dover, 1966. *The Sonnets.* Cambridge University Press.
Wyld, Henry Cecil, 1923. *Studies in English Rhymes from Surry to Pope*. Russell and Russell.

大場建治編注訳. 2018.『ソネット詩集』（研究社シェイクスピア全集別巻）東京：研究社.
大森文子 2018a.「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
------ 2018b.「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1 』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104.
川西進編 1971. 『*Shakespeare's Sonnets*』鶴見書店.
櫻井正一郎 1979.『結句有情―英国ルネサンス期ソネット論―』京都：山口書店.
高松雄一訳 1986. 『ソネット集』岩波文庫.
柴田稔彦編　2004. 『対訳　シェイクスピア詩集　イギリス詩人選 (1) 』岩波文庫.
中西信太郎訳 1976. 『ソネット集』英宝社.
藤澤博康　2012.「『ソネット集』における嗅覚」『英語英文學研究』広島大学英文学会 pp. 27-38.
嶺卓二編注 1974. *Sonnets by William Shakespeare.* 東京：研究社.
吉田健一訳 2007. 『シェイクスピア／シェイクスピア詩集』東京：平凡社.
吉田秀夫生訳 2008. 『シェイクスピアの「ソネット集」』南雲堂.
渡辺秀樹 2004.「人名のメタファー研究序章　シェイクスピア劇の登場人物名に由来する *OED2* の見出し語と用例考察」『メタファー研究の方法と射程（言語文化共同研究プロジェクト 2003）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科 23-33.
----- 2019.「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科 1-10.

Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック

大森文子

１．はじめに[1]

「シェイクスピアの『ソネット集』は怖ろしい詩集である。」と川西進は嘆ずる。「人間の奥にひそむ醜さ、弱さ、愚かしさをシェイクスピアがひるむことなく露わにしてゆくのが、生身を剥がれるように耐え難く思われるからである。」（川西 1971、p. i）。154 篇からなるこの詩集では、全篇を通して詩人が 1 人称で愛を語るが、1 番から 126 番までは美貌の青年への愛、127 番以降は “Dark Lady”（黒い婦人）と称される女性への愛が描かれ、愛の喜びと逢えない悲しみ、青年の心変わりに対する恨みや嫉妬、黒い婦人と青年が関係をもつという二重の裏切りに対する苦悩など、詩人の心情が赤裸々に語られる。

このように、描かれる恋愛感情は決して美しいだけのものではない。にもかかわらず、Shakespeare の *Sonnets* は美しく、恋愛詩の傑作であるとの読後感を読者に与える。川西は上の記述に続けて、「しかしシェイクスピアの『ソネット集』が極立って秀れているのは、そのようなどす黒い愛憎の葛藤の中で、ひたむきに正しく愛そうとする人間の姿を描きぬいているという所にある。」（ibid.）と述べる。情念渦巻く愛憎劇の中から、「ひたむきに正しく愛そう」とする人間の真摯な感情を浮き彫りにする詩人の筆力の源泉はどこにあるのだろうか。

吉田健一は、人生で最初に Shakespeare の 14 行詩に接したときのことを回想する。雑誌に載っていた香水か何かの広告で、英国風の景色の下に “And summer’s lease hath all too short a date:”（又、夏の期限が余りにも短いのを何とすればいいのか。）の一句が掲げてあるのを見て、「誰が書いたものか解らないままに、こんな秀抜な詩があるだらうかと思つた。」（吉田 2007、pp. 276-277）と述べている。吉田が挙げたこの詩行は、青年への愛を伸びやかな筆致で歌う “Shall I compare thee to a summer’s day?” で始まる有名な 18 番の一節である。「夏の一日よりも君の方がさらに美しく（lovely）穏やかだ（temperate）」と青年を讃美するこの詩に代表されるように、Shakespeare の *Sonnets* の特徴の一つは、豊かな比喩を用いた鮮やかな描写にある。154 篇全篇を通して読めば、上記のように、みずみずしく麗しい恋心のみならず、愛憎の暗く醜い側面も描かれているのであるが、そのようなネガティブな感情でさえも、それが豊かで的確な比喩を通して述べられることで、美しく説得力のある描写となってしまうのである。

Shakespeare の *Sonnets* を考察する際に考慮に入れるべきこととして、さらに挙げられるのは詩の構成である。ソネットとは 14 行からなる詩であり、Shakespeare のソネットは 3 つの四行連句（quatrain）と末尾の二行連句（couplet）で構成されている。櫻井（1979）は「ルネサンス期イギリスのソネットには、ペトラルカにはない独自な性質がいくつかあった。そのなかの一つに、最後の二行が必ずカプレットをなし、その二行が程度の差はあっても前の部分から分離独立し、歌全体に対して何らかの機能を持っているという性質があった。」（p.1）という観点から、ソネットにおけるカプレットの歴史と機能について詳細に研究している。

本稿は、このカプレットの機能の中から、特に詩の叙述内容を逆転させる機能に着目し、その逆転に説得力をもたせるためにメタファーが寄与しているという観点からシェイクスピアのいくつかのソネットの作品を考察したい。

２．ソネットにおける逆転

ソネットには押韻形式の異なるいくつかの種類がある。主要な 3 つの形式は、イタリア風あるいは Petrarch 風（八行連句（abbaabba）と六行連句（cdecde または cdcdcd）で構成）、四行連句と二行連句を組み合わせるイギリス風あるいは Shakespeare 風（abab cdcd efef gg）、および Spenser 風（abab bcbc cdcd ee）と呼ばれる。イタリアに起源をもつソネットをイギリスに導入したのは Wyatt（1503-42）で、英語の音韻体系に適した形式（abab cdcd efef gg）を確立したのは Surrey（1517-47）であった。この形式を最大限に開花させたのが Shakespeare である（Preminger

[1] 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹）、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」（研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子）。

and Brogan eds. 1993, pp. 1167-1169 参照)。

八行連句と六行連句の 2 部で構成されるイタリア風のソネットとは異なり、4 部構成のイギリス風のソネットは内容的にも柔軟性が高い。Vendler（1997, p. 22）は Shakespeare のソネットの 4 つの部分の論理関係について、successive and equal（継承）、hierarchical（階層）、contrastive（対照）、analogous（相似）、logically contradictory（論理矛盾）、successively "louder" or "softer"（漸増あるいは漸減）の 6 つの種類を挙げている。

ソネットにおけるこのような多様な論理構成に寄与するのが、カプレットと呼ばれる最終二行である。*A Companion to Shakespeare's Sonnets* の編者である Michael Schoenfeldt は、Introduction でシェイクスピアのソネットの形式がもつ「深く心地よいリズム」（the profoundly comforting rhythm）に言及している。最初の四行連句で問題や状況を特定し、続く 2 つの四行連句でそれについて述べ、最終カプレットで本質的なパラドックスを解決する、または再述する、または明示する（identifying a problem or situation in the first quatrain, discussing it in the two subsequent quatrains, and resolving, restating, or revealing an essential paradox in the couplet）という展開がもつリズムである。この一連の流れを読み進めるうちに、読者は最終カプレットに示された論理が避けがたい必然であることを納得させる雰囲気が徐々に強まるのを感じとるのだ（As one reads through the sequence, one senses a developing aura of logical inevitability about the final couplet）と Schoenfeldt は論じる（Schoenfeldt ed. 2007, p. 6）。

嶺（1974）はソネットの 3 つの四行連句と末尾のカプレットの関係について、「Shakespeare の場合、各 quatrain の終りに pause が来るのが普通で（63、99、154 のように 4 行目で切れないのは珍しい）、しかも、各 quatrain が同じ内容を異なった比喩を重ねて繰返し、第三 quatrain の終りで climax に達し、最後の couplet で締めくくる（時にはそれまでに述べてきたことをひっくり返す）という形を取ることがあるが、詩人の綿々とした恨みがましい気持をよくあらわしているように思う。」（嶺 1974、p. viii）と述べる。

櫻井（1979）はカプレットを「結句」と呼び、その機能についての Tucker Brooke (*Shakespeare's Sonnets* (Oxford University Press, 1936)) など諸家の分類をふまえた上で、ソネット全般における結句の機能を「要約（summary）」「逆転（reversion）」「追加（addition）」の 3 つに分類する。

カプレットの諸機能の中でも、最も興味深いのは「逆転」の機能であると筆者は考える。3 つの四行連句で一つの主題についての描写が展開され、上述の嶺（1974）が言うように第 3 四行連句の末尾でそれがクライマックスに達し、最後のカプレットでひっくり返るというダイナミックな論理構造により、読者に驚きと強い印象を与えるからである。このような逆転には「視線の方向を 180 度変えてしまう視座の激変」（櫻井 1979, p. 138）がある。

櫻井はシェイクスピアのソネットにおける「逆転」の結句を以下のように分類している。

	逆転の形状と機能	ソネット番号
(1)	接続詞に導かれることが多く、逆転される部分が直前の 2、3 行に限定された小規模なもの	3, 5, 17, 28, 32, 36, 60, 69, 92, 96, 98, 118, 127, 133, 139, 144, 149, 153, 154
(2)	接続詞に導かれて先行する 12 行全体を逆転するもの	7, 12, 19, 30, 33, 34, 42, 53, 65, 66, 74, 78, 86, 89, 121,130
(3)	接続詞に導かれないで（2）に等しい働きをするもの	62, 91

【表 1】Shakespeare の *Sonnets* における逆転の形状と機能（櫻井（1979）第 3 章に基づく）[2]

上記の櫻井の研究は、*Sonnets* の作品群を味読し、詳細な観察を通して分析したもので、その見解は説得力が高い。ただし、【表 1】に記載した分類について 2 点だけ指摘しておきたい。まず、*Sonnets* の中で結句で逆転が生じている作品のうち、若干数であるが櫻井が取り上げていないものがあり、たとえば本稿で後述する 24 番や 120 番は櫻井の分類にはない。もう 1 点

[2] 櫻井（1979, pp. 287-288）は上記の 3 分類において、Sonnet 98 番を（1）および（3）に入れているが、この詩のカプレットは "Yet seemed it winter still, and, you away, / As with your shadow I with these did play." であり、13 行目冒頭の "Yet" を接続詞と解釈するか否かで判断が揺れたことの表れかもしれない。しかし、他の詩で "Yet" から始まるカプレットが（1）や（2）に分類されている（19 番、33 番、127 番など）ので、98 番については（1）に分類するのが妥当だと考え、上記の表では（1）のみに入れた。

は、【表１】の（1）「接続詞に導かれることが多く、逆転される部分が直前の 2、3 行に限定された小規模なもの」と（2）「接続詞に導かれて先行する 12 行全体を逆転するもの」の境界線はさほど明瞭なものではないということである。たとえば本稿で後述する 60 番、133 番、153 番は、厳密に言えば確かに櫻井が述べるように、結句直前の数行の内容に対する逆転が起こっているとも言えるが、各詩の冒頭、第 1 四行連句から第 3 四行連句へとつながる一連の詩の語り（論理）の積み重ねを受けての逆転であることは否めない（後述の分析を参照されたい）。櫻井が（1）に当てはまるものと分類した他の作品の多くも、同様のことが言える。本稿では、（1）と（2）を厳密に峻別することなく、最終カプレットでそれまでの叙述からの逆転が生じている作品に着目する。

３．逆転のレトリック

ここからは、最終カプレットで内容の逆転が生じている詩の中からいくつかを選んで観察する。それらの詩は、ほとんどが 13 行目（まれに 14 行目）に逆接の接続詞あるいは副詞が用いられていると同時に、内容の逆転にメタファーが関与しているという特徴をもつ。本節では、逆接の語（but, yet, and yet, save など）の前を前項、後を後項と呼び、前項の内容（カプレットの前の 3 つの四行連句で記述されている）と後項の内容（カプレットで記述されている）をメタファーの観点から対比したい。

最終カプレットで逆転が生じる詩群では、前項と後項のメタファーを用いたレトリックに次のような特徴が見られる。

（1）前項のメタファーを後項で否定する
（2）前項のメタファーの含意を否定する
（3）前項とまったく異なるメタファーを後項で導入する
（4）前項のメタファーに対抗するメタファーを後項で導入する
（5）前項のメタファーを保持しながら後項では新たな概念要素を追加する

以下では、これらのレトリックの特徴について、具体例を観察しながら順次考察していく。なお、本稿で取り上げる Shakespeare の *Sonnets* のテクストは Burrow (ed., 2002) から引用した。引用中の太字は筆者による。また日本語訳は高松（1986）に依った。

3.1　前項のメタファーを後項で否定する

まず、詩の中で用いられたメタファーを最終のカプレットで否定する詩を観察する。

130 番

My mistress' eyes are nothing like the sun,	私の女の目は太陽などとは比べものにもならぬ。
Coral is far more red than her lips' red:	あれの唇の赤らみより、珊瑚のほうがはるかに赤い。
If snow be white, why then her breasts are dun;	雪が白ければ、あれの乳房はさしずめ薄墨いろか。
If hairs be wires, black wires grow on her head.	髪が針金なら、あれの頭には黒い針金が生えているわけだ。
I have seen roses damasked, red and white,	赤や、白や、色混ざりの薔薇を見たことはある。だが、
But no such roses see I in her cheeks,	あれの頬にそんな薔薇が咲くのはいっこう見かけない。
And in some perfumes is there more delight	香水のなかにだって、あれの吐く息よりは
Than in the breath that from my mistress reeks.	もっとかぐわしい香りをはなつのがある。
I love to hear her speak, yet well I know	あれが喋る声を聞くのは好きだが、音楽のほうに
That music hath a far more pleasing sound.	ずっと妙なる響きがあるのは私もよく承知している。
I grant I never saw a goddess go:	たしかに、私は女神が歩むのを見たことはない、
My mistress when she walks treads on the ground.	私の女が歩く時は大地を踏みしめて歩くのだから。
And yet, by heaven, I think my love as rare	だが神かけて言おう、わが恋人は、勝手な比較を操って
As any she belied with false compare.	でっち上げたどの女に比べても、見事ひけはとらぬ。

吉田（2007、p. 282）が「これはシェイクスピアが喜劇作者でもあつたことを思ひ出させてくれる佳篇である。」と称賛するこの 130 番には、恋人に対する誹謗に見えた言葉が最大級の賛辞に変わるという愉快な裏切りがある。この詩を冒頭から読み進めると、一見、自らの恋人が

外見・香り・声といったあらゆる側面において醜いと嘆いているかのように読めるが、最後まで読むと、実はそうではなく、恋人への強い賞揚へと逆転が生じており、逆接語 “And yet”（13 行目）までの前項に述べられていたことはすべて「ペトラルカ以来の文学的表現の慣習を揶揄したもの」（高松 1986、p. 267）であることがわかる。前項の 3 つの四行連句では、従来の詩において女性の目の輝きの喩えとして用いられる太陽（sun）、唇の色の喩えとなる赤い珊瑚（coral）、肌の色の喩えとなる白い雪（snow）、髪の色の喩えとなる金の針金（wires）[3]、頬の色の喩えとなる薔薇（roses）、息の香しさの喩えとなる香水（perfumes）、声の喩えとなる音楽（music）、姿の喩えとなる女神（goddess）が挙げられ、詩人の恋人はそのどれとも似ていないことが述べられている。ここからは〈美しい女性は美しい自然物／人工物／女神である〉という慣習的なメタファーが浮かび上がる。このメタファーは、〈美しい女性〉という目標領域と〈美しい自然物／人工物／女神〉という根源領域とを結びつける（すなわち 2 領域間に写像関係を成立させる）ものである。詩人は、前項では恋人がどの側面を取ってもこのメタファーにことごとく該当しないことを述べた後で、後項ではこのメタファーそのものが「勝手な比較」（false compare）だと断定している。[4] すなわち、目標領域である〈美しい女性〉に、〈美しい自然物／人工物／女神〉などという根源領域を結びつけること自体が誤りであるという判断を示している。そのようなメタファーを用いた女性の描写は「でっち上げ」られた（belied）ものであり、自分の恋人はそのような女性の誰にも引けをとらないと述べることで、前項のメタファーの根源領域を超える美の存在を示唆していると言える。

次の 153 番では、前項のメタファーの根源領域を後項で否定し、逆の意味の根源領域を導入する。

153 番

Cupid laid by his brand and fell asleep.	愛の神キューピッドが松明をかたわらに眠り込んだ。
A maid of Dian’s this advantage found,	純潔の女神ダイアナの侍女が、そのすきに、
And his love-kindling fire did quickly steep	恋心をかきたてるこの松明を引っつかみ、いきなり、
In a cold valley-fountain of that ground,	ちかくの谷間の冷たい泉につっこんだ。
Which borrowed from this holy fire of love	泉は、愛の神のものなるこの神聖な焔から、
A dateless lively heat still to endure,	永劫の活気にあふれて変ることなき熱をもらい、
And grew a seething bath, which yet men prove	沸きたぎる温泉に変じ、かくて、重病難病をいやす
Against strange maladies a sovereign cure.	効験あらたかな薬湯となったのは、今も人の知るとおり。
But at my mistress’ eye love’s brand new fired,	ところが、愛の神の松明はわが恋人の眼からまた火種を得た。
The boy for trial needs would touch my breast.	しかも、この少年、試しに私の胸を灼いてみねば気がすまぬ。
I, sick withal, the help of bath desired,	おかげで私は病いを得て、温泉の助けをかりようと、
And thither hied, a sad distempered guest,	急ぎこの土地を訪れ、あわれな患い客となったが、
But found no cure; the bath for my help lies	治療のすべはなかった。私をいやす温泉は、新たに
Where Cupid got new fire: my mistress’ eyes.	キューピッドが火を得たところ、つまり我が恋人の眼だ。

この詩の 3 つの四行連句では、キューピッドの松明の熱で泉は万病に効く温泉となり、泉に浸されて火の消えた松明は恋人の眼から火種を得て再燃し、その松明に胸を灼かれて病となった詩人は治療のためにその温泉を訪れたという物語が語られる。この物語は〈恋は火である〉というメタファーに基づいている。恋愛の神であるキューピッドが松明を持つことは、このメタファーを象徴している。キューピッドのいたずらで胸を灼かれた詩人の心情は、〈恋患いは火傷である〉や〈恋煩いの原因はキューピッドの松明である〉というメタファーで表すことができ、これらは〈恋は火である〉の下位メタファーと位置づけられる。もう一つ、〈恋は火であ

[3] この喩えは金の針金が髪飾りによく用いられたことに基づいており、ゆえにここでは金の針金が金色の髪の喩えとして使われていると考えられる（Duncan-Jones, ed., 1997, p. 374 参照）。川西（編注 1971, pp. 155-156）は wires について「髪の形容によく使われた言葉。「針金」という言葉の持つ語感とは異なる。」と述べ、Spenser *Epithalamion* (1595) から ‘Her long loose yellow locks like golden wire.’ という用例を引用している。

[4] Shakespeare は同様の発想を Sonnet 21 でも表現している。21 番では他の詩人が女性を太陽、月、宝石、花などに喩えてその美しさを賛美する比喩表現を批判し、「私の恋人は、天空にかかるあの黄金の蝋燭ほどには明るく輝きはしないが、とにかく、どんな人にも負けない美しさはある」（“my love is as fair / As any mother’s child, though not so bright / As those gold candles fixed in heaven’s air:（ll. 10-12））と述べる。

る〉の下位メタファーとして注目したいのは〈恋人の眼は火傷をもたらす松明の火種である〉で、これが最終カプレットにおける逆転に関与している。最終カプレットでは、詩人が訪れた温泉には何の効き目もなく、療治のために有効なのは実は恋人の眼であるという発見が記される。前項の下位メタファーで〈恋人の眼〉と写像関係が成立していた〈火傷をもたらす松明の火種〉は、〈恋煩いを起こすもの〉と特徴づけることができるが、後項ではこの概念が退けられ、〈恋人の眼は効能ある温泉である〉という新たなメタファーが提示される。ここで〈恋人の眼〉と新たに写像を結ぶ〈効能ある温泉〉は〈恋煩いを癒すもの〉と特徴づけられ、前項における〈恋煩いを起こすもの〉という特徴づけからの逆転が生じている。

3.2　前項のメタファーの含意を否定する

前節で観察したのは、前項で示されたメタファーを否定する、あるいは逆の内容のものに置き換えるという技法であった。次に見るのは、前項のメタファーそのものは保持しておいて、そのメタファーの持つ含意を否定するというものである。

33 番

Full many a glorious morning have I seen	私はこれまでに何度も見てきた、光まばゆい朝が
Flatter the mountain tops with sovereign eye,	王者の眼ざしを投げかけて山の嶺々をはげまし、
Kissing with golden face the meadows green,	金いろの顔をみせてみどりの牧場に接吻をおくり、
Gilding pale streams with heavenly alchemy,	天空の錬金術をもって鉛いろの流れを金に変えるのを。
Anon permit the basest clouds to ride	だが、やがて真黒な雲がわきあがって、
With ugly rack on his celestial face,	醜いちぎれ雲となり、天の顔をおおい、とまどう世間から
And from the forlorn world his visage hide,	玉顔をおしかくすと、その汚辱をすすぎもせず、
Stealing unseen to west with this disgrace:	姿を見せることなく、こっそり西へいくのも私は見てきた。
Even so my sun one early morn did shine	私の太陽もこれとおなじで、ある朝はやく、
With all triumphant splendour on my brow;	まばゆいばかりの光輝をはなって私の顔にかがやいた。
But out alack, he was but one hour mine,	だが、なんということ、わがものであったのは一時間ほど、
The region cloud hath masked him from me now.	いまは空の雲が彼の顔を私からかくしてしまった。
Yet him for this my love no whit disdaineth:	だからといって、私の愛はいささかも彼を蔑むことはない。
Suns of the world may stain, when heaven's sun staineth.	天の太陽が曇るならこの世の太陽だって輝きを失おう。

33 番ではまず 2 つの四行連句で、朝の太陽があたりを照らす様子、黒雲の後ろに隠れる様子が描かれ、第 3 四行連句では詩人の愛する青年が詩人に心を寄せ、やがてその心が詩人から離れる様子が太陽になぞらえて描かれる。この 3 つの四行連句の描写は〈心は天気である〉というメタファーに基づいており、〈青年の心の変化〉が〈天気の変化〉に対応している。この 2 つの領域の描き方に共通することは、太陽はまばゆく輝いてまわりを照らすことが正常な状態で、雲に隠れることは異常事態であり、同様に「私の太陽」（my sun）である青年も私に愛情を注ぐのが正常、心変わりするのは異常だという含意である（その含意は、"the forlorn world"（7 行目）や "out alack"（11 行目）に表出されている[5]）。最終カプレットでは "Yet" の後、その含意が否定され、天の太陽が曇るのは異常事態ではなく当然のことだから、それならば恋人が心変わりするのも当然ありうることだ（14 行目）と詩人の認識が改められる。〈心は天気である〉というメタファーおよびその下位メタファーの〈心変わりする恋人はかげる太陽である〉が詩全体を通して保持され、そのメタファーのもつ含意だけが後項で削除されるのである。

133 番

Beshrew that heart that makes my heart to groan	わが友と、私にあれほど深い手傷を負わせて、
For that deep wound it gives my friend and me.	わが心を呻かせる、あの心に禍いふりかかれ。
Is't not enough to torture me alone,	私ひとりを痛めつけるだけではたりずに、
But slave to slavery my sweet'st friend must be?	わが優しき友まで奴隷の身におとさねば気がすまぬのか。
Me from myself thy cruel eye hath taken,	その残酷な眼は私自身から私を奪いとり、そのうえ
And my next self thou harder hast engrossèd.	なお無情にも、第二の我なる友を虜にした。

[5] 嶺（1996, p. 115）は "forlorn" について「太陽の光を奪われて当惑する人間界をさす」と解釈する。Burrow（ed., 2002, p. 446）は "out alack" を "an exclamation of despair" であると述べる。

Of him, myself, and thee I am forsaken,	私は友にも、私自身にも、おまえにも見すてられた。
A torment thrice threefold thus to be crossèd.	こんな目にあうなんて九層倍もの拷問を受けるにひとしい。
Prison my heart in thy steel bosom's ward,	私の心はおまえの鉄の胸の牢獄に押しこめられても、
But then my friend's heart let my poor heart bail,	わが友の心は私のあわれな心に収監しておきたい。
Whoe'er keeps me, let my heart be his guard;	誰が私を牢に繋いでも、私の心は友の独房にしておこう。
Thou canst not then use rigour in my jail.	私の牢屋でならおまえも酷い仕打にはでられまい。
And yet thou wilt, for I, being pent in thee,	でも、やはりだめか。おまえに繋がれた私も、
Perforce am thine, and all that is in me.	私のなかのすべても、否応なくおまえのものだから。

133 番に示されるメタファーは〈愛は牢獄である〉というメタファーである。詩人が "thou" と呼びかけるのは Dark Lady で、この女性に詩人も、詩人の友である青年もともに心を奪われる。その様子を、詩人は鉄の牢獄（thy steel bosom's ward（9 行目））に拘束された奴隷（slavery（4 行目））の比喩で描く。詩人は、自分自身の心にも牢獄を作り、友の心だけでも自分の心に収監し、女性による友への酷い仕打ちを防ごうとする。ここでは〈女の愛〉と〈私を収監する牢獄〉の間に、また〈私の愛〉と〈友を収監する牢獄〉の間に対応関係が成立している。〈女の愛〉は、愛する相手を支配し、相手の自由を奪い、隷属させ、酷い仕打ちをするという点で〈牢獄〉に対応しており、一方〈私の愛〉は相手を守り、第三者からの危害を防ごうとするという点で〈牢獄〉に対応する。〈心は容器である〉（Lakoff 1987, p. 450 参照）というメタファー認識は広く知られているが、〈牢獄〉の概念も〈容器〉のイメージスキーマ（Lakoff 1987, pp. 272-273 参照）の構造をもち、容器の内と外の自由な移動や接触は不可能だという含意をもつ。すなわち、中に収監される囚人は外界と分離され、〈容器〉の外にいる人間が中に繋がれた囚人に自由に接触することは不可能である。ところが、"And yet" の後項では、その含意が削除される。詩人は、詩人の心の牢獄にいる友もろとも、女性の心の牢獄に収監されている（つまり 2 つの牢獄は入れ子構造になっている）わけであるから、女性は自分の支配下にあるものすべてに自由に酷い制裁を加える（use rigour）ことができる。その結果、詩人がせっかく自らの心に作った牢獄が、〈容器〉としての十分な機能を果たさないという逆転が生じるのである。

3.3　前項とまったく異なるメタファーを後項で導入する

ここでは、前項に登場したメタファーが後項では継続されず、まったく異なるメタファーが後項で導入されることにより前項の内容を逆転させる例を観察する。

120 番

That you were once unkind befriends me now,	かつてきみに冷たくされたのが、いまは私の役にたつ。
And for that sorrow, which I then did feel,	あの時に味わった、あの悲しみを知ればこそ、
Needs must I under my transgression bow,	わが罪の重さに押しひしがれずにはいられない。
Unless my nerves were brass or hammered steel.	この身は真鍮でも打ち鍛えた鋼鉄でもないのだから。
For if you were by my unkindness shaken,	私はきみの冷たい仕打に苦しんだが、きみも私のせいで
As I by yours, y' have passed a hell of time,	苦しんだのなら、やはり地獄のつらさを嘗めたはずだ。
And I, a tyrant, have no leisure taken	それなのに私は暴君同然、かつてきみに背かれたとき
To weigh how once I suffered in your crime.	どんなに自分が悩んだか、考えようともしていない。
O that our night of woe might have rememb'red	ああ、私たちが嘆いた夜を思えば、真の悲しみがいかに
My deepest sense how hard true sorrow hits,	人を打ちのめすのかわが心の奥底に甦ってもよかろうに。
And soon to you, as you to me then, tend'red	そして、あの時のきみのように、傷ついた胸を癒やす
The humble salve, which wounded bosoms fits!	つつましい弁明の軟膏をさしだしていいはずなのだ。
But that your trespass now becomes a fee;	でも、あのきみの罪が、いま、償いを支払ってくれるね。
Mine ransoms yours, and yours must ransom me.	私の罪がきみの罪を贖う、きみの罪も私を贖わねば。

120 番では、青年から裏切られた過去をもつ詩人が、今度は自分自身が青年を裏切ったことを後悔し[6]、罪の重さに打ちひしがれる様子が語られる。過去の青年の裏切りに自らが傷ついた

[6] Duncan-Jones（ed., 1997, p. 120）はこの 120 番の詩について "Reminding himself of how he felt when his friend betrayed him, the speaker finds pain in the recollection of his anguish, but comfort in the thought of his own forgiveness at that time, and hopes to receive equivalent forgiveness himself." と述べる。

ことを思い出し、真の悲しみがいかに人を打ちのめすか（how hard true sorrow hits（10 行目））を再認識する。そして、今は詩人自身に裏切られた青年の傷ついた心（wounded bosoms（12 行目））を思いやり、過去に青年がしてくれたのと同じように、つつましい詫びの言葉で、体の傷を治す軟膏（salve（12 行目））のように青年の心の傷を癒さねばならないと自らを責める。ここには、〈裏切りは傷害である〉というメタファーが機能している。裏切りは凶器のように人の心を打ちのめして〈負傷〉を与え、裏切りを詫びる行為は〈軟膏〉となって心に受けた負傷を治療する。一方、最終カプレットで描かれるのは、前項のように加害者が負傷者を軟膏で治療するという一方向的内容のメタファーではなく、過去と現在で加害者と被害者の立場が交替した二人の当事者を双方向的にからめた〈一方の罪は他方の罪の賠償金である〉という新たなメタファーである。過去の青年の裏切りが現在の詩人の裏切りへの賠償金となり、現在の詩人の裏切りが過去の青年の裏切りへの賠償金となる（すなわち、「おあいこ」（大場（編注訳 2018）p. 265 参照）である）という新たなメタファー認識により、自らの罪を加療を要する障害と認識して後悔に苛まれる心理状態から、双方の罪を、相手の罪を賠償する金銭的価値のあるものとして認める奇妙な肯定感情への逆転が巧みに描かれている。

3.4　前項のメタファーに対抗するメタファーを後項で導入する

次に見るのは、前項のメタファーに対抗するメタファーが後項で新たに導入される例である。

12 番

When I do count the clock that tells the time,	時をつげる時計の音をひとつひとつかぞえ、
And see the brave day sunk in hideous night;	輝かしい太陽がみにくい夜の闇にしずむのを見るとき、
When I behold the violet past prime,	さかりを過ぎさったすみれの花をながめ、
And sable curls all silvered o’er with white;	黒い捲毛がことごとく白銀におおわれるのを見るとき、
When lofty trees I see barren of leaves,	かつては家畜のむれを暑熱からさえぎってやった
Which erst from heat did canopy the herd,	大木が、葉を剥ぎとられ、裸になるのを見るとき、
And summer’s green all girded up in sheaves,	夏のみどりの大麦がたばねられ、紐でくくられ、
Borne on the bier with white and bristly beard:	白いこわいひげをさらして、手車で運ばれるのを見るとき、
Then of thy beauty do I question make,	そんなときに、私はきみの美しさを思い、こう考える。
That thou among the wastes of time must go,	きみも、時の荒廃から逃れるわけにはいかない、
Since sweets and beauties do themselves forsake,	やさしいものも、美しいものも、やがては衰頽して、
And die as fast as they see others grow,	ほかの美がそだつのを見ながら、同じ速さで死ぬのだ、と。
And nothing ’gainst Time’s scythe can make defence	時の神がきみをこの世から引っさらってゆくときに、
Save breed to brave him when he takes thee hence.	彼の大鎌をふせぎ立ち向うのは、子孫しかいない、と。

12 番では、沈む太陽、盛りを過ぎた菫、白銀に覆われる髪、葉を剥ぎ取られる大木、束ねられる大麦など、時の経過とともに滅んでいくものが列挙される。ここで描かれる真理は「やさしいものも、美しいものも、やがては衰退して死ぬ」（11-12 行目）、すなわち仏教で言う〈生者必滅〉にあたる事柄である。この要因となるのが擬人化された〈時〉で、〈大鎌〉（scythe）を持つ（13 行目）。〈時は刈り取る者〉[7] というメタファーに基づく描写である（12 番の擬人化された〈時〉の表記法については、本プロジェクト報告書の渡辺秀樹教授の論文を参照されたい）。

詩人の最大の関心事は、時の大鎌に刈り取られてすべてのものが滅びゆくという真理に、詩人が愛する青年も適用されてしまう（10 行目）ことである。残酷な時の大鎌の描写は最終カプレットに入っても続き、あたかも青年の生涯の終わりの時を表すかの如く[8]、14 行目になってやっと、大鎌を防ぐ（make defence）唯一の者として〈子孫〉（breed）が登場する。後項の〈子孫は時の大鎌を防ぐ者〉というメタファーが、前項に示された真理を逆転させるのである。

12 番のみならず、*Sonnets* では冒頭 1 番から青年に結婚して子孫を残すことを勧める内容の詩が続くが、17 番を境に、青年の美を永遠に保つ手段として、「詩人自身の詩」が登場する。

---

[7] Lakoff and Turner (1989, p. 41) は、〈時は刈り取る者〉（TIME IS A REAPER）というメタファーを、Shakespeare のソネット 116 番 (Love’s not Time’s fool, though rosy lips and cheeks / Within his bending sickle’s compass come. (ll. 9-10)) を例に出して論じている。

[8] 渡辺秀樹教授の示唆による。

19 番

Devouring Time, blunt thou the lion's paws,	すべてを食いつくす時よ、獅子の爪をすりへらすがいい、
And make the earth devour her own sweet brood,	大地におのがいとしい子供らを食らわせるがいい、
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,	獰猛な虎の顎からするどい牙をぬきとるがいい、
And burn the long-lived phoenix in her blood,	長命の不死鳥を生きたまま焼くがいい。
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,	駆けすぎながら、季節を楽しくも悲しくも変えるがいい、
And do whate'er thou wilt, swift-footed Time,	足の速い時よ、この広い世界や、もろもろのはかない美に
To the wide world and all her fading sweets:	勝手ほうだい手をつけるがいいさ。だが、ただひとつ、
But I forbid thee one most heinous crime,	もっとも忌わしい罪だけはおかしてはならない。ああ、
O carve not with thy hours my love's fair brow,	愛するものの涼やかな額におまえの時間を刻んでくれるな、
Nor draw no lines there with thine antique pen.	その奇怪なペンで線を書きつけてくれるな。
Him in thy course untainted do allow	彼だけは後世のひとにのこす美の規範と考えてくれ、
For beauty's pattern to succeeding men.	おまえが過ぎゆくときにも手をつけないでくれ。
Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,	だが、極悪の罪をおかさばおかせ、老いた時よ、どんな
My love shall in my verse ever live young.	危害を加えても、わが恋人はこの詩のなかでは永遠に若い。

19 番では、擬人化された時は、すべてを食い尽くし、万物を破壊する者として描かれる[9]（19 番の時の擬人化を表す形容辞については、本報告書の渡辺論文も参照されたい）。詩人は、時が美しい青年にも、その額に皺を刻むことを恐れている。ところが、前項の〈時は破壊する者である〉というメタファーに対し、後項では時の及ぼす危害から免れる可能性が示される。「この詩の中では」（in my verse）という表現には、詩が恋人の若い命を避難させる〈場所〉だという認識が示され、その場所にいる限り、恋人は永遠に若く、時の破壊を免れるのである。後項での〈詩は時からの避難場所である〉というメタファーが、前項のメタファーにより推論される〈生者必滅〉の概念に対抗し、時の及ぼす影響を逆転する機能を果たしている。

詩人が青年を詩の中に描き、彼の若さや美しさがその詩の中で時を超えて後世まで保たれるという着想は、17 番〜19 番のみならず、55 番、60 番、63 番、65 番、81 番にも見られる。ここでは前項から後項への明確な逆転が生じている 60 番を観察する。[10]

60 番

Like as the waves make towards the pebbled shore,	ちょうど、小石に埋もれた浜辺に浪が押しよせるように、
So do our minutes hasten to their end,	私たちの時間も、刻々と、終りへむかって急いでいる。
Each changing place with that which goes before,	それぞれの時が先をゆく時にとってかわり、
In sequent toil all forwards do contend.	みんなが押しあいながら、つぎつぎに進んでゆく。
Nativity, once in the main of light,	幼児はひとたび光の大海原に生まれでるや、
Crawls to maturity, wherewith being crowned,	這いにじり、壮年に達するが、頂点をきわめると、
Crookèd eclipses 'gainst his glory fight,	不吉な影がその栄光にたたかいをいどみ、かつては
And Time that gave doth now his gift confound.	あたえてくれた時の神が、自分の恵んだものを打ちこわす。
Time doth transfix the flourish set on youth,	時の神は青春のはなやかな命を刺しつらぬき、
And delves the parallels in beauty's brow,	美の額にいくえもの皺をほりおこし、
Feeds on the rarities of nature's truth,	自然が生んだ完璧無比の手本を食いあらす。
And nothing stands but for his scythe to mow.	時の大鎌に刈りとられずにすむものは、何一つない。
And yet to times in hope my verse shall stand,	だが、私の詩はその酷い手にあらがい、来るべき世まで
Praising thy worth, despite his cruel hand.	持ちこたえ、きみのすばらしさを称えつづけるだろう。

12 番や 19 番と同様、60 番でも時は擬人化され、命を打ちこわし（confound）、刺し貫き（transfix）、

---

[9] Lakoff and Turner (1989, pp. 41-43) は、〈時は食い尽くす者である〉（TIME IS A DEVOURER）、〈時は破壊する者である〉（TIME IS A DESTROYER）というメタファーを挙げ、前者については Shakespeare のソネット 19 番の "Devouring Time" などの言い回しを、後者については "Does it really exist, Time, the destroyer? / When will it crush the fortress on the peaceful height? (Rainer Maria Rilke, *Sonnets to Orpheus*, 2) という例を引用している。

[10] 55 番では "Not marble, nor the gilded monuments / Of princes shall outlive this pow'rful rhyme, / But you shall shine more bright in these contents / Than unswept stone besmeared with sluttish time." (ll. 1-4)、63 番では "His beauty shall in these black lines be see, / And they shall live, and hi in them, still green." (ll. 13-14)、65 番では "in black ink my love may still shine bright" (l. 14) という表現が見られる。

食い荒らし（feed）、額に皺を掘り（delve）、大鎌（scythe）で刈り取り（mow）、やりたい放題の蹂躙を行う者として描かれる（60 番の擬人化された時の表記法についても、前の渡辺論文を参照されたい）。それに対して最終カプレットでは、時の蹂躙行為に対抗する者として「私の詩」（my verse）が登場する。直前の 12 行目の “nothing stands” という言い回しを受けて、詩人の詩だけは例外的に、手に大鎌を持った時のむごい刈り取りにも持ちこたえる（stand）ものだという主張がなされる。〈時は破壊する者である〉という前項のメタファーから推論される概念〈生者必滅〉を、後項では〈詩は時の破壊に持ちこたえる者である〉というメタファーによって逆転している。19 番と 60 番を併せて読めば、19 番の後項メタファーにおける〈時からの避難場所〉という特徴づけに示された安全性と、60 番の〈時の破壊に持ちこたえる者〉という特徴づけに示された耐久性が組み合わせられることにより、〈詩人自身の詩〉が時の破壊力をしのぐ強力なもの、不滅の価値をもつものだという詩人の矜持、その詩に描かれる青年に必滅の運命を免れさせ、不滅の命を与えてみせるという決意が示されていると言える。

3.5　前項のメタファーを保持しながら後項では新たな概念要素を追加する

前節までに観察した例は、逆接語の後項が、前項に示されたメタファーを否定したり、そのメタファーが持つ含意を否定したり、前項とはまったく異なるメタファーや、前項のメタファーに対抗するメタファーの導入により、何らかの形で前項のメタファーを退けるという機能を果たしているものであった。本節では、前項のメタファーを退けるのではなく、前項のメタファーを後項でも認め、保持している例を観察する。メタファーでは、2 つの概念領域の間に写像が成立しているが、以下に見る例では、前項のメタファーを構成する概念領域に新たな概念要素を付け加え、概念領域の内容を豊かにすることにより、前項のメタファーにおける特定の下位メタファーの内容を逆転するという現象が見られる。

24 番

Mine eye hath played the painter and hath stelled	私の眼が画家の役を演じて、きみの美しい体を
Thy beauty’s form in table of my heart;	わが心のなかの画布に描いた。
My body is the frame wherein ’tis held,	私の体が枠組となってこの絵をささえている。
And perspective that is best painter’s art,	特殊な遠近画法を使ったもので、最高の画家の作品だ。
For through the painter must you see his skill	きみの真の肖像のありかを見つけるには、
To find where your true image pictured lies,	この画家を通して彼の技法を知らねばならない。
Which in my bosom’s shop is hanging still,	この絵は、いつも、わが胸の画房にかかっていて、
That hath his windows glazèd with thine eyes.	その窓にはきみの眼というガラスがはまっている。
Now see what good turns eyes for eyes have done:	そこで眼と眼がどんなに助けあっているか、見てごらん。
Mine eyes have drawn thy shape, and thine for me	私の眼がきみの姿を描き、きみの眼は私のために
Are windows to my breast, wherethrough the sun	わが胸の窓となり、その窓ごしに太陽が楽しげに
Delights to peep, to gaze therein on thee.	のぞきこみ、なかにいるきみを見つめる、というわけだ。
Yet eyes this cunning want to grace their art:	だが、眼にはその芸を引きたてる技術が欠けている、
They draw but what they see, know not the heart.	つまり、見るものを描くだけで、心が読めない。

24 番の詩は〈記憶は絵画である〉というメタファーに基づく。〈絵画〉という概念領域の中には、〈画家〉、〈画布〉、〈額縁〉、〈肖像画〉、〈画房〉、〈画房のガラス窓〉、〈ガラス窓から覗く太陽〉など、さまざまな概念要素があり、これらの概念要素が目標領域〈記憶〉のさまざまな要素と対応関係を結んでいる。〈画家〉は〈（詩人の）眼〉に対応し、〈画布〉は〈脳の記憶領域〉に対応する。詩人が恋人を眼で見て、その姿を脳の記憶領域に焼き付ける様子を、画家が画布に絵を描くことに喩えている。〈額縁〉は〈詩人の体〉に、〈肖像画〉は〈記憶画像〉に対応する。詩人が恋人の姿を脳の記憶領域に焼き付けた結果、記憶画像が詩人の体という額縁の中に保存されるのである。〈画房〉は〈詩人の胸〉に対応し、胸の中にいつも恋人の記憶があることを、画房に肖像画がいつもかかっている様子に喩えている。〈画房のガラス窓〉は〈恋人の眼〉に、〈ガラス窓から覗く太陽〉は〈恋人〉に対応し、恋人がその眼を通して、恋人をいつも想う詩人の心を知る様子を、太陽がガラス窓を通して画房の中の絵をのぞき込むことに喩えている。これらのメタファー写像を通して、要は「私が君をいつも想っていることは、私の様子を見れば君にもわかるよ」と言いたいのである。

3 つの四行連句が描く〈画家〉の活動からは、恋をする詩人自身の楽しい気持ちが伝わってくる。それは画家が最高の作品（best painter's art（4 行目））を描けたという満足感からくる楽しさに対応するものである。そこにあるのは〈記憶は絵画である〉というメタファーを構成する 2 領域それぞれの要素、〈美しい恋人の面影を想う楽しさ〉と〈美しい自作画を眺める楽しさ〉との間の対応関係である。ところが、最終カプレットでは、それまで示されていなかった根源領域の重要な要素が追加される。〈画家の技能〉（cunning）[11]である。画家には、描画対象の形を正確に写し取るだけではなく、対象の精神を感じ取り、画像に魂を入れる技量が要求される。これは多くの芸術家に共通することであるが、芸術活動の楽しさを満喫して伸び伸びと活動する時期を過ぎ、自分の技能の低さを自覚した瞬間、才能の限界を感じ、芸術活動を続けることへの不安と自信喪失を経験する。この詩の最終カプレットでも、〈記憶は絵画である〉というメタファーにそのような芸術家のネガティブな感情が導入される。〈画家の技能〉は〈恋人の心を知る能力〉に対応し、恋人が何を考えているのかわからない（know not the heart）という詩人自身の能力の低さが、せっかく美しい対象の絵を描いているのに描画対象に魂を入れる技術が欠如しているという画家の技能の低さに喩えられる。後項では〈記憶は絵画である〉というメタファーが保持されつつ、〈画家の技能（の低さ）〉という新たな概念要素の追加により、恋の楽しさを表す前項の下位メタファー〈美しい恋人の面影を想う楽しさは美しい自作品を眺める楽しさである〉から一転、よくよく考えてみると相手の心を完全に把握できてはいないという不安感、自信のなさが、自分の限界を感じてしまった画家の不安感の観点から巧みに表現されるのである。[12]

34 番

Why didst thou promise such a beauteous day,	なぜ、きみはすばらしい一日がはじまると言って、
And make me travel forth without my cloak,	外套も着せずに旅に送りだしておきながら、
To let base clouds o'ertake me in my way,	黒雲をはなち、道のとちゅうで私を捕えさせ、
Hiding thy brav'ry in their rotten smoke?	その美々しい姿をむかつく瘴気のなかにかくしたのか。
'Tis not enough that through the cloud thou break	雲のすきまからちょいと覗いて、嵐に打たれた私の顔の
To dry the rain on my storm-beaten face,	雨水をかわかすというのでは、とても充分とはいえまい。
For no man well of such a salve can speak	傷はいやしてやるが傷痕まではなおさぬなんて、
That heals the wound and cures not the disgrace;	だれも、そんな軟膏をほめるわけにはいかないのだ。
Nor can thy shame give physic to my grief:	また、きみの後悔が私の苦痛の薬になるものでもない。
Though thou repent, yet I have still the loss.	きみが悔いたって、私が損をしたことに変わりはないさ。
Th' offender's sorrow lends but weak relief	人を傷つけてから悲しんだとて、ひどいめにあわされて、
To him that bears the strong offence's cross.	受難の十字架を負うものには、たいして慰めにもならぬ。
Ah, but those tears are pearl which thy love sheds,	ああ、だが、きみの愛が流すこの涙はまるで真珠だ。
And they are rich, and ransom all ill deeds.	これは値打ものだ、どんな非行でも贖ってくれる。

34 番は 3.2 節で取り上げた 33 番と同様に、〈心は天気である〉というメタファーに基づいている。第 1 四行連句で〈恋人〉が〈太陽〉に喩えられ、〈恋人の心変わり〉が〈太陽が雲間に隠れる〉という天気の変化に対応している。さらに第 2 四行連句では、恋人に裏切られた詩人の〈苦悩〉が〈嵐に打たれた〉（storm-beaten）様子に対応し、その様子を見て〈後悔する〉恋人が〈雲の隙間から覗く〉太陽の様子に対応する。ここまでは根源領域内の〈晴天―雨天―晴天〉という〈天気の変化〉と、目標領域内の〈愛情―裏切り―後悔〉という〈恋人の恋愛感情の変化〉が写像関係を成立させていることがわかる。この恋人の感情の変化に対し、第 3 四行連句で詩人は「君が後悔したところで、薬にも慰めにもならない」とひねくれている。

ところが最終カプレットでは、目標領域に〈（後悔の表明としての）涙〉という新たな概念要素が追加される。これは〈天気〉の根源領域内に対応する要素を探せば、恋人という太陽が流す涙であるから、さしずめ〈天気雨（いわゆる狐の嫁入り）〉であろう[13]。太陽が照ったまま降

[11] 本詩の 13 行目の "cunning" は "skill, insight"（Duncan-Jones ed., 1997, p.158 参照）の意味で用いられている。

[12] Burrow (ed., 2002, p. 428) はここでの「恋人は何を考えているのか？」という疑念の表明がその後の詩群に引き継がれる（"The note of doubt here (what is the lover thinking?) anticipates later poems."）ことを指摘している。

[13] Burrow (ed., 2002, p. 448) は 13 行目について "Throughout the poem the friend is responding to the poet's complaint, first by drying his tears and then finally by weeping. The tears at the end do mark a kind of recognition of the

る雨は、雨粒一つ一つが太陽の光に照らされキラキラと輝き、まるで真珠（pearl）[14]のように美しい。目にすることが稀な〈天気雨〉に遭遇して驚き、心が明るくなるように、詩人は恋人の涙を見て、「これは値打ちものだ、どんな非行でも贖ってくれる」（14 行目）と、直前までの不満を覆し、すべてを許せる気持ちになってしまうのである。ここでは、〈裏切りの後で後悔する恋人は嵐の後で雲間から覗く太陽である〉という下位メタファーに対する、慰めにも薬にもならないというネガティブな評価から一転し、〈天気雨〉としての〈涙〉という概念要素の追加により〈恋人の恋愛感情の変化〉に対する肯定的評価へと逆転が生じている。

30 番

When to the sessions of sweet silent thought	やさしい静寂にひたされた、心の思いの法廷に、
I summon up remembrance of things past,	過ぎさりし思い出の数々を召喚してみると、
I sigh the lack of many a thing I sought,	わが求めた多くのものが欠けているのに嘆息をもらし、
And with old woes new wail my dear time's waste;	古い悲しみを思い、貴重な人生が空しく過ぎたのを新たに嘆く。
Then can I drown an eye (unused to flow)	また、死の果しない夜にかくれた大切な友たちをしのび、
For precious friends hid in death's dateless night,	ふだんは泣かぬ眼にも涙をあふれさせる。
And weep afresh love's long since cancelled woe,	とっくに帳簿から消した愛の苦しみをまた思い浮かべて泣き、
And moan th' expense of many a vanished sight;	多くの消えていったものたちの損失を考えてはなげく。
Then can I grieve at grievances fore-gone,	また、私は去にし昔の悲しみを思って悲嘆にくれ、
And heavily from woe to woe tell o'er	暗い心で、苦痛のひとつひとつをかぞえあげ、
The sad account of fore-bemoanèd moan,	すでになげきおえた嘆きをさびしく清算して、
Which I new pay as if not paid before.	支払いがすんでいるのに、あらためて払いなおす。
But if the while I think on thee (dear friend)	しかし、愛する友よ、そのときにきみを思うと、
All losses are restored, and sorrows end.	すべての損失は埋めあわされ、悲しみがおわるのだ。

30 番は法律・金融のメタファーで統一されている。1 行目の sessions は「法廷」を、2 行目の summon up は「召喚する」を意味する法律用語であり[15]、これらは〈心は法廷である〉というメタファーに基づく。このメタファーにおける〈法廷〉は、心の中の収支欠損の審理を行う場所である。この下位メタファーとして〈記憶を呼び起こすことは法廷に証人を召喚すること〉がある。詩人は一人静かに、過ぎ去った思い出を、法廷に証人を召喚するかの如く一つ一つ呼び起こす。すると、あらためて今の自分には求めたものが欠如していること、貴重な時を浪費してしまったこと、大切な友人たち（precious friends）との死別を思い、涙にくれる（30 番の詩人の悲哀のヴァリエーション表現については、前の渡辺論文を参照されたい）。記憶が呼び起こす〈大切な友人たちの喪失〉は、法廷で〈金銭の損失〉が明らかにされる様子に喩えられ、〈死別した友人たちへの悲嘆〉は〈負債の支払い〉に対応する。この概念対応の特異なところは、通常の負債は、いったん支払えばそれで済むのに対し、詩人の支払いには際限がないということである。ここでは〈大切な友人たちへの哀悼は際限のない負債の支払いである〉というメタファーが〈心は法廷である〉の下位メタファーとして位置づけられる。死別の悲しみは、すでにさんざん嘆いたことであるのに、まるで幾度支払ってもあらためて支払わねばならない（12 行目）底なしの負債のように、幾度嘆き悲しんでも尽きることがない。これは一見不合理なメタファーのように思われるが、大切な人の喪失の悲しみの深さを実に的確に描写している。

それに対して最終カプレットでは、大切な友（dear friend）である〈君〉（thou）が心の中に登場する。この人物は〈すべての損失を補填する財産〉に対応する存在である。この新たな概念

---

friend's guilt, since they show that he is willing to identify himself not just with the sovereign sun, but also with the clouds that produce rain (or tears)." と述べ、「青年は自分を太陽と同一視するだけではなく、雨をもたらす雲とも同一視することを望んでおり、それゆえ彼の涙は罪の意識を表しているといえる」という考え方を提示しているが、筆者はさらに踏み込んで、ここでは太陽と雨が同時に存在する「天気雨」という気象状況が描写されていると想定したい。

[14] Duncan-Jones (ed., 1997, p. 34) はここでの "pearl" を形容詞的に用いられたものとみなし、"= made of pearl" と解釈した上で、「マタイによる福音書」13 章 46 節の天国を真珠に喩える比喩を連想させると述べている。

[15] Burrow（ed., 2002, p. 440）は "sessions" の意味を *OED* により確認し、"A continuous series of sittings or meetings of a court" との定義を示している。また高松（1986, p. 228）は「荘園の領主が裁判を開いて、領地の収支欠損を調べるのになぞらえている」という説を紹介している。

要素の追加により、前項に示されていた〈際限のない負債〉の下位メタファーの絶望的な様相が一変する。底なしのごとく思われた損失が〈莫大な財産〉の登場で一気に埋め合わされるように、〈君〉を心に想うだけで悲しみが終わる（sorrows end）。前項に示された絶望的な下位メタファーを一挙に解決し、終息させる存在として描かれることにより、詩人にとって〈君〉がいかに貴重で価値が高くかけがえのない存在であるかが説得力を持って伝わってくる。

４．おわりに

河合祥一郎は『シェイクスピア』の「あとがき」で、「シェイクスピアの原文を読み返したり、研究書を読んだりするたびに、新たな世界が見えてくる。それまでの自分の解釈では不十分だったことを痛感し、勉強が足りなかったと思う反面、『そうだったのか』と認識を新たにする喜びもある。汲んでも汲んでも尽きない井戸のようだ。」（p. 233）と述べる。筆者も思いを同じくする。筆者は長年、メタファーの観点から Shakespeare の作品に親しんできたが、*Sonnets* は読むたびに新たな発見があり、詩のレトリックの奥深さを新たに学ぶ楽しさを覚える。本研究では、Shakespeare の詩の語りにおいて逆転の鮮やかさが強い印象を残すのにはどのような要因があるのかということに関心をもち、*Sonnets* の中から、最終カプレットで逆接の語が示され、3 つの四行連句で述べられていた内容が逆転するという論理構造をもつ詩をいくつか観察し、内容の逆転に寄与しているレトリックを考察した。

逆転のレトリックには 5 種類の構造が見られることがわかった。(1)「前項のメタファーを後項で否定する」および（2)「前項のメタファーの含意を否定する」というレトリックは、前項の主張を取り消し、差し引きゼロにするようなレトリックであり、いわば概念の引き算による逆転が行われている。(3)「前項とまったく異なるメタファーを後項で導入する」および (4)「前項のメタファーに対抗するメタファーを後項で導入する」というレトリックでは、前項と後項では提示されたメタファーの内容が適合しない、あるいは相矛盾する。その 2 つのメタファーを並列させることにより、前項と後項の概念どうしが衝突し、前項の内容からの逆転が生じる。(5)「前項のメタファーを保持しながら後項では新たな概念要素を追加する」というレトリックでは、前項のメタファーを構成する概念領域内の要素となる諸概念に、後項で新たな概念要素が追加されることにより、概念領域が豊かになり、前項で予想されなかった新たな意味を帯びることになる。その結果、特定の下位メタファーに変更が加えられ、いわば概念の足し算による逆転が生じる（【表２】参照)。

レトリックの構造	レトリックの機能
前項のメタファーを後項で否定する	概念の引き算による逆転
前項のメタファーの含意を否定する	
前項とまったく異なるメタファーを後項で導入する	概念の衝突による逆転
前項のメタファーに対抗するメタファーを後項で導入する	
前項のメタファーを保持しながら後項では新たな概念要素を追加する	概念の足し算による逆転

【表２】Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリックの構造と機能

Shakespeare を始めとする数多くの詩作品を題材にとり、認知メタファー論の立場から論じた Lakoff and Turner（1989）は、「偉大な詩作品の豊かさと力の源泉の一つとして考えられることは、いくつもの基本的なメタファー的視点の結合だ」[16] と述べている。Shakespeare のソネット作品における叙述内容の逆転が強く鮮やかな印象を与えるのは、複数の視点を重ね合わせ、メタファーを構成する概念を引いたり足したり衝突させたりするという巧妙なレトリックにより、逆接語の前項と後項の双方の内容に豊かさと説得力をもたらしているからだと考えられる。

[16] “[O]ne potential source of richness and power in great poetry is the confluence of a number of basic metaphorical perspectives.” (Lakoff and Turner 1989, p. 27.)

参考文献

Burrow, Colin (ed.) (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.

Duncan-Jones, Katherine (ed.) (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.

河合祥一郎（2016）『シェイクスピア』（中公新書）東京：中央公論新社.

川西進（編注）（1971）*Shakespeare's Sonnets*. 東京：鶴見書店.

Lakoff George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

嶺卓二（編注）（1974）*Sonnets by William Shakespeare*. 東京：研究社.

大場建治（編注訳）（2018）『ソネット詩集』（研究社シェイクスピア全集別巻）東京：研究社.

大森文子（2018a）「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース（言語文化共同研究プロジェクト 2017）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.

------（2018b）「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1 』（鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編）東京：ひつじ書房、175-104.

Preminger, Alex and T. V. F. Brogan (eds.) (1993) *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Princeton: Princeton University Press.

櫻井正一郎（1979）『結句有情―英国ルネサンス期ソネット論―』京都：山口書店.

Schoenfeldt, Michael (ed.) (2007）*A Companion to Shakespeare's Sonnets*. MA: Blackwell.

高松雄一（1986）『ソネット集（シェイクスピア作）』（岩波文庫）東京：岩波書店.

Vendler, Helen (1997) *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge: Harvard University Press.

渡辺秀樹（2019）「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科、1-10.

吉田健一（2007）『シェイクスピア／シェイクスピア詩集』東京：平凡社.

シェイクスピアのソネット 50 番
―日本語訳の考察を絡めて―

寺浦麻由

1.　はじめに

本論では、シェイクスピアのソネットの 50 番について考察する。本論執筆の契機は、渡辺秀樹先生の認知レトリック論 B の授業でソネット 50 の発表を担当したことである。本論は次のような手続きをとる。まず、1 で詩の基本的な解釈を提示する。2 では、馬と乗り手の関係を中心に分析を行う。そして、3 では 50 番のメタファーについて考察し、認知言語学の立場からも 50 番を再解釈する。4 では *Sonnets*50 と 51 の関係性についてまとめる。5 では拙訳を掲載し、筆者自身の翻案(adaption)的な訳出の工夫を説明する。6 ではまとめにうつる。そして付録として 50 番の日本語訳を掲載する。

適宜、*The Oxford English Dictionary*(以下　*OED*)に収められた用例を掲載し、シェイクスピアのソネットと絡めて論じる。

1.1.　詩について

How heavy do I journey on the way, When what I seek (my weary travel's end) Doth teach that ease and that repose to say, 'Thus far the miles are measured from thy friend.' The beast that bears me, tirèd with my woe, Plods dully on, to bear that weight in me, As if by some instìnct the wretch did know His rider loved not speed being made from thee: The bloody spur cannot provoke him on, That sometimes anger thrusts into his hide, Which heavily he answers with a groan More sharp to me than spurring to his side; For that same groan doth put this in my mind: My grief lies onward and my joy behind.	なんと重い心で、私は旅をつづけていることか、 私のもとめるもの(つまり、つらい旅の終り)が そのくつろぎ、その憩いにこう言わせるのだもの、 「おまえは友からこれだけ遠く離れたわけだね」と。 私をのせた馬は、私の嘆きに疲れはてて、 のそのそと歩みを進め、私のこの重い気持を運んでゆく。 まるで、やつめ、この乗手はきみから離れるのがいやさに 急ごうとしないのを、本能でさとったかのようだ。 時には、怒りにまかせて横腹を突きはするものの、 血まみれの拍車にも、やつの足を早めるだけのききめはない、 ただ、ものうげな呻き声でこれに答えるだけだ。 脇腹の拍車も痛かろうが、私には呻きの方がもっと痛い。 なぜなら、まさにこの呻きが私に思いださせるのだ、 悲しみが行手にあり、歓びは背後に去ったことを。 (高松,1986;72-73)

50 番と 51 番は対をなし、共に詩人が友(“thy friend”)から離れる旅に出ることについて、馬の描写を交えながら綴る。乗り手は旅に出ても、悲しみを抱えている。「一日の旅をおえて休息についても、次第に友から離れて行くことのみが心にかかる」(高松,2009;234)のだった。乗り手の悲しみを悟ったかのように馬(“wretch”)の歩みは遅い。拍車(“spur”)で、横腹を蹴るが、それも虚しく一向に速く歩こうとはしない。拍車が血まみれになるまで蹴っても、馬から返ってくるのは、うめき声(“a groan”)だけである。そのうめき声で、乗り手は悟る。行く手には悲しみが横たわり、喜びは背後にさったことを。Evans(1996;158-159)は、L14“joy”が(1)happiness を、“grief”が (2)the friend を表すのではないかと考察していたが、出発地と目的地の解釈は研究者によって多岐に渡るため考察に値するが、別稿に譲りたい。

1.2.　主な音韻、音象徴

次に、詩の形式について考察する。50 番は ABABCDCDEFEFGG (iambic pentameter) の形で 14 行(3 つの quatrains と 1 つの closing couplet)で構成されている。A:way,say (/ei/)、B:end, friend(/end/)、C:woe, know(/oʊ /)、D : me, thee(/iː /)、E : on, groan(/oʊ n/)、F : hide, side(/aˈɪd /)、G : mind, behind(/aind/)の音韻が確認できる。長音(/oʊ /)で乗り手の別離の嘆き、馬の呻きを示しているのが大きな特徴で

ある。

また、L4 の“miles”, “measured”、 L5“beast”、 “bears”、 L6 “sharp, spurring, side”などの頭韻(alliteration)が挙げられるだろう。12 行目の“sh”, “s”音は馬の腹皮に亀裂がはいる音である。L1heavy, journey、 L3 ease, repose 、L8 loved, speed, made,の脚韻(rhyme)も作品全体に響いている。

1.3. レトリック

主なレトリックについて言及しておきたい。対照法(antithesis)として目立つのは、L3 ease / L2 weary、そして L14 grief / L14 joy,L14 onward / L14 behind だろう。渡辺(2019)によれば、感情語 grief と joy の対照法が見られるのは、この 50 番と 42 番のみである。

そして、50 番の要と言っても過言ではないのが、共感覚(synesthesia)である。L12-13 において乗り手の聴覚が、心の痛覚へと伝染し読者を混乱させる。

また、L8“bloody spur”は、転移修飾語(transferred epithet)である。「馬の脇腹を蹴った結果、拍車が血まみれになるわけだから、この ‘bloody’は一種の転移修飾語ということになる」(柴田,2004;52)。このレトリックが、乗り手、馬の感覚を曖昧に捉えさせ、混乱を生み出している。

L4‘Thus far the miles are measured from thy friend.’ は Journey メタファーを逆手にとった皮肉(irony)である。(詳しくは 3.1 で言及する。)逆説(paradox)として L8 His rider loved not speed being made from thee:が目立つ。“make”は通常 “forward motion”を表す(Booth,1978;217)[1]。これについては 3 のメタファーの考察で詳細に言及する。歴史劇『リチャード 2 世』のボリングルックのセリフからも、この逆説が読み取れる(Kerrigan,ibid; 79-80)。

そして、L7“As if by some instìnct the wretch did know”は、撞着語法(oxymoron)である。知識を持ち合わせない獣(“the wretch”)が、知識を持ち合わせ乗り手の気持ちを知悉する(“know”)矛盾が感じられるからだ。

1.4. 詩の構造について

本小節では、詩の構造について言及する。まずは先行研究の詩形についての解釈を提示する。次に、筆者の解釈を提示する。

1 How heavy do I journey on the way,
2 When what I seek (my weary travel’s end)
3 Doth teach that ease and that repose to say,
4 ‘Thus far the miles are measured from thy friend.’
5 The beast that bears me, tirèd with my woe,
6 Plods dully on, to bear that weight me,
7 As if by some instìnct the wretch did know
8 His rider loved not speed being made from thee:
9 The bloody spur cannot provoke him on,
10 That sometimes anger thrusts into his hide,
11 Which heavily he answers with a groan,
12 More sharp to me than spurring to his side;
13 For **that** **same** groan **doth** put this in my mind:
14 My grief lies onward and my joy behind.

【図 1】 詩の形式 先行研究

図 1 に示したように、囲み枠の that, this, doth などで形成された L3 L13 による左右対称性(symmetry)を L13 の empty syllables (that, same, doth)によって崩す構造が成り立っている(Booth,ibid;217)。さらに、L2-4 の内容を L13-14 で具体的に描写する(網掛け部)構造もみられる(Booth,ibid;217)。ベンドラーによれば、キーワードは on であるがそれは波線で示した(online1)。

[1] Nay, rather every tedious stride I make / Will but remember me what a deal of world / I ander from the jewels that I love. / Must I not serve a long apprenticehood. R2 I.3.268-70「いや、むしろ私の踏みしめるもの憂い一歩一歩は、私の愛する人々という宝石から、いかに遠くまで引き離されたかを思い出させるだけでしょう。」(シェイクスピア,1958b;45)

1 How heavy do I journey on the way, 2 When what I seek (my weary travel's end) 3 Doth teach that ease and that repose to say, 4 'Thus far the miles are measured from thy friend.' 5 The beast that bears me, tirèd with my woe, 6 Plods dully on, to bear that weight in me, 7 As if by some instìnct the wretch did know
8 His rider loved not speed being made from thee: 9 The bloody spur cannot provoke him on 10 That sometimes anger thrusts into his hide, 11 Which heavily he answers with a groan, 12 More sharp to me than spurring to his side; 13 For that same groan doth put this in my mind: 14 My grief lies onward and my joy behind.

【図 2】 詩の形式　筆者による解釈

さて、次に筆者なりの解釈を図 2 と共に記しておきたい。中心主題(hypogram)が "way, when, what, weary, woe, weight, wretch"(詩中網掛け部分)によって、詩全体に響いていることがわかる。前半部分は、呻き"woe"を中心主題として考えるのが妥当だろう。が、それ以外にも目立つ中心概念がある。表に示したように、詩を二分割すれば、後半に馬に対する男性名詞 he の主格、所有格、目的格が集中(囲み枠)していることがわかる。これは主題 "horse"を指す hypogram の可能性がある。後半部分での畳み掛けは、馬の地位向上と、乗り手との同化を表しているといえるのではないだろうか(詳しくは、2.分析参照)。"h"による hypogram を、試訳に馬にまつわる語彙を散りばめることによって再現したことについては、のちに言及したい。(5.試訳参照)

2. 分析

2.1. 馬の立場について

本小節では、馬の立場について考察する。多くの研究者が指摘しているとおり、馬と乗り主の感覚の境界線は曖昧である。例えば 5 行目の"tired"の先行詞は "me" と "beast"の両者だと考えられる(Evans,ibid.)。同様に 9 行目の"The bloody spur cannot provoke him on"の"him"も本来であれば、「8 行目 the beast を受けるのだから it でよい」(大場,2018;114)。しかし、him になっているのには理由があると考えられる。ブースも 9 行目の him に関して"Common sense says that him refer to the horse, but the grammatical antecedent is His rider; the vagueness of designation furthers the ongoing process of identifying the horse with the rider."(Booth,ibid;217)と述べている。その関連として 50 番で、馬の呼称が "beast"から "wretch"になり "he"に変化するのは興味深い。 "beast"という動物への呼称から "wretch" という人にも動物にも使用可能な呼称になり、そして最後に男性名詞 "he" で完全な擬人化用法となる。ただの獣、そして心の重さを共に感じてくれる共感者、そして最後に、L14 で残酷な事実を告げる宣告者としての地位の向上を表すと考えた。その関係性の変化を、図 3 に示した。

【図 3】馬の呼称の変化(地位の高さ、低さを、大小で表した。)

さて、"wretch"の使用による効果が果たす役割はこの 14 行詩において大きい。大場は、この "the

wretch”に対して「“the wretch”を通してその馬と “rider”である “The Poet”とが思いの中で重なっていく。(大場,2018;114)」と、50 番においてかなり重要な提言を一文で簡潔に述べている。「 “the wretch”が、擬人化の始まりとしての標識となり、馬と乗り手の境界線がなくなっていく」と換言できるのではないだろうか。“wretch”という人にも動物にも適用される侮蔑、愛憎、哀れみ、慈しみなど様々な感情が想起される言葉を利用することで、馬の一筋縄ではいかない存在を示しているのは確かである。そして、 “wretch”に潜むオクシモロン的な多義性(ambiguity)こそが、乗り手の感情を知る上で重要なのだ。また、その多義性が 50 番の肝となる。

“the wretch”が、動物を呼称する “beast”と擬人化的表現の“he”の中間を指していることに注目した大場は、日本語訳を工夫している。「畜生のくせに」(柴田,2004;53)「畜生ではあるが」(中西,1967;102)と翻訳した二者のように、「畜生」という侮蔑語を使用せず、 「可愛い奴め」と訳している。エヴァンズの注釈には “poor creature” (without pejorative weight)(Evans,ibid.)と記載されている。*OED* で動物、鳥、虫に対して、“wretch”を使用する用例(**d.** Applied to animals, birds, or insects.)の欄には、シェイクスピアによる用例は認められない。しかし、“e. A person or little creature. (Used as a term of playful depreciation, or to denote slight commiseration or pity.)”の項には用例がある。1599 年の *Romeo & Juliet* “The pretie wretch left crying, and said I.” i. iii. 46 では、ジュリエットを指して“wretch”という語彙が使用されている。ジュリエットの昔話をする乳母は、その可愛さを、キャピュレット夫人に話し出す。乳母の愛情は募り、可愛さの余り、ジュリエットを“wretch”と呼称してしまう。福田恆存は、その愛情を明らかに示すため「可愛いお馬鹿さんが泣き止んで(シェイクスピア,1983;40)」と翻訳している。

もう一つの用例は *Othello*(1622)のオセロとデズデモーナのやりとりからである。 “Excellent wretch, perdiction catch my soule, But I doe loue thee.” iii. iii. 91 「いぢらしの我妻や。我御身を愛さずば、我魂に呪いあれ、我れ御身を愛さずば」(シェイクスピア,1909;186)とデズデモーナに対して、 “wretch”を使用している。オセロが、デズデモーナのいじらしさ、可憐さに対して思わず放った言葉である。つまり、格下で従順な存在のいじらしさを “wretch”一語で表している。福田恆存は “Excellent wretch”を「かわいい女だ！(シェイクスピア,1973;85)」と翻訳している。

このように自分よりも下位の、また、か弱い存在に対する感情を読み取ることができる。表 1 に“wretch”の英和辞典の意味をまとめた。

辞書	意味
ジーニアス英和辞典	1.気の毒な人、とても不幸な人 2.見下げ果てたやつ、悪党;[愛情を込めて]やつ、わんぱく小僧
新英和大辞典	1.不運の人、悲惨な人、哀れな人(miserable person) 2. 恥知らず、浅ましい人間、卑劣漢(scoudrel)、(かわいい)やつ(rogue)★しばしばふざけたののしり語あるいは愛情の表現として用いられる。
リーダーズ英和辞典	哀れな人、みじめな人; [joc][2]

【表 1】wretch の意味(下線筆者)

下線を引いた箇所を見れば、 “wretch”という語彙は愛情表現でありののしり語でもあるという二面性を持つことがわかる。また、『新英和大辞典』の「愛情を込めて」、『リーダーズ英和辞典』の「しばしばふざけたののしり語あるいは愛情の表現として用いられる」という説明から鑑みて、たった一語で、発話した人物から対象物への深い愛情が読み取れる標識であることがわかる。[3]

[2] 『リーダーズ英和辞典』の[joc]の記載によって、“wretch”はおどけた(jocular)言行だと感じられる。このおどけた態度は、50 番で乗り手が悲しみを必死で隠すための、仕掛けなのではないだろうか。おどけることで悲しみを紛らわせようとする、乗り手の切なささえも、この一語から読み取れる。

[3] 牧師ジョン・ニュートンが作詞した「アメイジング・グレイス」の Amazing grace, how sweet the sound/ That saved a wretch like me/I once was lost but now I'm found/We blind but now I see という歌詞は誰もが知っているのではないだろうか。奴隷船の船長として家畜のように黒人を船につぎ込んで非道徳的な行為を行っていた。ある日そんな彼の乗る船が嵐に見舞われ、沈没しそうになった。そのとき、思わず命が助かるように神に祈った。神への祈りが通じたのか、命を永らえる。「神は下等な存在 “wretch”である私を救いたもうた」という感謝が “That

2.2.　馬と乗り手の関係

次に、馬と乗り手の関係性について言及する。ブースによれば、馬と乗り手の関係は主に以下の 3 つに分類される。それを下記の表 2 に示した。

【表 2】馬と乗り手の関係

①horse and rider should function as one
②lover beloved are one
③horse mistress /rider lover

<u>①horse and rider should function as one</u>

馬と乗り手が一体として行動すること、さらに感情をも共有するという関係性は一番想像しやすい。なぜならば、人間は馬との関わりが深く、人間と馬を一つと捉える習慣があるからだ。ブースが逆の概念として挙げている、“The horse thinks one thing and he that saddles him another”ということわざ(proverb)もその習慣を元としたことわざだろう。

馬と乗り手が影響し合う例として *Astrophil and Stella*(1591)の 49 番があげられる(Kerrigan,ibid.)。“Girt fast by Memorie ; and while I spure, My horse, he spures with sharpe desire my hart ;”(online2,69)「私が私の馬に記憶の腹帯がしっかりと閉められて、私が私の馬に拍車をかけると、愛神は私の心に鋭い欲情の拍車をかける(シドニー,1976;80)」からは乗り手と馬の強固に結ばれた絆が確認できる。[4]

50 番だけを読めば、馬と乗り手が同調しているといえそうだ。しかし 51 番についても考える必要がある。

51 番	
Thus can my love excuse the slow offence Of my dull bearer, when from thee I speed: From where thou art, why should I haste me thence? Till I return, of posting is no need. O what excuse will my poor beast then find, When swift extremity can seem but slow? Then should I spur though mounted on the wind, In wingèd speed no motion shall I know: Then can no horse with my desire keep pace; Therefore desire (of perfect’st love being made) Shall neigh (no dull flesh) in his fiery race, But love, for love, thus shall excuse my jade: 　Since from thee going he went willful slow, 　Towards thee I’ll run, and give him leave to go	私がきみから遠ざかるときには、わが愛は、 のろまな馬の遅怠の罪をこう言って許してもやれる。 きみのいる場所から、なぜ、急いで離れることがあろうか、 帰るときまでは走る必要などありはしない、と。 だがその時には、この哀れなやつにどんな言訳をあてがおう。 帰りには、力のかぎり疾走してもじれったくてたまるまい。 <u>そうなれば、私は風に乗っていようと拍車をかけるさ。</u> <u>翼をはやして飛んでいようと動いている気はするまい。</u> <u>そうなれば、どんな馬もわが欲望の速さにはかなわない。</u> <u>だから、もっとも完璧な愛からなるこの欲望は、</u> <u>焔となって駆</u>け(並の馬じゃない)、高らかに嘶くだろう。 だが、愛は愛の心ゆえに、こう言って私の駄馬を許してやる。 「きみから去るときに、これはわざと遅く歩んでくれた。 だから帰りには私が走って、これは歩かせてやろう」 (高松,1986;73-74)

50 番とはうってかわり、51 番では友への帰り道について夢想する乗り主の感情が高揚する。しかし馬は、その乗り手の気概を察して速く走ろうとするわけではない(Booth,ibid.)。51 番で、馬が joy に向かって奔走するのであれば、horse and rider should function as one という関係性が成り立つのだが、乗り手の欲望の速さにはどんな駿馬も叶わないというのだ。

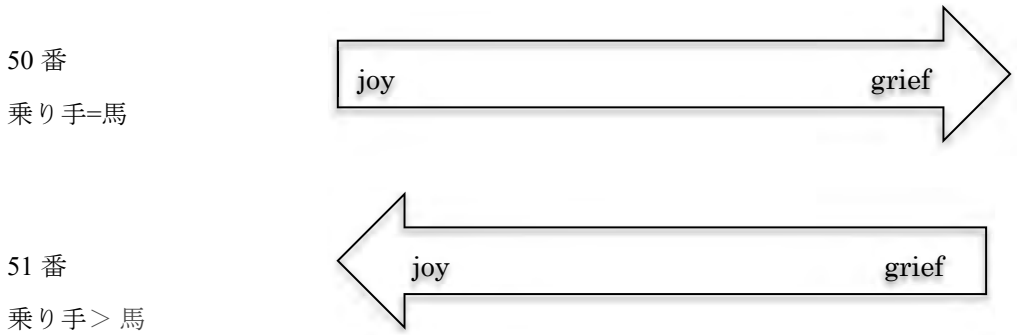
【図 4】に 50 番、51 番の出発点と目的地、そして乗り手と馬の関係性を簡易に示した。記号で乗り手と馬の速さの関係を表した。50 番では馬が grief に向かうため、馬は遅い。乗り手の心情と、馬の歩みが合致しているといえる。51 番では、乗り手の欲望の方が早い。よって乗り手＞馬と

---

saved a wretch like me”につながっている。奴隷船の船長という罪人も神の目から見れば、哀れな可愛い存在つまり“wretch”である。筆者は、“wretch”という単語をこのアメイジング・グレイスを通して初めて知ったが、今回神の視点から見た人間への哀れみをも折り込んだ語彙であることを改めて認識した。

[4] さらに *Astrophil and Stella* では、馬の動きを感情の比喩媒体にするだけでなく、くつわ鎖を「心配」に、金色の浮き出し飾りは「希望」、手綱を「屈従の思い」に、鞍を「情」に、拍車を「鋭い欲情」　に喩えているのが興味深い。50 番の場合、拍車はおそらく「刺激」である。そして、拍車に反応しない馬を起点領域として、なんの刺激にも反応できないほど疲弊しきった乗り手の心を表したメタファーを潜ませている。

表した。



【図 4】 50 番と 51 番

②lover beloved are one

次に二つ目の lover beloved are one という考え方について言及したい。*Sonnets*36.2 の“Although our undivided lovers are one:”という宣言で恋人同士は一つであることが明示されている。

③horse mistress /rider lover

最後の関係性は、horse mistress /rider lover である。『ヘンリー5 世』の皇太子のセリフ 「それは私が乗馬に捧げた詩を真似したのだろう、私の馬が私の恋人なのだから(シェイクスピア,1958a;113)」“My horse is my mistress. Your mistress bears well.” H5 3.7.11-6 という文言から、恋人と馬を同一視していることがわかる。

さて、ここまで 3 つの分類について考察した。この 3 分類のうち、50 番は①のように、馬が人間の感情に同調する存在と考えられる。しかし共感者(L.7.8)から、行く手には悲しみしかないという真実を明るみにする残酷な宣告者(L13,14)に変化するのだから、そこにはアンヴィバレントな態度が感じられる。よって、単純に①の特徴が当てはまるとも考えられない。また、51 番では馬は乗り手の欲望に同調しないでノロマなままなのだから、乗り手と馬は同じ動き、心理を持ち合わせないのである。よって、正確には①②③どれにも当てはまらないと言った方がいいだろう。

2.3. 感覚の共有

本小節では、感覚の共有について考察する。馬は乗り手に拍車をかけられて血を流す。しかし馬は拍車をかけられているのにもかかわらず呻き声で答えるだけである。おそらく“spurring”は連続的で複数回の行為であるが、“groan”には一回性がある。この数の対比から、乗り手の焦り、そして馬の落ち着きが感じられる。“spur”には、“I.A device to incite a horse to move forward”という意味がある(*OED* 参照)。拍車による“stimulation”(刺激)に対する、この馬の“numbness”が対照的である。拍車によって痛みを感じているのは、馬であるはずだ。しかし、その馬が感じる痛みよりも、呻きの方が痛いという比較級が用いられている。乗り手が、さも拍車による痛みの程度を知悉しているかのようだ。ここに、馬と乗り手の感覚の共有が認められる。馬の痛覚がそのまま乗り手の心の痛覚に繋がるが、乗り手は、拍車で身を引き裂かれる痛みを知るはずがない。よって呻きが拍車の痛みよりも強いという比較表現自体がオクシモロン的である。

50 番は馬の呻きを聴覚で捉え、さらに触覚で捉えている。また、馬の痛覚を乗り手が体験している。中西訳は「なぜなら　そのうめき声は　私のこころに強くきざみこむのだ。」となっていて、馬の痛覚と乗り手の痛覚の関係性を強調しようとしている。さも、拍車の刃先が、乗り手の心臓に食い込むようなイメージを喚起させるのだ。これは感覚の共有というレトリックの翻訳が忠実に行われている例といえるだろう。

3. メタファー

本節では、まず、下敷きとなっている 50 番の旅のメタファーを 3.1 で概説し、3.2 では心のメタファー、3.3 では、荷物の重さで悲しみにくれる人間の心理、3.4 では気乗りしない心を馬で表すメタファーについて概観する。

3.1.　旅のメタファー

ここでは、50番の下敷きとなっている旅のメタファーについて言及する。50番は、通常の "**LOVE IS A JOURNEY**" メタファーを皮肉(irony)的、引喩的に使用している。皮肉というのも特に旅の道のりが伸びるほど嬉しいというメタファーの性質、"the progress made is the distance covered"(Kövecses,2002;7)を逆手に取っているからだ。通常、旅の先には目的地があり、その道のりは目的地に近づくもののため旅の道のりが長くなれば達成感が伴う。しかし 50 番では、道のりが長くなればなるほど、悲しみも募るのだ。48 番 L6「きみはわが最上の歓びにして、いまはわが最大の悲しみ(シェイクスピア,2009;70)」 "Most worthy comfort, now my greatest grief," と宣言した時点で、旅に出ることは悲しみを伴うという予兆が垣間見える。 "The goal of the relationship is the destination of a journey"(Kövecses,ibid;7)が成り立たないため、乗り手にとって、行き先は悲哀に満ちている。通常ならば道中に悲しみ "grief" があっても目的地に達成の喜び "joy"が伴う。よって、旅人は、達成の喜びに早く浸ろうと、速い乗り物を好む。しか 50 番では"joy"は過ぎ去り、目的地には "grief" が待つ。よって乗り物は遅い方が好都合なのだ。

3.2.　心のメタファー

この詩で《HAPPY IS UP SAD IS DOWN》(Lakoff and Johnson,1980;15)が、基軸となっていることは間違いない。《心は物体である》という概念メタファーを中心に、抽象的である悲しい心を表しているのだ。 "plods dully"、"groan"などで、乗り手の心を具体化してくれるのが、馬である。つまり、馬が概念メタファーを周知する役割として働く。「心は重い」という概念メタファーを "groan" で示している。動物の繊細さで、心の重さを感じとっているため、乗り手から馬に対する愛着が生まれていることもわかる。つまり馬は 3.4 で触れるように、乗り手の心を具体化する起点領域としての役割を果たす。心情を表現するという、悲しみにくれる人にとっての重労働を、馬は代行して本能のままに行っているのだ。

3.3.　荷の重さ[5]

「心の荷が重い」などの言葉からもわかるように、人間は悲しみなどの否定的な感情という抽象概念を、重い荷物という具体物で喩える。50 番においても、重さを表す縁語である heavy, weight, dully などが目立ち、重さが大きな鍵となることが予想される。図 5 に起点領域を、乗り手をおぶっている馬とし、目標領域を人間の心としたメタファーをまとめた。「人間の心の悲しさは荷物である」というメタファーが成り立っているのだ。50 番では、乗り手が重みであり、荷物であるということになる。

起点領域		目標領域
荷をおぶっている馬	→	悲しい心を抱える人間
荷物	→	悲しい心

【図 5】 馬の荷物と人間の心のメタファー

3.4.　気乗りしない心を馬で表すメタファー[6]

馬は犬と並び、人間の心情と関わりが深く、「心の駒」はそれを端的にあらわした日本語といえる。[7]「心の駒」とは『大辞泉』によれば、「心の馬」と同義で、心が激しく働き、抑えにくいことを勇み逸る馬にたとえていう語である。対して、50 番の馬は動き回るのではなく、気乗りしない乗り手の心情と呼応し、とぼとぼと歩く。

50 番では、乗り手の心を馬に喩える寓意のメタファーも土台となっている。つまり遅く鈍い馬の様態で気乗りしない心を表している。馬の遅さや鈍感さについて語りながら、馬の行動で乗り

---

[5] 大森文子教授より、荷物の重さのメタファーを考察に加えるようにご指摘いただきました。

[6] 表の作成にあたり大森(2020)の"*The Lion's Parliament* における寓意のメタファー"を参考にした。

[7] 心の駒に関しては、蝉丸の「心の駒は日に千度、恋しき方に走り井の」という句が存在する。室町の歌人正徹の私家集である『草根集』には「つながれぬ心の駒もおとろへき恋路さかしく遠き月日に」日文研[online3] など、心を馬で喩えるような句が存在する。この和歌の存在を渡辺秀樹教授に教えていただきました。

手の心を端的に表している、以下の図 7 のようなメタファーが成り立つだろう。

起点領域〈動物〉	→	目標領域〈人間〉
遅い馬	→	気乗りしない乗り手の心
拍車に血を流す馬	→	血を流し呻く痛い悲しい心
拍車に反応しない馬	→	刺激にも反応しない心

【図 6】馬の様態が表す寓意のメタファー

気乗りしない乗り手の心情を表すモチーフとして、馬が作品の中心をなす。そして、悲痛にくれる心も、馬が体現している。そして、なんの刺激にも反応しないほど悲しみに沈み込んでしまった心を、拍車に反応しない馬で表している。

3.5. 馬の行動を擬人化するメタファー

ここでは、馬の行動を擬人化するメタファーについて考察する。50 番では、擬人化(prosopopoeia)が用いられている。L5 では、“tirèd with”、そして L7 では “the wretch know”の箇所に擬人化がみられる。さらに L9-L12 では馬に対して、“ he, his, him” が用いられている。

つまり、馬という人間への共感性が高い動物を描写する擬人化メタファーがみられるのだ。特に、L7 で、乗り主の心情を知悉している様子は、撞着語法的(oxymoron)である。馬が、さも知性を持ち乗り手の心に合わせた行動をとっているように描かれていている。

起点領域 〈人間〉		目標領域 〈動物〉
乗り手である人間の行動	→	馬の行動
人間が悲しみに呻く	→	馬の鳴き声
人間が疲れる	→	馬が遅く歩く
人間が気乗りしない	→	馬が遅く歩く
人間が何の刺激にも反応しない	→	馬が拍車にも反応しない

【図 7】 人間の生態で馬を理解する擬人化メタファー

図 7 にも見られるように、馬の行動を、乗り手である人間の行動で表すメタファーは 3.4 で考察した寓意のメタファーと合間って、読者を混乱させる。

4. 50 番と 51 番の関係性

ここでは、50 番と 51 番の関係性を考察する。51 番のソネットは、50 番と対になっている。50 番の馬は遅い。51 番で描かれるのが駿馬であれば 50 番との綺麗な対象関係が出来上がる。しかし前述したように、51 番では馬が友のもとに走るわけではない。乗り手の欲望の方がどんな駿馬よりも速いというのだ。まさに意馬心猿[8]、煩悩や妄念によって心が乱れている乗り手が描かれる。その心の乱れは、Kerrigan によれば、 “neigh” という馬の鳴き声に表現されている。

Thus can my love excuse the slow offence
Of my dull bearer, when from thee I speed:
From where thou art, why should I haste me thence?
Till I return, of posting is no need.
O what excuse will my poor beast then find,
When swift extremity can seem but slow?
Then should I spur though mounted on the wind,
In wingèd speed no motion shall I know:

[8] 『大辞泉』によれば、「意馬心猿」は、「馬が奔走し、猿が騒ぎ立てるのを止め難いように煩悩、妄念などが起こって心が乱れ、抑えがたいこと」をいう。

Then can no horse with my desire keep pace; Therefore desire (of perfect'st love being made) Shall neigh (no dull flesh) in his fiery race, But love, for love, thus shall excuse my jade: Since from thee going he went willful slow, Towards thee I'll run, and give him leave to go

【図 8】51 番のソネット

次に、50 番との相違点について考える。下記の表に、感情、馬への感情、馬の鳴き声、主題、そして論の展開語を項目としてまとめた。まず、感情を比較すると 50 番では沈鬱な呻きを中心概念とした悲しみを感じずには得ない。対する 51 番では、欲望という感情語がみられる。そして、50 番の乗り主の馬に対する感情は、共感と言えるが、乗り手から、馬の歩みの遅さへの許しの感情が目立つ。また、馬の鳴き方は詩を解釈するうえで大きな指針となる。50 番では、前述したように馬の呻きが目立つ。しかし 51 番の "neigh"は、欲望を表しているという。そして 51 番の L13 の"willful slow"という言葉から、50 番の主題は "unwilling fastness"であることが推測できる。

また、Thus、Then などの副詞、But などの接続詞の総数が 51 番の方が圧倒的に多い。これは乗り手の心情に起因する。50 番は、論の展開語も見られるものの、51 番ほどではない。まさに心馬を急がせているのだ。

	50 番	51 番
感情	落ち込み(wariness)	欲望(desire)
馬への感情	共感	許し
馬の鳴き声	groan	neigh(Kerrigan, ibid.)
主題	Unwilling fastness	L13willfull slow
Thus などの論の展開	Thus　For	Thus Then Then But Since

【表 3】 50 番と 51 番の比較

50 番の共通点は "Thus and journey" ということになる(Edmondson and Wells,2004;33)。"horse" と "spur"も、当然共通点として挙げられるだろう。

5. 試訳

本節では、筆者自身の翻案を提示したい。

1 How heavy do I journey on the way, 2 When what I seek (my weary travel's end) 3 Doth teach that ease and that repose to say, 4 'Thus far the miles are measured from thy friend.' 5 The beast that bears me, tirèd with my woe, 6 Plods dully on, to bear that weight in me, 7 As if by some instìnct the wretch did know 8 His rider loved not speed being made from thee: 9 The bloody spur cannot provoke him on, 10 That sometimes anger thrusts into his hide, 11 Which heavily he answers with a groan, 12 More sharp to me than spurring to his side, 13 For that same groan doth put this in my mind, 14 My grief lies onward and my joy behind.	いかに荷の　重たい旅か、 希求すは　(長途のおわり) 休息と　安堵が告げる　教訓は、 「友からの距離　とんだ徒爾だ」[9] 頓馬の呻き　駄馬も辟易 とぼとぼと　徒労に耐える 鈍な馬、 聡い駄馬　本能もちい　悟ること 乗り主は　友からの距離　奔馬好まぬ 拍車の刃先 彼には効かぬ　無益な血 時として　怒りに任せ　腹蹴るも 聴こえるは　重々しげな　ひと呻き 突き刺さる　脇の拍車より　鋭利な呻き 何故ならば　呻きが刺さり　咀嚼する 鼻先に憂さ　尻尾に喜悦

[9] L4 は当初「とんだ蛇足だ」と訳していましたが、馬の縁語の中に蛇を連想させる語が紛れ込むことは避けたほうが良いと岡部未希さんからアドバイスをいただいた。そして、「蛇足」から「徒爾」という熟語に変更した。

次に、翻訳にあたりいくつか工夫した点を列挙する。まず音韻的に工夫した部分に言及する。耳に心地よいように、できるだけ全体的に 5.7 調にした。 [10]頭韻の形式的等価を目指すため、L4 m 音の頭韻を 「友」「とんだ」「徒爾」といった「と」の頭韻にうつした。L5 の b 音の頭韻を「呻き」「辟易」の「き」の脚韻に等価した。

馬と乗り手の境界が曖昧であることがわかるように、馬の縁語を、乗り手の動作に使用した。例えば L5 の乗り手を指す "me"は「頓馬」と翻訳した。乗り手が、旅の帰結を思い知らされることを描写した L13 For that same groan put this in my mind では「咀嚼」という馬の縁語を使用した[11]。

さらに大場訳でも「駆りたてる」の使用があることから、馬の縁語を使用するという着想を得た。そこで、馬という字体の入った熟語、「頓馬」「駄馬」「奔馬」、馬の身体部位「鼻先」「尻尾」の使用を意識した。大場が、L14 を「ぼくの行手にはただ悲しみ、喜びは後方(しりえ)に遠のいていくばかり。」と翻訳したことから、「後方」は、「尻」との掛詞 "pun"なのではないかと推測した。よって筆者も "behind"を馬の肉体を連想させる「尻尾」と翻訳した。

L7「聡い駄馬」では、原文の L7 As if by some instìnct the wretch did know という微かなオクシモロンを翻訳した。L7 "As if by some instìnct the wretch did know"は、知識を持ち合わせない獣("the wretch")が、乗り手の気持ちを知悉する("know")撞着語法(oxymoron)的な表現であることはすでに述べた。そこで"wretch"は、「駄馬」と翻訳した。「駄馬」には、否定的な意味しかないが、「聡い」と形容することで、肯定的な意味を添えた。動物が高い知能を持つというオクシモロン的な効果を「聡い駄馬」と訳出することで再現しようとした。

L7 "some"はフランス語では荷運び用の動物"somme" との掛詞である(Booth,1978)。他にも、50 番においてかなりの数の掛詞(pun)が見られる。そこで拙訳でも掛詞(pun)を訳出することを試みた。L7 では、「どんな馬」という疑問の投げかけ、そして「鈍な馬」という馬の性質、二重の意味をのせた。そして「どんな馬？」という問いかけの後に、「聡い駄馬」という答えを置くことで、掛詞による問答をひそませた。

また、坪内逍遥が、L8 His rider loved not speed being made from thee:を「疾駆を好まざらむ、と(坪内,1934;81)」と翻訳していたことに着想を受け、「奔馬は好まぬ」と訳した。[12]

L12-13 原文の聴覚と触覚の共感覚(synesthesia) を「突き刺さる　脇の拍車より　鋭利な呻き」に反映させた。また、 "bloody spur"という転移修飾語(transferred epithet)の形式を別の箇所で等価するために、「鋭利な呻き」と訳出した。

6. 結語

本稿では、シェイクスピアのソネット 50 番について考察した。まずはじめに、1 節で、詩の解釈や音象徴について考察し、2 節では分析に移った。2.1 では、馬の立場に言及し、 "wretch"の意味を掘り下げた。2.2 では、馬の乗り手の関係を三種類紹介した。そして 50 番は、正確にはどの分類にもあてはまらないことを示した。2.3 では、馬と乗り手の感覚の共有について考究した。3 節ではメタファーについて言及した。4 では、50 番と 51 番の共通点について考察した。5 節では、拙訳を示した。拙訳には、ここまで分析してきた馬と乗り手の境界の曖昧性に対する解釈や"wretch"の意味を生かした。

馬は、真実を明るみにする残酷な宣告者(L13,14)でもあり共感者(L7,8)でもあるというアンヴィバレントな存在である。馬への擬人化は L5 から始まり、"wretch"も擬人化である。50 番と 51 番で対をなしているが、完全に対照的とも言えない。抽象的である「心が重い」というメタファーを "plods dully" "groan"などで具体化してくれるのが、馬である。馬が概念メタファーを体現しているからこそ、愛着が生まれてくるのだ。その愛着が"wretch"に表れている。しかしその愛着が続くのもつかの間で、最後には、L2-4 で仄めかしていた友からの距離の意味を L14 で残酷に宣告

---

[10] 認知レトリック論 B の授業で、九鬼周造による日本語詩の脚韻を考察したことをきっかけに、日本語でも脚注を踏めるということを学習し、脚韻の効いた訳出を行った。

[11]「咀嚼」は、馬の縁語とはっきりとは言い難いが、歯をすり合わせ食べ物を噛み砕く馬のイメージを喚起させようと試みた。

[12] 筆者は、三島由紀夫『豊饒の海』第二巻『奔馬』の英語翻訳を考察中であったため、オマージュとして故意に「奔馬」という語彙を用いた。

するのだ。こうした一筋縄ではいかない性質を持つ馬は、次第に存在意義を増し、それが後半部分の h 音の音象徴に表れていた。

付録　本稿で考察した “wretch”の訳出部分には下線をひいている。

旅に出たが、道中ぼくの足取りは重い、
つらい旅によって、求める目的地に達したにせよ、
得られる安堵と休息は、次のことでしかない、
「今日はこれだけ何マイルも友から離れたわけだ」と。
ぼくを乗せた馬は、ぼくの悲しみで疲れ果て、
ぼくの重い心を運ぶためか、とぼとぼと歩む。
畜生のくせに本能で感じ取っているのだろう、
乗っている人間が君のもとから離れたがってはいないのを。
　時々やけになってやつの腹皮に拍車で蹴りを入れるが、
　血が出てもやつは早く歩き出そうとしない、
　悲しげにうめいて答えるだけ、それがぼくには、
脇腹への蹴りよりもいっそう痛く感じられるのだ。
　　そのうめき声がぼくに思い知らせる、
　　旅の先にあるのは悲しみだけ、喜びは置いてきたのだ、と。
(柴田,2004;53)

なんと重い心でぼくは旅を行くことか、
もの憂い旅の苦労の終り、やっと辿り着いたその宿で、
ほっとした安堵と休息が、なんとこんな口上のご挨拶、
ここまでの遙かな道程(みちのり)はご友人からの別離の距離でしたねなどと。
ぼくを乗せる馬も、ぼくの悲しみに疲れ果て、荷となる
悲しみの重みに喘ぎながら、とぼとぼ、のろのろ、重い足取り。
可愛いやつめ、動物の本能とやらで感づいているのか、
君から遠のくばかりのその速度を鞍の上の主人が嫌がっているのを。
腹立ちまぎれにそいつの脇腹を蹴りつけたりもする、
だがそんな血の拍車でやつを駆り立てられるものか、
返ってくるのは重く悲しげな呻(うめ)き声、
脇腹への拍車どころかそれがぼくにはずっと痛々しい。
　だってその声はぼくの心に思い知らせてくれるのだよ、
　ぼくの行手にはただ悲しみ、喜びは後方(しりえ)に遠のいていくばかり。
(大場,2018;115)

どんなに重いこころと足どりで　私は旅を行くことかーー
もの憂い旅の終り　私の目的地に　やっとたどりついても
私が見出す憩いやくつろぎは　はるばると来た路のりだけ
君から遠ざかったことを　私に思いしらせるばかりだから
私を乗せた馬は　私の不幸にうんざりしながらも
のろのろ足を動かして　私のこころの重荷をはこぶ
畜生ではあるが　本能的に感づいているかのようだ
乗り手の私が　君から遠ざかってゆく速度を好まぬことを
ときには腹立ちまぎれに　馬の皮に喰いこむほどに強く
残酷な拍車をあてても　馬を駆り立てることはできない
馬はそれに答えて　重々しくうめき声を立てる　それが
私の耳には　横腹に当てる拍車よりも鋭くひびいてくる
　なぜなら　そのうめき声は　私のこころに強くきざみこむのだ
　私の悲しみは前に横たわり　私の喜びは後にのこることを
(中西,1976;102-103)

参考文献

大場健治訳.(2018).『ソネット詩集』研究社.

大森文子.(2020).「*The Lion's Parliament* における寓意のメタファー」『レトリックとメディア』大阪大学大学院言語文化研究科.pp.21-32.

シェイクスピア,ウィリアム.(1909).『悲劇オセロ』菅野徳助訳.有朋堂書店.

シェイクスピア,ウィリアム.(1958a).『ヘンリー五世』小田雄志訳.白水社.

シェイクスピア,ウィリアム.(1958b).『リチャード二世』小田雄志訳.白水社.

シェイクスピア,ウィリアム.(1973).『オセロー』福田恆存訳.新潮社.

シェイクスピア, ウィリアム.(1967).『オセロー』菅野徳助訳.新潮社.

シェイクスピア,ウィリアム.(1983).『ロミオとジュリエット』福田恆存訳.白水社.

シドニー,フィリップ.(1976).『シドニ詩集』中田修訳.東京教学社.

柴田稔彦訳.(2004).『対訳　シェイクスピア詩集—イギリス詩人選(1)』岩波書店.

高松雄一訳.(1986).『ソネット集』岩波書店.

坪内逍遥訳.(1934).『詩篇其二』「シェークスピヤ全集　39 集」中央公論社.

中西進太郎訳.(1976).『シェイクスピア・ソネット集』英宝社.

渡辺秀樹.(2019).「英詩感情語のメタファーの系譜　第 2 回　シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考 : 感情語の類義・反義を中心に１」『レトリックとコミュニケーション１』pp.1-10.

Booth, S.(1978). *Shakespeare's Sonnets*(revised ed.) .Yale U.P.,

Edmondson,P and Stanley.W.(2004) *Shakespeare's Sonnets.* Oxford:Oxford University Press.

Evans, G. (1996). *The Sonnets.* Cambridge University Press.

Kerrigan,J.(1986).*The Sonnets and A Lover's Complainant*. New Penguin Shakespeare

Kövecses ,Z, (2002).*Metaphor: A practical introduction*. New York: Oxford University Press

Lakoff,G. and Johnson, M.(1980). *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press: Chicago.

インターネット資料

Vendler,H.(1997). *The Art of Shakespeare's Sonetts*.The Belk Press of Harvard Universuty Press. Cambridge, London, England.〈https://engleskaknjizevnostodrenesansedoneoklasicizma.files.wordpress.com/2017/08/sonnets.pdf〉[online1](accessed March 31,2021)

Sidney,P.(1877).*The Complete Poems of Sir Phillip Sidney*, Alexander B.G.(Eds.)https://sourcetext.files.wordpress.com/2018/01/1_sidney.pdf[online2] (accessed March 31,2021)

日文研和歌データベース〈https://lapis.nichibun.ac.jp/waka/waka_i153.html〉[online3](最終閲覧日 4 月 8 日(木))

辞書

Oxford English Dictionary(http://www.oed.com.)

松村明編(2012).『大辞泉』第二版.小学館.

南出康世編(2001).『ジーニアス英和辞典』第三版.大修館.

増田剛編(2003).『新和英大辞典』第五版.研究社.

シェイクスピアのソネット 147 番における平行構造とメタファー

岡部未希

1. はじめに

本稿では、ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564–1616）の『ソネット集』から 147 番を取り上げ、平行構造とメタファーの観点から考察する。147 番は愛や欲望を主題としているが、シェイクスピアのソネットの中には類似したテーマを用いているものがある。そこで、118 番と 129 番を比較対象とし、各詩で使われているメタファーの類似点や相違点を探る。さらに、147 番の 4 つの日本語訳を比べ、最後に筆者による翻訳案を記す。

2. ソネット 147 番とその解釈

詩の構造やレトリックを分析する前に、詩をじっくりと読み、丹念にその解釈を行いたい。ソネット 147 番のテクスト本文は以下の通りである。尚、シェイクスピアの『ソネット集』は編集者によって記号の使い方等が異なるのだが、本稿では Evans（ed.）（2006:100）を底本としている。

My love is as a fever, longing still
For that which longer nurseth the disease,
Feeding on that which doth preserve the ill,
Th'uncertain sickly appetite to please.
My reason, the physician to my love,
Angry that his prescriptions are not kept,
Hath left me, and I desperate now approve
Desire is death, which physic did except.
Past cure I am, now reason is past care,
And, frantic mad with evermore unrest,
My thoughts and my discourse as madmen's are,
At random from the truth vainly expressed:
    For I have sworn thee fair, and thought thee bright,
    Who art as black as hell, as dark as night.

私の恋（"My love"）という書き出しから想像できる通り、これは恋の詩である。『ソネット集』の前半においてシェイクスピアが愛を捧げる相手は美貌の青年だったが、後半 127 番以降は一般に「黒い女」と呼ばれる女性となる。147 番でも最終行に、黒い（"black"）、暗い（"dark"）、という形容詞が使われており、語り手（"I"）の恋の相手（"thee"）はその「黒い女」であることが推察される。ただ、その恋は夢見心地で幸せに浸るような、ぬるま湯の恋ではなく、喩えるならばまるで熱病（"fever"）という病気（"ill / disease"）のようだ、と言う。しかも、すぐに治るような病気ではない。気まぐれで病的な欲（"Th' uncertain sickly appetite"）を満たすために、病気自身が病気を養うようなものを欲しがり、病気を長引かせるものをバクバクと食べてしまう。その結果、語り手はずるずる長引く恋という病に犯され続けているのである。

5 行目の第 2 連から、恋患いに対する医師（"physician"）が登場する。その医者は語り手の理性（"My reason"）なのだが、せっかくの処方（"prescriptions"）、すなわち禁欲を患者（"I"）が守らないことに怒って、語り手を見放してしまった。それに絶望した語り手は、医術が禁じた（"physic did except"）肉欲（"desire"）は死をもたらすのだと、今身をもって知る。

9 行目は柴田（2004:136）が「'Past cure, past care'（「治りっこないものは諦めろ」）という諺だがここでは意味の上で逆の順序に変形されている」と指摘しているように、諺をもじった表現である。すなわち、理性が見放してしまったら、もう治る見込みはない。その結果、常に不安に苛まれ、錯乱状態になり（"frantic mad"）、思考も言葉も狂者のようで、真実からかけ離れたことを愚かにも手当たり次第に語った。

というのも、恋する相手を美しい（"fair"）と誓い、輝かしい（"bright"）と思ったのだが、実のところその女は、容姿も心も地獄のように黒く（"as black as hell"）、闇夜のように暗い（"as dark as night"）のだ。このように真実とは異なることを口走ってしまうから、語り手は病気でいよいよ狂っていると言わざるをえない、という結論である。

このソネットでは「恋」を「病気」にたとえており、そのイメージを鮮明にするかのように詩全体に「病気」に関係する語が散りばめられている。また、4 行目の“appetite”は「食欲」と「性欲」の掛け言葉で、高松（1986:273）は、第 1 連の病を長引かせるもの（“that which longer nurseth the disease”）は「具体的には女の肉体をさす」と解釈している。「恋愛」を「病気」にたとえるメタファー、そして「性行為」を「食事」に見立てる比喩はソネット 118 番にも見られる。また、愛と肉欲の関係性はソネット 129 番でも語られている。各比喩の詳細な分析は第 4 節で、他のソネットとの比較は第 5 節で行うとして、次節ではそれに先立って、147 番で用いられているレトリックに着目したい。

3. ソネット 147 番のレトリック

本節で着目するレトリックは以下の 7 点である：頭韻（alliteration）、同一語源の異形の繰り返し（polyptoton）、行またがり（enjambment）、対句（antithesis）、平行構造（parallelism）、繰り返し（repetition）、同じ語（形態素）だが異なる意味をもつ語の繰り返し（antanaclasis）。

まず、頭韻について以下のように表にまとめた。表 1 は、ソネット 147 番のどの単語がどの音で韻を踏んでいるのかを示している。単語の後の（　）は単語が位置する行数を表す。

頭韻	単語
[l]	love (1), longing (1), longer (2)
[d]	desperate (7), Desire (8), death (8), did (8)
[p]	Past (9), past (9)
[k]	cure (9), care (9)
[m]	mad (10), My (11), my (11), madmen’s (11)

表 1 ソネット 147 番の頭韻

面白いことに、頭韻を踏んでいる単語はこの詩の中で重要な位置を占めるものばかりである。特に[d]の頭韻は詩の中心概念である病気（“disease”）にも繋がる。そこで、これらの単語を繋ぎ合わせてみよう：「おれの恋は長引く病気、絶望して実証したのは肉欲がもたらす死、見放されてもう治る見込みはない、そして狂ったおれ」これだけで詩の大意となっていることが感じられるだろうか。読者が詩を読み上げると、ストーリーの鍵となる言葉に耳が引っ掛かりを覚えるようになっているのである。

次に、5 行目の“physician”と 8 行目の“physic”は同一語源の異形の繰り返しである。頭韻というほど 2 つの単語は近いところに配置されていないのだが、やはり音を意識したのであろう。これが、どちらかを“doctor”や“medicine”などに変えると、音の繋がりは絶えてしまう。

ソネット 147 番にいて行またがりが起きているのは 1 箇所だけである。すなわち、7 行目から 8 行目の“…and I desperate now approve / Desire is death, …”という部分だ。絶望した語り手が何かを実証したのだと言い、その内容を後出しすることで、肉欲が死をもたらすことが語り手にとってどんなに衝撃的な事実だったかが分かる。

また、最後の 2 行では対句が使われている。“fair”は“black”、“bright”は“dark”と対になっておりどちらも色や明るさに関する語だが、これらには 3 つの対比的意味を暗示している。まず「色白で金髪の」と「黒色の」という客観的な容姿に関するもの、次に、容姿が「美しい」「醜い」という外観の美醜に関するもの、最後に心が「善い」「悪い」という道徳的価値観に関するもの、である。2 つの対句で 3 つの意味を含意する重厚な構造になっている。

筆者がこの詩において特に着目すべきだと考えるレトリックは、平行構造である。ソネットは 1 から 4 行目、5 から 8 行目、9 から 12 行目、13・14 行目で、それぞれ 4 つの連に分けることができるが、147 番はどの連も 1 文で成り立っている。そして詩をじっくり眺めると、詩全体を通して“and”と“,”を使い 2 つのものを並列するような平行構造が見受けられる。加えて、同じ語、同じ概念の繰り返し（“my”, “disease / ill”, “appetite / Desire”, “that which”, “past”, “thee”, “as” ）や、同じ語（形態素）だが異なる意味をもつ語の繰り返し（“mad / madmen’s”）も見られる。特に近い位置での 2 回の繰り返しが多く、全体の平行構造を意識したものだと思われる。また、第 2 連と第

3 連では、“my reason”、“I”、“my thoughts and my discourse”がどのような状態（感情）でどのような行動をしたのか、状態と動作が並べられていることにも着目したい。

このように詩全体が並列・対比の形式をとることで、愛というどうしようもない熱病を患っている「おれ」とその愛の治療を放棄した「理性」の対比、ひいては、恋をする「おれ」と恋される「おまえ」の対比が浮かび上がってくると思われる。

さらに、詩中で 2 箇所、この平行構造が崩れており、「作品内部での逸脱（internal deviation）」（Leech and Short 2007:48） が見られる。すなわち、4 行目の“Th’uncertain sickly appetite to please.”と、10 行目の“And, frantic mad with evermore unrest,”である。「（おれの愛の）気まぐれで病的な欲望」の様子や「（おれが）常に不安に苛まれ錯乱状態となっている」様子を語るときには、詩も気まぐれで狂ったように、形式的な構造を崩している。

これらを図にまとめると、以下のようになる。図 1 は Leech and Short（2007:48）を参考に作成した。一部語順を入れ替え、（　）で単語を補っている。①②③④は連の番号を表している。また、同じ語・形態素・概念の繰り返しがある場合、□で囲み字にしている。

① My love
[= a fever]

longing still for	that which	nurseth longer	the disease
feeding on	that which	doth preserve	the ill

（in order） to please th’uncertain sickly appetite

② My reason
[= the physician to my love]

(is) angry	that his prescriptions are not kept
hath left	me

I
[= (the patient)]

(am) desperate	now
approve	(that) Desire [which physic did except] is death

③

I	am	past	cure
reason	is	past	care now

(I am) frantic mad with evermore unrest

My	thoughts
my	discourse

are (mad)	as madmen’s (thoughts and discourse)
expressed	vainly at random from the truth

④ For I have

sworn	thee	fair
thought	thee	bright

who art

as black as	hell
as dark as	night

図 1 ソネット 147 番の構造

4. ソネット 147 番の比喩

4.1 ＜愛は病である＞

本節ではこの詩で使われている比喩の考察を行う。先に述べた通り、詩全体に「病気」に関係する語が散りばめられている（ “fever”, “disease”, “ill”, “sickly”, “physician”, “prescriptions”, “death”, “physic”, “cure”）。そして“My love is as a fever”という直喩（simile）や、“My reason, the physician to my love,“という隠喩（metaphor）を織り交ぜながら、詩全体を通して<愛は病である> という比喩が使われている。起点領域と目標領域の対応関係は以下の表の通りである。

連	起点領域：病 （“sickness”）	→	目標領域：愛 （“love”）
①	病気：熱病 （“a fever”） （=病気になると体温が上がる、 顔が赤くなる） 患者 （=病気を治したい） 病を長引かせるもの（=薄着、外出など）を欲しがる （“longing …”）	→	女に対する愛 （“My love”） （=興奮すると体温が上がる、 顔が赤くなる） 語り手 （“I”） （=女への恋情を断ち切りたい） 愛を深めるもの（=女の肉体 / 性行為）を切望する
②	医者 （“the physician”） 医者が処方箋（“prescriptions”）を出す 患者は処方を守らない 医者が禁止したものを摂取すると死（“death”）に至る 医者が治療を放棄する （“hath left me”）		理性 （“My reason”） 理性が禁欲を命じる 語り手は禁欲を行わない 理性が禁じた淫欲（“Desire”）を満たすと身が破滅してしまう 理性を失う
③	→病気が治る見込みはない （“Past cure I am”） 患者は気が狂って譫言を言う		→女に対する愛がなくなる見込みはない 語り手は気が狂って（“frantic mad”）譫言を言う（“At random from the truth vainly expressed”）
④	（=現実とは異なる妄言を言う）		（=本当はそうではないのに、自分が恋する女を美しいと言い輝かしいと思う）

表 2 比喩＜愛は病である＞の対応関係

愛を熱病という病に喩えるこの比喩は、病気になると体温が上がって顔が赤くなるように恋をして興奮すると体温が上がって顔が赤くなる、という類似性が動機づけとなっている。病を患う患者は語り手自身で、医者にかかっていることから、おそらく病気を直したい、つまり女への恋情を断ち切りたいと望む思いはあるものの、結局病を長引かせるものを自ら欲してしまう。恋愛で言うところの愛を深めるもの、つまり女の肉体、性行為のことである。

第 2 連では理性という医者が登場し、禁欲の処方箋を出すのだが、患者である語り手はそれを守らない。禁じられた淫欲を満たすと身の破滅を引き起こすのだと自ら実証してしまう。医者が治療を放棄する、とはすなわち、語り手が恋に溺れて理性を失ってしまったことを表している。

第 3 連では、理性という医者が見放してしまったら病気が治る見込みはない、つまり、どうしても女に対する愛がなくなる見込みはない、と語り手は嘆く。死に至る病に絶望すると、患者は気が狂って譫言を言うようになる。同様に、語り手は現実とは異なるのにもかかわらず、女を賛美する言葉を紡ぐのである。

4.2 ＜愛はむさぼり食う者である＞

147 番では、愛は病であるだけなく、性行為をむさぼり食う者でもある。そこで、＜愛はむさぼり食う者である＞という比喩が立てられる。ここでの愛は擬人化（personification）されている。

連	起点領域：むさぼり食う者 （“devourer”）	→	目標領域：愛 （“love”）
①	むさぼり食う者は食欲 （“appetite”）を満たしたい 食べ物を食べる （“feeding on…”）	→	恋した人は淫欲 （“appetite / Desire”）を満たしたい 性行為をする
②	→食べ過ぎると死ぬ（“death”）		→性行為に溺れすぎると身が破滅する

表 3 比喩＜愛はむさぼり食う者である＞の対応関係

この比喩は“appetite”が「食欲」と「淫欲」の 2 つの意味を併せ持つ語であることや、食事でも性行為でも、口を使う動作が共通していることなどが動機づけとなっている。食欲を満たそうと思う人は食べ物を食べるわけだが、食べすぎると死んでしまう。同様に、恋をしたら淫欲を満たしたいと思って性行為をする。しかし、その行為に溺れすぎると身が破滅してしまうのである。

5. その他の sonnet との比較

5.1　食と病気のメタファー：ソネット 118 番

本節では、ソネット 147 番と他のソネットを比較し、その類似点や相違点を考察する。まず、ソネット 118 番を比較対象とし、特にメタファーに着目したい。以下に示すのはソネット 118 番のテクスト本文である。日本語訳は高松（1986:163-164）によるものである。

Like as to make our appetites more keen
With eager compounds we our palate urge,
As to prevent our maladies unseen
We sicken to shun sickness when we purge:
Even so, being full of your ne’er-cloying sweetness,
To bitter sauces did I frame my feeding,
And, sick of welfare, found a kind of meetness
To be diseased ere that there was true needing.
Thus policy in love, t’anticipate
The ills that were not, grew to faults assured,
And brought to medicine a healthful state
Which, rank of goodness, would by ill be cured.
　　But thence I learn, and find the lesson true,
　　Drugs poison him that so fell sick of you.

ひとは、欲望をいっそう研ぎすますために、
からい前菜で味覚を刺戟しもするし、
まだ兆候も見えない病いをやりすごすのに、我から
下剤をかけて病気になり、病気を避けることもする。
私も同じで、飽きようはずのないきみの優しい甘さに
腹ふくれたから、からい薬味に口をあわせたのです。
幸福に食傷したから、本当はその必要がないのに、
この辺で病気になっておくのがよかろうと考えたのです。
こうして、ありもしない病気に備えた
愛の方策が、ほんものの病いをつくりだし、
健康な体を薬づけにしてしまった。これも体に
幸福がありあまり、病気で治そうとしたせいなのです。
　でも、おかげで私はまことの教訓を学んだ。つまり、
　こうして君に飽いた男には薬もまた毒になる。

ソネット 118 番は 14 行も使って浮気の言い訳をしている詩である。「君の愛に満足している」と繰り返し言うが（“being full of your ne’er-cloying sweetness”, “sick of welfare”, “rank of goodness”, “so fell sick of you”）、その状態は「病気」（“sick”）であり、他人と関係を持って治す必要があったのだ、と主張する。

まず、我々人間は食欲（“appetites”）を鋭くするためにわざわざ辛い薬味（“eager compounds”）で味覚（“palate”）を刺激することがあるだろう、と言う。そしてまだ兆候もない病気（“maladies unseen”）を防ぐためにわざわざ病気にかかることもあるだろう。下剤を服用して（“purge”）一時的には病気になる（“sicken”）が、腹の中で悪さをする可能性のある要素を取り除くことで、病気を避ける（“shun sickness”）ことになるのである。

続く第 2 連で、これらの一般論を語り手は自分の浮気の言い訳に使う。恋人の優しい甘さ（“sweetness”）で満腹（“full”）になってしまったから、味覚を刺激しようとして苦い薬味（“bitter sauces”）に手を出してしまった。つまり、恋人との満ち足りた恋愛に飽きたから、別の愛人と関

係を持ってしまったのだ。5 行目で恋人には飽きるはずもない（“ne’er-cloying”）と言っているが、実際には語り手が恋人との関係に飽きていることが窺える。また、同じことを病の比喩を使って言い換える。恋人との健全な生活に満ち足りてもはや病気であった（“sick of welfare”）から、そのマンネリという病気を治そうとしてわざわざ他の人と関係を持つと言う病気になった（“To be diseased”）のだ。しかし、その治療薬（“Drug”）は本物の病気（“faults assured”）を生んでしまい、結局は毒（“poison”）だったわかった、と語り手は言う。

147 番・118 番のどちらの詩でも＜愛は病気である＞というメタファーが使われているが、その細部は異なっている。147 番では理性という医者が病気を治す処方として禁欲を命じていたが、118 番では恋人とのマンネリという愛の病気を治す方法は、恋人以外と関係をもつという他の愛の病気なのである。しかしその治療法は結局本物の病を生み出してしまったと言い、語り手がその愛人との関係に逆に嵌ってしまったことが示唆されている。

また、147 番では＜愛はむさぼり食う者である＞というメタファーをたてたが、118 番では＜愛は味覚である＞。どちらにも共通しているのは、このメタファーが「食欲 / 肉欲」両方の意味ももつ“appetite(s)”という単語を中心に成り立っており、「食べること」を「性行為」に見立てている点である。

連	起点領域：病 （“sickness”）	→	目標領域：愛 （“love”）
②	病気（“sick of welfare”）を治すために（“be cured”） あえて病気になる（“To be diseased”）という治療を試す	→	恋人との満ち足りた関係に飽きた状態を打破するために 他人と関係をもってマンネリ解消を図る
③	本当の病気（“faults assured”）になってしまう		愛人との関係にハマってしまった

表 4 比喩＜愛は病である＞の対応関係

連	起点領域：味覚（“palate”）	→	目標領域：愛（“love”）
②	美味に飽きる（“full of … sweetness”） 食欲（“appetites”）を研ぎすますために、ぴりっとした味で（“eager compounds / bitter sauces”）	→	恋人との満ち足りた恋愛に飽きる 肉欲（“appetites”）を研ぎすますために、他人と関係を持って
①	味覚を刺激する（“we our palate urge”）		恋心を刺激する

表 5 比喩＜愛は味覚である＞の対応関係

5.2 愛と肉欲：ソネット 129 番

続いて、愛と肉欲について語るソネット 129 番と、本稿の主題である 147 番を比較したい。以下に示すのが 129 番の本文であり、日本語訳は高松（1986:177–178）によるものである。

Th’expense of spirit in a waste of shame
Is lust in action, and till action, lust
Is perjured, murd’rous, bloody, full of blame,
Savage, extreme, rude, cruel, not to trust,
Enjoyed no sooner but despisèd straight,
Past reason hunted, and no sooner had,
Past reason hated as swallowed bait
On purpose laid to make the taker mad:
Mad in pursuit, and in possession so,
Had, having, and in quest to have, extreme,
A bliss in proof, and proved, a very woe,
Before, a joy proposed, behind, a dream.

All this the world well knows, yet none knows well
To shun the heaven that leads men to this hell.

恥ずべき放埒のあげくに精気を消失すること、これが
淫欲の行為というものだ。また、行為に至るまで、淫欲は
偽証や、殺人や、流血をこととし、数多くの罪を犯し、
野蛮、凶暴、残忍、無慈悲にして、とうてい頼みがたい。
人はいったんこれを享楽しおわれば、たちまちにして蔑む。
分別を打ちやって探し求めても、手に入れてしまえば、
分別を打ちやって憎む。人を狂わせるために
仕かけた餌を呑みこめば、こうもあろうというように。
追いもとめる時が狂乱の態なら、手に入れても狂乱の態。
行為の後も、最中も、これからという時も凶暴のきわみ。
体験の最中は至福を味わうが、体験の後には悲しみだけが残る。
前方には歓びが見えても、ふりかえれば一片の夢にすぎぬ。
　世の人だってそれはとくとご存知だが、こういう地獄に
　人をつれこむ天国を避けて通るすべは、誰も知らない。

この 129 番の詩によると、淫欲（“lust”）は呑み込む人を狂わせる罠（“swallowed bait / On purpose laid to make the taker mad”）のようなものである。男は理性なく淫欲を求め（“Past reason hunted”）、手に入れた後も理性なく嫌悪する（“Past reason hated”）。追い求める時も、手中に収めた時も、男は狂っている（“Mad in pursuit, and in possession so”）。行為の最中は至福を味わうが、事が終われば悲惨なものだ。その事実を誰もが知っているのにも関わらず、天国へと誘う地獄の穴を避ける術は知らないのである。

肉欲が人を狂わせる罠だと知っていながらうかうかと嵌ってしまう様子は、147 番の語り手が理性という医者の言うことを聞き流して、恋した悪い女との行為に嵌り、恋患いが長引いてどんどん気が狂っていく様子に類似している。

6. ソネット 147 番の日本語訳

最後に、これまでの考察を踏まえていくつかの日本語訳を比較し、筆者の試訳を示したい。まず、比較する日本語訳は中西（1976:296-297）訳、高松（1986:201–202）訳、柴田（2004:137）訳、大場（2018:325）訳の 4 点である。以下に出版年順に示す。

（中西訳）
私の恋はまるで熱病のようだが　この病気が
いつでも長びくように　私はつねに願っている
移気で病的な欲望を満足させようと　私は
病気を温存させて　それをいのちの糧としている

私の恋の主治医をつとめる　私の理性は
彼の処方が守られないことに　腹を立てて
私の[1]見放してしまった–医術をこばむ欲望が
死にいたる病であることを　絶望の思いで私は悟る

なおる見込みのない病気を　理性はかまってくれず
つのる不安に　私は精神錯乱の状態におちいり
思うことも言うことも　すべては気狂い沙汰で
真実を見失って　あわれや支離滅裂のありさま

[1] 原文ママ

それというのも　光り輝く美女と信じていた君が
その実　地獄よりも夜よりも　暗くそして黒いからのこと

（高松訳）
私の愛は熱病のようなものだ。いつでも、
病気をなおさら養い育てるものを欲しがり、
患いを長引かせるものを食べて、
気まぐれで、病的な食欲を満たしている。
私の理性がこの愛をなおす医者なのだが、
処方をまもらぬと怒って、私を見捨てた。
病状は絶望におちいり、私は薬をこばむ欲望が
死にひとしいのをこの身で知った。
理性に見放されたからには回復する見込みはない。
私はたえず不安にさいなまれて錯乱している。
わが心も、言葉も、狂人のそれと同じで、
ひどく的はずれなうえ、愚にもつかぬ話しぶりだ。
　おまえは地獄のように黒く夜のように暗いが、
　私は美しいと誓い、輝くばかりと見たのだから。

（柴田訳）
ぼくの恋はまさに熱病だが、しかし病いを養って、
わざと長引かせることに執心しているような熱病だ、
間歇的に起こる病的な欲望を満たすために、
いつまでも病み続けることを糧としている。
ぼくの恋患いを癒すはずの理性という医師は、
処方した治療法をぼくが守らないのに怒り、
ぼくを見捨ててしまった。絶望したぼくは、
医師が禁じた欲情は死をもたらすことを実証している。
理性がさじを投げてしまったのだから、もう手おくれだ。
ために、募る不安の内にぼくは狂乱状態、
考えることも発することばも狂者のそれ、
手当たり次第に埒もないことをむなしく口走る。
　ぼくはあなたを美しいと断言し、立派な人だと考えたが、
　実際には、地獄のようにどす黒く、闇夜のように暗い。

（大場訳）
おれの愛はまるで熱病だ、病気を癒すどころか
当の病気を養い長引かすものをひたすら求め続ける、
食欲も気まぐれ、まるで病的、
食べれば病いがますます募るばかり。
こんな愛の主治医たるわが理性は、せっかくの処方を
守ろうとせぬこのおれに腹を立て、おれを見放してしまった、
それでもうおれは自暴自棄、肉欲の念（おもい）は死であるとの教えを
実証するのに余念がない、医術が肉欲を禁じたのも蓋（けだ）し道理か。
まことに理性の看護なくてはこの身の治癒もありえぬからには、
果てない不安にただもう狂い乱れて、
思うも、語るも、すべて狂人のそれ、
真実も何も行き当たりばったりのただ上の空。
　考えてもみろよ、おれはお前を美しいと誓い、お前を明るいと信じてきた、
　だが実際には地獄のように黒く、夜のように暗い。

これらの日本語訳を比較する上で検討すべき点を 6 点挙げたいと思う。

まず、人称の訳し方についてである。英語では誰もが“I”を用いるが、日本語では「おれ」「ぼく」「わたし」「わたくし」「うち」などと様々なバリエーションがあり、尚且つ話し手のアイデンティティを示す一材料となり得る。中西訳・高松訳では「私」、柴田訳では「ぼく」、大場訳では「おれ」と、やはり翻訳者によって採用しているものが異なっている。悪い女にたぶらかされる弱い男、ということを考えると「ぼく」でも良いと思われるが、愛に溺れた結果気が狂い、言葉も荒れてしまうと考えると、筆者としては「おれ」が一番 147 番の語り手の雰囲気に合うのではないかと思う。また、“thee”も「君」「あなた」「お前」と訳者によって表現が異なるのだが、最終行で、どう考えてもこの女に魅力はないはずなのに、と語り手は相手を少し見下していることを踏まえ、「お前」を採用したい。

次に、“love”を「恋」とするか「愛」とするか、という問題について。『明鏡国語辞典 第二版』をひくと、「恋」は「特定の異性（まれに同性）を強く慕うこと。切なくなるほど好きになること。また、その気持ち」、「愛」は名詞の 2 番目の語義に「人、特に異性を慕う心」とある。したがって、意味の上では大きな違いはない。ただし、日本語には「恋煩い」という、ある人を恋するあまり病気のようになることを表現する言葉がある。語り手は自分を病気だと言うが、彼の病名は「恋煩い」というにふさわしい。そこで、筆者の試訳でも“love”は「恋」と訳出する。

また、第 3 節で、147 番の注目すべきレトリックとして言葉の繰り返しや平行構造を挙げた。訳文においても、できるだけその構造を再現したいと思う。大場訳の散文のような訳文はできるだけ避けたい。

さらに、脚韻の問題がある。147 番は ABAB CDC’D EFE’F GG とほぼ型通りに脚韻を踏んでいる。中西訳や高松訳のように 1 文の長さや文末に拘っている訳はあるものの、原詩通りに日本語訳でも脚韻を再現するのは難しい。なぜなら、日本語は母音の数がかなり限られているからである。そこで、脚韻の代わりに長歌のような 5・7 調を意識した試訳にする。その方が読み手にとって馴染み深い音であると考えたからである。

音に関して他に着目すべきなのは、頭韻である。第 3 節で、詩のキーワードには頭韻が使われていることを述べた。これを反映している日本語訳は柴田訳の「狂乱状態」「狂者」、大場訳の「狂い乱れて」「狂人」などがあるものの、数としては少ないと言えよう。そこで、筆者の試訳では、頭韻[d]はヤ行音の繰り返しに変換（「やけくそ」「欲情」「黄泉」「ゆく」）、頭韻[m]はカ行音の繰り返しに変換（「狂乱」「思考」「狂ってる」「言葉」「狂者」）し、できるだけ原詩の音の構造を再現しようと試みた。

最後に、4 つの日本語訳を見比べて解釈が異なる点があることに気づく。8 行目“Desire is death, which physic did except.”は、「薬（医術）をこばむ欲望」と、「医者（医術）が禁じた欲望」の 2 通りの解釈が成り立つ。前者の解釈を採用しているのが中西訳と高松訳、後者を採っているのが柴田訳と大場訳である。詩では語の順番に関して比較的自由度が高く、今回のケースにおいても、関係代名詞の which を主格と目的格のどちらで解釈することも可能である。ただ、後者の方が、処方を守らない患者の不摂生な生活が伝わるのではないかと考え、「医者（医術）が禁じた欲望」の解釈を採用した

これらの点を踏まえた筆者の試訳は以下のとおりである。

（試訳）
おれの恋　まるで熱病　切々と望んでいるのは
長々と病気を育てるそんなもの、
食べているのはこんこんと病いを延ばすそんなもの、
気まぐれ膨る病的な　その欲望を満たすため。
おれの理性　おれの恋診る主治医だが、
処方守らぬと腹を立て、
患者のおれを見放した、おれはやけくそ、今や実証、
医者が禁じた欲情は　黄泉に続いてゆくのだと。
理性が背けばおれは終いさ、
尽きぬ不安　そして狂乱　そのためか、

おれの思考は狂ってる　おれの言葉も狂者と等し、
語るでたらめ　愚かにも真実からはほど遠し。
　おまえは美し　言い切るが、おまえは明かし　信じるが、
　実のおまえの黒さは地獄、暗さは闇夜。

7. おわりに

本稿では、シェイクスピアのソネット 147 番について、特に構造やメタファーに着目して考察を行った。また、類似したテーマや比喩を用いているソネットとの比較を行い、考察を深めた。さらに、147 番の日本語訳を比較し、レトリックの考察を踏まえて筆者の試訳を示した。詩を考察する際に、ひとつひとつの言葉に着目することはよくあるのだが、一歩引いて全体の構造を眺めることで、より興味深い事実が浮かび上がってくることが分かった。

参考文献

Evans, G. Blakemore (ed.) (2006). *The Sonnets*. New York: Cambridge University Press.

Leech, Geoffrey and Short, Mick (2007). *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London: Longman.

中西信太郎 (訳) (1976). 『ソネット集：完訳』. 東京：英宝社.

大場建治 (訳) (2018). 『ソネット詩集』. 東京：研究社.

柴田稔彦 (編) (2004). 『シェイクスピア詩集—イギリス詩人選（1）』. 東京：岩波書店.

高松雄一 (訳) (1986). 『ソネット集』. 東京: 岩波書店.

（辞書）

『明鏡国語辞典 第二版』. (2010). 大修館書店.

精神の座としての〈腹〉の史的展開再考 －中世以前の表現に注目して－*

博士後期課程 3 年　後藤　秀貴

1　はじめに

本稿は、筆者がこれまでに行った日本語の〈腹〉の比喩的理解に関する史的研究の不足を補填することを目的としている。[1] 後藤 (2019) では、『日本国語大辞典 第二版』（以下、『日国』）の子見出しに記載された「はら（腹／肚）」およびその関連語の慣用表現の初出を観察することで、精神作用の座としての〈腹〉の意味拡張の傾向を把握した。しかし、その調査はあくまで辞書項目としての限られた慣用表現を対象としており、〈腹〉の意味拡張を捉えるための資料としては不十分であった。本稿では、中世以前の漢語表現を中心に、後藤 (2019) での観察対象から漏れていたその他の〈腹〉表現を扱うとともに、データベース中の〈腹〉表現の調査結果を報告をすることで、〈腹〉の意味拡張に関する記述・説明を精緻化する。

構成は次の通りである。第 2 節で後藤 (2019) の問題点の指摘、課題提起をしたのち、第 3 節では本研究で使用するデータベースを紹介する。第 4 節では、後藤 (2019) の観察から漏れていた『日国』の〈腹〉表現のうち、中世以前の漢語表現に焦点を当てて初出例の出典と用例の意味特徴を明らかにする。第 5 節では、「日本古典文学大系本文データベース」から得られた中世以前の〈腹〉表現を観察することで、辞書情報に基づく調査の妥当性を検証する。第 6 節では、本研究の結論と今後の課題を述べる。

2　後藤 (2019) の問題点と本研究の課題

後藤 (2019) では、『日国』の「はら（腹／肚）」およびその関連語の見出し中に含まれた慣用表現（子見出しとしてあげられているもの）の初出を観察することで、精神の座としての日本語の〈腹〉の意味の史的展開を考察した。調査結果として、〈腹〉については中古・中世における怒り、不満、可笑しさ、性向、玩味といった限られた精神作用に関する表現に始まり、近世以降、度量、理解・納得、考え・意図、覚悟・決心等の精神作用を表す表現が出現することで、現代に通じる意味の成熟を迎えたことを指摘した。その上で、認知意味論的立場から、〈腹〉のメタファー的理解の史的展開を【表 1】のように整理した。

表 1.　〈腹〉のメタファーの史的展開（［後藤 2019: 29］を一部変更）[2]

ソース		ターゲット				例
		中古 (794-1191)	中世 (1192-1602)	近世 (1603-1867)	近代 (1868-1944)	
容器	内容物の増量（乱れ）・制御	不満				腹が脹れる、腹に据えかねる、腹が煮える
			怒り			
	内容物の存在・保持			考え・意図		腹の中、腹に一物
	内容物の探索・露呈			考え・意図		腹を探る、腹を割る
	対象の受け容れ			理解・納得		腹へ落ちる、腹に入れる
	受け容れた対象を味わう	玩味				腹に味わう
	容器の大きさ			度量		腹が小さい、腹が太い
	内容物の性質	性向				腹汚い、腹黒い
	内容物を好む			性向		腹に惚れる
具象物	動揺・安定	怒り				腹を立てる、腹を据える、腹を決める
				覚悟（度胸）		
					決心	
	不調・回復	怒り				腹悪し、腹を癒す
	固さ				決心	腹が堅い
	完成				決心	腹が出来る

* 本稿の執筆にあたり、渡辺秀樹先生、大森文子先生から草稿に対するご助言を頂いた。ここに感謝申し上げる。また、漢籍の用例の意味解釈に際してご助言くださった王周明先生、陳栩氏にもお礼申し上げる。

[1] 本稿では、いわゆる現代日本語の「はら」が指示対象とする胴の下半部およびその概念を指して〈腹〉と表記する。

[2] 大森文子先生から表の分類項目・体裁に関するご助言を賜った。また、本稿での上代～近代の時代区分は【表 1】に従う。

しかし、後藤 (2019) での観察対象は「はら（腹／肚）」「おなか（御中）」「ほて」の見出し中にある精神作用を表す慣用表現（子見出し）のみであり、『日国』中の〈腹〉表現を網羅したわけではない。[3] 特に漢語の選定にあたっては、『現代語古語類語辞典』をもとに限られた語を調査しており（「腹部」「腹腔」。いずれも比喩表現の項目は得られなかった）、「心腹」のように〈腹〉以外に関する構成要素を語の内部に含む項目については観察対象としていない。また、先述の通り、そもそも後藤 (2019) の調査はあくまで辞書項目に依拠したものであるため、〈腹〉の意味拡張の全体像を捉える資料としては不確実である。事実、長谷川ほか (2005) は、江戸中期～後期の浄瑠璃、歌舞伎、草双子から収集した「腹」表現を豊富に紹介しているが、以下に例をあげるように、その中には『日国』に記載のない表現もみられる。[4] このことは、中世以前の〈腹〉表現についても、辞書情報に限らず実例を幅広く観察していく必要があることを示唆しているであろう。

(1) 【怒り】ごうせいばら／ごせ腹・ごせっ腹　【感情制御】はらをねかせて　【可笑しさ】はらをだく　【納得】はらががてんしない　（［長谷川ほか 2005］より抜粋）

以上より、本研究では〈腹〉表現が成熟を迎える近世前の時代に焦点を当て、後藤 (2019) で指摘した中世までの〈腹〉表現の特徴について再検討する。具体的なリサーチクエスチョンは次の 2 点である。

- 〈腹〉に関して漢語表現を観察対象に含めた場合、和語中心の意味拡張と同様の傾向が見られるか。もし異なる場合、それはどのような特徴であるか。
- 後藤 (2019) において、『日国』の調査に基づき明らかにした〈腹〉の意味拡張の傾向は、、中世以前の〈腹〉表現の用例を広く観察した場合に適切な説明として維持されるか。

3　調査方法：本研究で使用するデータベース、出典について

初めに、本研究で使用した Web 上のデータベースをまとめておく。用例を引用したデータベースについては略称を設け、括弧内で示した。

表 2. 使用データベース

データベース名	説明・備考
JapanKnowledge Lib	『岩波　世界人名大辞典』『日本国語大辞典　第二版』『例文　仏教語大辞典』の調査・引用に使用。
「古記録フルテキストデータベース」（「古記録デ」）東京大学史料編纂所	『大日本古記録』（東京大学史料編纂所）を対象とした古記録のデータベース（ただし、『大日本古記録』以外の古記録・日記類や歴史書・年代記もまとめて処理可能とのこと）。中古～中世の公家日記、武士日記。
「古文書フルテキストデータベース」（「古文書デ」）東京大学史料編纂所	『大日本古文書　家わけ文書』（東京大学史料編纂所）をはじめとする古代～近代（中世中心）の古文書のデータベース。
「奈良時代古文書フルテキストデータベース」東京大学史料編纂所	『大日本古文書』編年文書（東京大学史料編纂所）を対象とした奈良時代 (702-780) の古文書データベース。
「漢籍電子文献資料庫」（「漢資料庫」）台湾中央研究院	史部を中心に四部（経史子集）を幅広く含んだ漢籍データベース。2021 年 3 月時点で 1349 種以上の資料を検索可能。
「日本古典文学大系本文データベース」（「大系デ」）人間文化研究機構国文学研究資料館	『日本古典文学大系』（岩波書店）全 556 作品の本文データベース。文体は様々で（和文・漢文・和漢混淆文）、漢文文書については原文・訓み下し文の両方が検索対象に含まれる。

[3] 厳密には「腹汚い」「腹黒い」は「はら（腹・肚）」の子見出しには含まれていなかったが、筆者の判断で後藤 (2019) の観察対象として含めた。なお、「腹が黒い」も「腹黒い」とは別の項目として子見出しに含まれているが、初出は近代である。

[4] 筆者の勉強不足が祟り、本稿執筆時まで長谷川ほか (2005) の論文の存在を把握していなかった。同論文では「腹」「胸」さらにその他の関連部位についても近世の文学作品から表現を広く収集・分析されており、「身体義」「心理義」「人格義」の区分に基づいて各部位の特徴が論じられている。認知言語学的枠組みを採用した研究ではないものの、身体部位に関する従来の認知的分析に通じるような示唆的説明も含まれているので、参照されたい。

4　『日本国語大辞典 第二版』の表現の再検討

中世以前の〈腹〉表現収集の糸口として、後藤 (2019) で扱われていない『日国』内の〈腹〉表現を抽出する。JapanKnowledge Lib の検索ツールを用いて、『日国』内の「腹」という字を含む項目を全て抽出すると、単語類、慣用句・ことわざ類を合わせて 904 件が該当する（字音音素の「ふく」1 件を除く）。このうち、(2) に示す条件を満たすものは (3)(4) の 40 項目である。[5]

(2)　① 「はら（腹／肚）」の子見出しに含まれていない（後藤 (2019) で扱われていない）。
　　② 精神作用に関する語釈がある。
　　③ ②の語釈に対する中世以前の用例が記載されている。

(3)　**中古 (794-1191)…14 項目**
いい - はらだ・つ［いひ‥］（言腹立）／うち - はらだ・つ（打腹立）／おおやけ - ばら［おほやけ‥］（公腹）／おおやけ - はらだたし［おほやけ‥］（公腹立）／おおやけ - はらた・つ［おほやけ‥］（公腹立）／たち - ばら（立腹）／ないばら - を - た・つ（無腹立）／なま - はらだ・つ（生腹立）／はらだたし・い（腹立）／はらだたし - げ（腹立―）／はらたち - な・す（腹立為）／はら - だ・つ（腹立）／はら - た・てる（腹立）／ふく - りゅう［‥リフ］（腹立）
中世 (1192-1602)…11 項目
けら 腹（はら）＝立（た）つれば［＝立（た）てば］鶫（つぐみ・つむぎ）喜（よろこ）ぶ／そらばら を 立（た）つ／たて - はら（立腹）／なま - はらだたし（生腹立）／ねはら を 立（た）つ／はら - こぎ（腹―）／はら - だち（腹立）／はら - たて（腹立）／まけばら を＝立（た）てる［＝立（た）つ］／むか - ばら（向腹）／りっ - ぷく（立腹）

(4)　**上代 (-793)…2 項目**
【本心】しん - ぷく（心腹）／ふく - しん（腹心）
中古 (794-1191)…4 項目
【不満】いわ＝ぬは［＝ねば］腹（はら）ふくる／おぼしき 事（こと）言（い）わねば腹（はら）ふくる　【性向】はら - ぐろ（腹黒）　【可笑しさ】せっ - ぷく（切腹）
中世 (1192-1602)…9 項目
【本心】こころ を 人（ひと）の腹（はら）に置（お）く[6]／ふく - ぞう［‥ザウ］（腹蔵・覆蔵）／ふくぞう 無（な）い　【本心・度量】ふく - ちゅう（腹中）【憂い・悩み】ふくしん＝の 病（やまい）［＝の患（わずら）い・＝にある病（やまい）］[7]【性向】なま - はらぎたな・し（生腹汚）／こうし の 腹黒（はらぐろ）　【可笑しさ】はらすじ 痛（いた）し／ほう - ふく（捧腹・抱（ハウ）腹）

(3) にまとめた通り、40 項目中 25 項目が【怒り】に関する表現であり、「腹を立つ」の派生形をはじめとして多様な表現が見られる。(4) ではその他の精神作用に関する表現 15 項目をまとめている。怒り表現と同様に、後藤 (2019) で扱った表現と関連するものが含まれる一方で（e.g.「言わぬは腹ふくる」←「腹が脹れる」、「切腹」←「腹を切る」、「生腹汚し」←「腹汚し」）、漢語あるいは漢語の訓み下しに基づいた表現も存在する。なお、このほかに「傍痛い」の同音として「片腹」が意識されて成立した「片腹痛（かたはらいたい）」にも中古の用例が見られるが、成立の動機が異なるため、上のリストには含めていない。

さて、(4) で注目すべきは漢語の存在である。第一に、本心あるいは真心としての心のうちを表す熟字「心腹」「腹心」が既に上代から使用されている。後藤 (2019) の調査では、「腹の内（はらのうち）」「腹の中（はらのなか）」などの【本心】（もとは【考え・意図】としていたが、本稿では【本心】として改める）に関する表現は、「はら」「おなか」「ほて」をたどる限り、近世以降の初出であるとの報告を行ったが、

---

[5] このほかに、後藤 (2019) でキーワードとしたものも一通り検索したが、(2) の条件を満たす追加表現が得られたものは「腹」のみであった。また、(3)(4) の表記は全て JapanKnowledge Lib 上の方式に従った。

[6]『後漢書』光武帝紀・上の「蕭王推赤心置人腹中」に基づく。「蕭王」の後は「赤心（せきしん）を推（お）して人（ひと）の腹中（ふくちゅう）に置（お）く」と訓む。『日国』によると、もとは「心から人を信じ、一点の疑心もいだかない」ことを表すが、そこから「人の心底を探り出そうとする。腹を探る」という意味へ転じた。

[7]『日国』によれば、この表現（漢語では「腹心之疾」）は本来腹や心にある重い病を指す。このような身体的な患いが、救いがたい憂い・深刻な悩みといった心理的な患いの意に転じたと考えられ、〈腹〉に精神があるという理解様式から生まれたものとは言い難いものの、今回項目として含めた。

それよりもはるかに時代を遡っている。『大漢和辞典　修訂版』をみると、「心腹」「腹心」は身体的な意味（胸と腹）、精神的な意味（まごころ）、さらには心から親しくする・頼みにする人物という語釈と用例が載せられている。岩下 (2003) によれば、「腹心」という熟字は『世説新語』を通じて日本へ入ったのだという。また、「心腹」については『漢書』（趙広漢伝）の「吏見者皆輸写心腹、無所隠匿」が有名であり、現代でも「心のうちを全て打ち明ける」ことを表す「輸写心腹」という四文字熟語として残っている。

『日国』では、「腹の内」に対応する「腹内（ふくない）」の精神的な意味での用例を挙げていないものの、「腹の中」に対応する「腹中（ふくちゅう）」に関しては、中世での初出例として (5) を採用している。ただし、ここでの「腹中」は【本心】ではないことに注意されたい。

(5)　きゃつが腹中は廣そうな。まだ問おう。　（大系デ／大名狂言　今参）[8]
［秀句好きの大名のもとに来た今参り（新しい使用人）が、繰り返しの大名の問いに秀句で巧みに応答する。それに感服した大名の台詞］

(5) の例は、『日国』に限らず「腹中」の用例として方々で引かれ、一般に【度量】という解釈が与えられているが、文脈的には次々と秀句を述べる今参の文学的才識の豊かさを指しているとも考えられよう。[9] この件について直接論じた研究は筆者の知り得る限りでは存在しないが、下房 (1987) では「懐狭し（ふところせばし）」について「他の文献では管見に入らないが、思慮が浅く、才知に欠けることを言うのであろう。」(p. 81) と述べた上で、対義表現として上の「腹中広し」の例を挙げている。なお、この「腹中広し」という表現の用例は似た文脈を持つ狂言の別作品でも見つかる。[10]

(6)　さて、汝が腹中は廣そうな。また某も、いかほど言うても盡くることではない。
（大系デ／大名狂言　富士松）
［太郎冠者（使用人）が旅先で得てきた富士松をめぐって主人と連歌の付合を行うことになったが、太郎冠者はどんな句にも見事に付句する。最終的に富士松を諦めた場面での主人の台詞］

いずれにせよ、〈腹〉の規模は、【度量】の象徴として近世以降の「大腹中（だいふくちゅう）」「小腹中（しょうふくちゅう）」という表現や、「腹が小さい」「腹が太い」といった「はら」表現の中で言及されることとなる。上記の「腹中広し」をそれらと並行的に捉えて【度量】として解釈するのであれば、中世での先行例として位置付けられるだろう。

「腹の中」のように、【本心】としての「腹中」の用例は中世では見られないのであろうか。『日国』からは中世の用例を得られないが、「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」での「腹中」の文字列検索の限りでは、執筆年月日が判明している資料のうち、最も古いもので 1557 年の用例が見つかる。[11]

(7)　連々申度、今度之次に申にて候申にて候、是より外に、我々腹中、何にても候へ、候はす候、たゝ是まて候是まて候　（古文書デ／毛利 405 弘治三年十一月廿五日）

---

[8]『日本古典文学大系』では旧字体漢字が使用されている。本稿でも、変換不可能な場合を除き引用の際は新字体に改めることはしない。また、(5) について『日本古典文学大系』（小山, 1960）では江戸中期の大蔵虎寛本を経て来た大蔵流山本東の書写本（幕末〜近代初期書写といわれる）を採用したとあるが、『日国』の同じ用例の出典は近世初期に書写されたといわれる大蔵虎明本である。

[9] 関係するかどうかは定かではないが、歌の心を心の中でじっくり味わうことを「腹に味わう」と述べた以下の例もある。〈腹〉は文学的感性を司る部位としての認識があったのかもしれない。
(1) この歌はあるが中におもしろければ、心とゞめてよまず、腹にあぢはひて　（大系デ／伊勢物語　四四）

[10] こちらも山本東本を底本とする『日本古典文学大系』からの引用であるが、(5) の場合とは異なり、大蔵虎明本の同曲（大塚, 2006）を確認すると同じ台詞はない。さらに、大蔵虎寛本の同曲（笹野, 1942）でもこれに相当するような台詞は確認されなかった。

[11] 古文書・古記録の用例では、資料群名・文書番号（ある場合）・和暦年月日をデータベースの情報をもとに順に示す。(7) と同じ用例は『時代別国語大辞典　室町時代編』の「腹中」の見出しでも挙げられている。また、同書では、これよりもさらに遡る『応永二十七年本論語抄』（1420 年書写）からの用例が挙げられているが、少し【本心】の意味からは離れる。
(2)　我徳ハヒキウシテ腹中ガミユルホドニ、一分ノ徳ガアラハルルヲミテ、我ヲ孔子ニマサレリト云

［毛利元就が 3 人の子ども（隆元、隆景、元春）に当てた書状。家を保つことの重要性と心得を十四箇条に渡って述べるうちの最終条。］

最後に、扱いが最も難しいのが「心のうちにひめ隠す」ことを表す「腹蔵（ふくぞう）」である。『日国』では、「ふく」に「腹」と「覆」の 2 種類の字を充てており、筆者の菅見では、その他一部の辞書でも同様の扱いをしている（『大辞林　第四版』『広辞苑　第六版』）。「覆蔵（ふくぞう）」（あるいは「ふぞう」とも）はもとは仏教用語でもあり、『例文　仏教語大辞典』では、「1 覆いかくすこと。2 自分の罪を隠すこと。3.《梵 parivāsa の訳。波利婆沙と音写》僧残罪を犯しながら、隠蔽し否認したとき、その隠していた日数に応じて、他の僧と別居させられ、会話など一切禁じられるもの。」とある。『日国』での「ふくぞう」の精神に関する語釈、すなわち「心の内にひめ隠すこと。心に思っていることをつつみ隠して外に現わさないこと。」の初出は「覆蔵」の用例であり、道元 (1200-1253) の『正法眼蔵』から引かれている。[12]

(8)　脱體の行履、その正當覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す。（大系デ／正法眼蔵　仏性）
訳：「煩悩を脱しようとする身が、まさにその煩悩を隠しこむとき、己にも隠しこみ、他人にも隠しこむのである。」（石井 2013, 87）

一方の「腹蔵」は、『日国』での「ふくぞう」の語釈の一つ目「胎内。腹部」として鎌倉時代の寺誌から用例が挙げられており ((9))、「腹蔵」の字の精神的意味での使用の初出は、子見出しの「ふくぞう無し」にて中世末（1585 年）の武士日記から引かれている ((10))。さらに、「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」を調べると、(10) の用例から半世紀弱遡った (11) の用例も見つかる。

(9)　奉納舎利二粒於大仏御腹蔵　（東大寺続要録　供養篇本）
(10)　被失面目候てか可然候すらんと存候歟、無腹蔵申上候
（古記録デ／上井覚兼日記　天正一三年八月九日）
(11)　少事モ不審、互ニ無腹蔵可申顕候　（古文書デ／相良 333 天文八年十月廿六日）
［薩州家（島津氏の分家）が天草氏との抗争を解消、和解した際に残した起請文。相良家が仲介役。］

ここで問題となるのは、精神的な意味での「腹蔵」について、漢籍中の用例を十分に認めることができないという点である。『大漢和辞典　修訂版』では、「覆」「腹」の親字ごとに「覆蔵」「腹蔵」の熟語を載せているが、用例が挙げられているのは「覆蔵」のみであり（『角川大字源』『大漢語林』も同様）、「腹蔵」については「→覆蔵に同じ」とのみある。そこで、漢籍のデータベースである「漢籍電子文献資料庫」を用いて「腹蔵」の文字列を検索したところ、44 件の結果を得られたが（「覆蔵」は 3244 件）、用例を確認する限り、精神的な意味での用例として解釈されうるのは (12) の 1 件のみであった。[13]

---

[12] この引用部については、訳書・注釈書の間で解釈にかなりの幅が見られることを断っておかなければならない。石井 (2013) の訳では「煩悩を隠しこむ」とあり、一見『日国』の語釈に当てはまりそうだが、この直前をみると、「この故犯すなはち脱體の行履を覆藏せるならん」（このあえて犯すことが、そのままで、身体を脱落した行住坐臥を覆み蔵めているはずなのです［矢島 2009: 20］）とある。従って、ここで覆蔵されるのは「脱体（完全な解脱）の行履（行住坐臥）」であり、まさにその状態の時に「自分」にも「他人」にも覆み蔵められた状態（自他を超越した状態）であると述べられているのであって、自己が意図的に何かを隠蔽する・しないという意味で「覆蔵」を用いているとは言い難い。西尾ほか (1965) の注釈では、この箇所について、「この脱体の行履は、自己の内容であり、また他人の内容でもある。」 (p. 141) という訳を与えている。いずれにせよ、(10)(11) でみるような単なる【本心】としての解釈は通じない。

[13] 筆者の勉強不足により、(12) については確証的な意味の把握に至っていないものの、現段階での解釈を述べておきたい。出典の「性法自然論」（6C、朱世卿）は仏教の因果応報説に対し、物事にはすべて自ずと定まった本性があることを主張した文書である（『岩波　世界人名大辞典』）。引用部は、「至有腹藏孟門之險」と「心庫豺虺之毒」に分節されるであろう。前半の「腹蔵」の後に続く「孟門」は中国河南省の山道のことかと考えられるが、前野 (2000) によれば、この「孟門」は古くから隘路として有名だったようである。唐代の詩人崔顥の作品に「孟門行」という詩があるが、前野 (2000: 175) には、「詩の内容は、孟門という地名と直接の関係はない。ただ世の人情のけわしいこと、世わたりのむつかしいことを歎いているので、それを孟門の難路になぞらえる心を含めたのであろう」とある。このように、「孟門」という地名を用いた喩えが別にもあることを考慮するに、(12) の「孟門之險」では、その隘路から連想される心情あるいは性向などの精神的な事柄が述べられており、それが腹（心中）にあると解釈することができる。後半部の「心庫豺虺之毒」で山犬やマムシの毒が心にあると述べられているが、こちらも前半分と並行して考えれば、「毒」は邪な精神を指しているに違いない。

(12)　至有腹藏孟門之險心庫豺虺之毒　（漢資料庫／大正新脩大藏經　第五十二冊　史傳部四　二一〇三　廣弘明集三十卷　卷二十二　法義篇第四之五　齊沈約立佛法義論五首　陳沙門真觀因緣無性論并朱世卿自然論　朱世卿性法自然論）

(12) のような用例が存在することは確かであるが、「覆蔵」と比較しても漢籍での「腹蔵」の用例数は圧倒的に少ない。従って、日本での「腹蔵」の精神的な文脈での使用が漢籍からの借用によるとは直ちに結論づけ難いだろう。また、『日国』によると「ふくぞう」は『日葡辞書』(1603-4)、『文明峰節用集』(室町中)、「ふくぞう無し」は『和漢音釈書言字考合類大節用集』(1717)、『和英語林集成（再販）』(1872)、『言海』(1889) に記載があるが、葡語で書かれた『日葡辞書』を除き、いずれも「覆蔵」「無覆蔵」の表記となっており、「覆」の使用が規範であったことがわかる。以上を考慮するに、元々「心のうちに秘め隠す」という意味で使われていたのはやはり「覆蔵」の方であり、「胎内、腹部」を指して用いられていた「腹蔵」が「覆蔵」の異体として流用されるに至ったという仮説を導くことができる。その最大の要因は両者の音の一致であろうが、同時に、精神の在り処としての〈腹〉の理解が動機として働いたことが想定される。もしこれが正しければ、「腹蔵」は近世以降に多く追加された「腹の内」「腹に一物」「腹を探る」などの容器メタファー表現の先駆けとなる表現として位置づけられる。[14]

もっとも、「覆蔵」は本来動詞的に（行為を表す語として）使用されるはずの熟字であり、一方の「腹蔵」は、元々「腹の中」を指す名詞的熟字（事物を指示する語）として使用されていた様子がうかがえる。このように、両者の間には本来品詞的なずれもあったようで、「覆蔵」の異体字として「腹蔵」が用いられるようになるには、この隔たりが埋められる過程が存在したと考えられる。現段階では、以下 2 つの可能性を想定している。一つは、「無覆蔵」(「ふくぞう無し」) のように、「覆蔵」が「隠すこと」のみならず「隠されたもの」としても解釈可能な文脈で使用される段階を経ることで、「腹蔵」に置き換わった可能性、もう一つは、「腹蔵」の「蔵」が「隠す・収める」という動詞的意味を表す構成要素として改めて解釈されることで、「覆蔵」に近づいた可能性である。今後、「覆蔵」と「腹蔵」の関係性を精査するに当たっては、これらが文中でどのような要素として生起していたかについて注目していきたい。

5　「日本古典文学大系本文データベース」に基づく〈腹〉表現の調査

5.1　課題提起、調査方法

前節では、後藤 (2019) での観察から漏れていた『日国』内の表現を手がかりに、中世以前の〈腹〉表現を漢語を中心に検討した。特に【本心】の在り処としての〈腹〉表現は、漢語の用例を含めた場合に時代を遡ることができることを見た。ここで 2 つの疑問が残る。第一に、前節で取り上げた漢語表現は（変体）漢文中の用例が中心であったが、中古末期から現れ始める和漢混淆文、あるいはそれ以前の一部の和文資料の中では、これらの漢語表現はどの程度使用されていたのだろうか。また、漢語の使用に関わらず、現代の辞書からは得られない〈腹〉表現はどの程度存在するのかということである。特に第一の問いは、〈腹〉の比喩表現の歴史的な意味展開を記述する際の漢語の扱いを考える上で重要となる。

以上の問いをもとに、本節では「日本古典文学大系本文データベース」の中世以前の〈腹〉表現の用例を収集・観察することで、〈腹〉表現の使用状況を全体的に再検討する。今回の調査では、「腹」に加え、「はら」と訓む（訓まれていた）その他の字「肚」「胎」「胞」を『日国』から抜粋し、調査対象とした。[15] 当然のことながら、これらはそれぞれ「はら」とは別の音訓を併せ持つが、【表 3】では全ての検索結果を

「腹蔵」の用例 44 件の確認にあたり、陳栩氏のご協力を得た。また (12) については、陳栩氏に加え、渡辺秀樹先生を通じて王周明先生から解釈の手がかりをご教授いただいた。

ちなみに、「漢籍電子文献資料庫」での「蔵腹」の文字列検索結果は 6 件である。(12) と同様に精神的な意味に関するものと見込まれる表現も確認しているが、確証的な解釈に至っていないため、稿を改めて報告したい。

[14] この辺りの議論の組み立て方は、渡辺秀樹先生からいただいたご助言に基づいている。

[15] 和語と漢語の対応が安定していなかった時期のものを合わせると、『日国』では「腹」以外に次の 12 種の「はら」の表記が報告されている。今回、筆者の判断で主要と考えられる「肚」「胎」「胞」を抜粋したことをご了承いただきたい。

【畏・威・渕・隈】色葉・名義　【肚・腸】名義・和玉　【肱・陰】色葉　【胞・腸】名義　【臉・腟】和玉

なお、〈腹〉表現としてどこまでを一括して論じるかについてはいまだに解決しない問題である。最終的に「腸（はらわた）」「肝（きも）」などの内臓を指す語も並行して調査することで、〈腹〉の一部として総合的に議論していく必要があることは確かである。今後の課題としたい。

記載している。これらの漢字については、精神的な意味での用例についてのみその読みを確認する方針としたが、結果的に「肚」の 6 件のみが対象となった。また、仮名表記として「はら」「ばら」「ぱら」「ふく」「ぶく」「ぷく」をそれぞれ検索したが、本データベースはアノテーション処理されたものではないため、「はら（原）」「はらう（払う／祓う）」など、その他多くの語が紛れ込んでいる。「腹」として使用されているかどうかは手作業で確認した。このほかに、後藤 (2019) で扱った「おなか」「ほて」「ぽんぽん」「肝の束」についても一通り調査を終えているが、本稿では【表 3】の文字（列）の調査結果のみを報告する。

結果報告に移る前に、その他の細かな留意点を挙げておく。第一に、本データベースの検索は本文の行単位による結果となるようである。従って、ごく稀に同一行に当該文字列が複数生起している場合があるが、それは 1 件として処理される。反対に文字列が 2 行にまたがる場合、例えば「は《改行》ら」は、2 件としてカウントされる。また、検索結果の本文は KWIC（Key Word In Context）形式で表示されるが、得られる文脈は原則 20 文字であることがわかった。それゆえ、本文元の『日本古典文学大系』にて、稀に同一行の離れた位置に同じ検索文字列が生起している事例については、検索結果から漏れてしまう場合があるようである。従って、【表 3】の「検索結果件数」は参考値として考えていただきたい。今回、本文の確認中で気づいたものについては、追加データとして補った。

表 3.「日本古典文学大系本文データベース」中の〈腹〉表現

検索文字（列）	検索結果件数	精神的意味の用例数（中世まで）	備考
腹	3098	488	一部「おなか」（お腹）を含む。「はらわた」（腹のわた、腹腸、腹わた、腹綿）5 件は除外。
肚	18	6	精神的意味での用例のうち、「はら」と読むものは中世以前はなく、「むらとのうち」（肚裏）、「たいと」（大肚）のみ。
胎	253	0	おもに出産に関する文脈あるいは「胎蔵界」等仏教用語での生起。
胞	158	0	「同胞（はらから／どうほう）」類の表現が大半を占める。
はら	3651	42	「はらはた（はらわた）」1 件は除外。
ばら	1271	1	
ぱら	70	0	「ほてっぱら」などの表現は近世以降。
ふく	865	0	
ぶく	176	0	
ぷく	30	0	
合計	9590	537	

5. 2　調査結果

5.2.1　全体の概要

調査結果の時代ごとの内訳を【表 4】に示す。各時代の収録作品数こそ異なるものの、上代での用例が最も少なく、時代を下るにつれて増加している。ここからは、上代〜中世の調査結果について、後藤 (2019) での『日国』の調査結果を適宜参照しつつ観察していく。

表 4.「日本古典文学大系本文データベース」中の精神作用を表す〈腹〉表現内訳
***( ) 内の件数は漢文の原文・訓み下しの重複を除いたもの**

検索文字（列）	上代	中古	中世	合計
腹	10 (6)	182 (177)	296	488 (479)
肚	0	6 (3)	0	6 (3)
はら	1	21	20	42
ばら	0	1	0	1
合計	11 (7)	210 (202)	316	537 (525)

〔【表 4】の集計に含めていないが、特筆すべきその他の表現〕

- 「鼓腹撃壌」に由来すると考えられるしぐさ表現：「腹を鼓つ」「腹壌を撃つ」等
  平和・安定を象徴するしぐさの表現として用いられる。ちなみに、近世以降は個人的な満足感を表す意味に拡張したと考えられる用例が見つかる。
- 「片腹（痛し）」
  仮名表記「かたはら」が、「傍」「片腹」いずれの意味であるかが特定し難いため、一律で除外した。ただし、『日国』によれば、笑いの意味での「片腹痛し」は笑うと脇腹が痛くなることから生じたという語源説（『和訓栞』）もあり、必ずしも全てが「傍痛し」からの派生ではないようである。この場合、「片腹」が用いられるようになった動機は、「腹が痛い」「腹が捩れる」などの表現と同じ笑いに伴う身体感覚である。

5.2.2 上代 (-793)

上代の用例は 11 件中 8 件が漢文であり、和語の用例は周知の『古事記』歌謡「大猪子が原　大猪子が　腹（波良）にある　肝向ふ　心をだにか　相思はずあらむ」（『古事記』巻と『古事記歌謡』巻に重複収録のため、2 件として計算）と、『逸文』のいわゆる因幡の白兎伝説にある (13) のみである。[16] ただし、(13) は『塵袋』（鎌倉中期）で引かれたものであるため、内容的に『風土記』逸文の一つであるとしても言語的には上代とは無関係である。

(13) 實ニハ親族ノオホキヲミルニハアラズ」トアザケルニ、ミギハニソヘルワニ、ハラダチテ、ウサギヲトラヘテ、キモノヲハギツ。　（大系デ／風土記逸文　因幡国）

一方の漢語については、第 4 節で扱った「心腹」「腹心」に加えて、以下の用例のみであった。

(14) 犢鼻標竿日。隆腹晒*書秋（犢鼻を竿に標ぐる日、隆が腹に書を晒す秋）（*「晒」は「日＋麗」）
（大系デ／懐風藻　大宰大貳正四位下紀朝臣男人〔紀男人〕）

(15) 一本云、星川王、腹悪心麁、天下著聞。不幸朕崩之後、當害皇太子。
（一本に云はく、星川王、腹悪しく心麁きこと、天下に著れ聞えたり。不幸して朕が崩なむ後に、當に皇太子を害らむ。）　（大系デ／日本書紀　雄略天皇二三年八月）
［雄略天皇が星川王子の危険性について説いた遺詔］

(14) は、『世説新語』の「排調」にある故事（晋国の郝隆が腹の中にある書物をさらすと言って、腹を日に干したという話）を引いたものである（小島, 1964）。一方、(15) の「腹悪」については、中古から和文中で用いられ始める「腹悪（はらあ）し」と形式こそ対応するが、後者が当初怒りっぽさ・短気を表す表現として使用されるのに対し、こちらは邪険であることを表しているだろう。筆者の調査の限りでは、「腹悪」という熟字は『大漢和辞典　修訂版』では見つからず、「漢籍電子文献資料庫」の文字列検索でも得られなかった。もし「腹悪」が借用によるものでないとしたら、道徳的な性向を表す「腹黒い」「腹汚い」が中古から現れるのを鑑みるに、〈腹〉に人格的特徴を投影する理解様式の貴重な事例とみなすことができよう。

---

[16]『日本書記』の以下の歌にある「腹内」（「波邏濃知（はらぬち）」）は、「腹の内」の変化形と言われている。これは、反乱を起こした忍熊王陣営の一人が、敵対する神功皇后勢の武内宿禰と建振熊を迎え討つ際に敵の武内宿禰（内の朝臣）に言及して読んだ歌である。一般に、「敵の腹の中に小石（いさご）が詰まっているはずはない」と直接的に訳される当該箇所は、「矢を遮るような砂は詰まっていない」と解釈されているが、この解釈に対して懐疑的な立場をとる研究も存在する。例えば、山路 (1962) は「虚心にこの句を解すれば、〈腹の中には交りものがない〉ということであろう」(p. 11)「（…）六朝にわたり棟梁の臣としてお仕え申した武内宿禰の忠誠心を具体的にあらわした表現とみるのが妥当なとこらしい。」(p. 12) と述べている。もし後者の解釈が通るのであれば、この例は和語による〈腹〉表現の精神的な意味での最古の用例の一つとみなされるだろう。

(3) 彼方の　あらら松原　松原に　渡り行きて　槻弓に　まり矢を副へ　貴人は　貴人どちや　親友はも　親友どち
いざ鬪はな我は　たまきはる　内の朝臣が　腹内は　小石あれや　いざ鬪はな　我は
（大系デ／日本書紀　神功皇后摂政元年三月・歌謡）

5.2.3　中古 (794-1191)

中古になると、和文中での〈腹〉表現が加わることで用例が急激に増加している。ただし、表現形式は比較的固定されており、後藤 (2019) や (3)(4) の表現リストに既に含まれているものが大半を占める。また、第 4 節で見た漢語表現「心腹」「腹心」はいずれも漢文中での使用にとどまっており、和漢混淆文（『今昔物語集』）でも確認されなかった。総じて、中古の資料については漢文中の〈腹〉表現と和文・和漢混淆文中の〈腹〉表現との間に互換性を見出し難く、敢えて言えば「腹立」の漢文中での使用が見られた程度であった。[17]

表 5. 精神作用を表す〈腹〉表現内訳〔中古〕
***( ) 内の件数は漢文の原文・訓み下しの重複を除いたもの**

意味分類	腹	はら	ばら	合計	例
怒り（の鎮静）［安定・不安定］	142	18	0	160	腹立つ、腹立たし、立ち腹、無い腹を立つ、腹居る
怒り（の鎮静）［その他］	2	0	1	3	腹（怒りの文脈での省略）、公腹、腹止む
笑い	3	0	0	3	腹を切る、たちやすき腹
性向	22	2	0	24	腹悪し、腹汚し、腹黒し
本心・真心	9 (5)	0	0	9 (5)	腹心[18]、心腹
玩味	1	0	0	1	腹に味わう
不満	0	1	0	1	腹脹る
欲望	2 (1)	0	0	2 (1)	口腹を営む
精神	1	0	0	1	胸なし（「胸なくば」）
合計	182 (177)	21	1	204 (199)	

後藤 (2019) では扱われていない特徴的な用例をいくつか挙げておこう。

(16)　口なくば、いづこよりか魂通はむ。腹、胸なくば、いづくにか心のあらむ。
（大系デ／宇津保物語　俊蔭）
［仲忠は、母を養うためにちょうど良い木の穴を森の中で見つけたが、そこは熊の住処であった。熊に喰われそうになった仲忠が、助けを請う場面］

(17)　入道和ラ出デ、傍ノ房ニ行テ居タリケルヲ、聖人腹止ニケル時ナム、入道返リ行タリケル。此ノ聖人ハ極テ立チ腹ニゾ有ケル。立腹ナル賛ニハ疾ゾ腹止ケル。（大系デ／今昔物語集　一九・一〇）
［蔵人政宗が妻の死を受けて出家した。ある日政宗が涙を流しているのを見た師である聖人が、その理由を聞いたが、期待とは異なる回答を得たために怒った。その聖人の怒り・怒りっぽさを描写する場面］

(16) は心の在り処に関する当時の認識を端的に語る重要な例であろう。仲忠は熊に喰われるのを避けようと、身体で不要な部分である耳たぶと鼻先を差し出そうとするのであるが、どうしても残したい身体部位として、魂の通る「口」と心のある「腹」「胸」を挙げている。(17) は「立」つ腹に対して「止（やむ）」を利用した例であり、当時使用されていた「居（ゐ）る」とは異なる【怒り】の鎮静である。「腹が居る」が句全体の字義的イメージを通じて比喩義を得ているのに対し、「腹止」は「腹」を【怒り】と解釈し、その怒りが「止む」と捉えた分析的な表現ではなかろうか。

(18) は腹が「断」たれるという事象を通じて【感動】を表現したものであり、形式上「断腸」との関係性が伺える。堀 (2003)、長沼 (2014) の指摘するように、「断腸」は『世説新語』の故事に由来し、腸が寸断されるほどの深い悲しみを表す表現として知られているが、(18) 冒頭の「断腸」の訓読表現のように、しばしば深い感動とも結び付けられる。その後「たチやすき御腹」と続くのであるが、ここでの「たつ」

[17] 伊原 (1990) によれば、『小右記』長和元年（1012 年）の日記に「腹立」という文字列（「フクリュウ」と読みうる可能性のある例）が初めて現れるという。筆者の方でも「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」の漢文を確認したが、この例が「腹立」の最も古いものであった。
[18]「腹臣」の意の用例を含む。

は元々腸を断つイメージがあり、「腹」と「腸」の隣接性から生じたメトニミーと考えられるだろう。このような「腹」と「腸」の置き換えは別の表現でも確認され、例えば笑い（【可笑しさ】）を表す「腹を切る」の「腹」が「腸」（「腹のわた」）となった「いたく笑て、とゞまらんとすれどもかなはず。腹のわた、きるゝ心ちして、死ぬべくおぼえければ」（大系／宇治拾遺物語　一四）の例が見つかる。[19] ただし、長沼 (2014) は (18) の事例について、『日本古典文学大系』（河野, 1961）を含む多くの書が「断つ」と解釈していることを否定し、「立つ」つまり立腹の意味として捉えるべきだと述べている。この例を、【感動】に関する新たな〈腹〉表現とみなすべきかについては検討を要するだろう。

(18)　腸の〈斷エ〉しかば御聲の限りをこそ聞キ侍リしか。〈文字〉一も覺えぬは。すべて君は凉をぞ惑はし給フ。琴彈き給ヒては、裸鶴脛にて走らせ給ヒて殿上まで笑はせ奉り給フ」大將「たチやすき御腹にこそあれ。今も聞い給はでは、え仕うまつらじや」（大系デ／宇津保物語　蔵開　中）
［親しい仲である凉と仲忠の会話。凉が仲忠の講書の声色に感動したあまり、内容を覚えていないこと、仲忠が琴を弾くにつけては、凉が美しい音色を聞きつけて見苦しい格好のまま駆けつけ、皆の笑いものになったことを述べる。それに対する仲忠の戯れの返答］

漢文についてはそもそもの数が少なく、主に空海 (774-835) の漢詩文集『性霊集』の中の用例である。(19) の例はとりわけ創造的な比喩表現であろう。

(19)　海中之愁。猶委胸臆。徳酒之味未飽心腹（海中の愁猶胸臆に委る。徳酒の味、未だ心腹に飽かず）
（大系デ／性霊集　大使の爲に福州の觀察使に與ふるの書）
［荒波のなか福州に辿り着いた遣唐使一行が、素性の疑いを解くために空海に執筆を依頼した書状。皇帝の徳を酒の味に喩えることで、対応を仰いでいる。］

「肚」の用例も全て『性霊集』からのものであるが、「むらとのうち」（肚裏）が 2 件、「たいと」（大肚）が 1 件であり、「はら」と読んでいるものはなかった（『日本古典文学大系』（渡邊・宮坂, 1965）の訓み下しは原則京都醍醐院所蔵本底本〔13C?〕に従ったとある。ちなみに「むらと」は腎臓の古名でもある）。いずれの用例も創造的で、単純に【表 5】の分類枠には当てはめることが躊躇われるため、 (20)–(22) に示すことでその代わりとする。敢えて分類するのであれば、(20) は後述の「腹黒」のように、邪な気持ちを収める部位としての〈腹〉、(21) は学識を蓄えておく部位としての〈腹〉の特徴が伺えるだろう。(22) は宗教的意味が強く、単に精神作用としての扱いはしかねるが、いずれにせよ物理的な〈腹〉の機能からは逸脱している。

(20)　營營染白黒　讚毀織災殃　肚裏蜂蠆滿　身上虎豹莊（營營として白黒を染む　讚毀して災殃を織る肚（むらと）の裏（うち）に蜂蠆滿てり　身の上に虎豹莊る）（大系デ／性霊集　山に遊むで仙を慕ふ詩）［自然描写を通じて仏教的示唆を試みた詩文。訓み下し二重下線部注釈：「蜂とさそり。心中に悪心を充満するさまを喩えていう」（渡邊・宮坂, 1965: 160）］
(21)　山河氣。五百賢。允武允文得自天。九流三略肚裏呑。（山河の氣、五百の賢、允に武、允に文、得ること天よりす。九流三略は肚（むらと）の裏（うち）に呑めり。）［陸奥守に任ぜられた小野朝臣岑守に贈られた詩。岑守の文武両道を称賛する。訓み下し二重下線部注釈：「「肚の裏に呑めり」は、わがものとしている意。」（渡邊・宮坂, 1965: 167）］
(22)　衆與生所遍之刹。情與非所在之聚。豁大肚而懷含。開鴻藏以亭毒。（衆と生との所遍の刹、情と非との所在の聚、大肚（たいと）を豁（ほがらか）にして懷含し、鴻藏を開いて亭毒せむ。）（大系デ／性霊集　天長皇帝故中務卿親王の爲に田及び道場の支具を捨てて橘寺に入るる願文）［訓み下し二重下線部注釈：「さとりを明らかにして」（渡邊・宮坂, 1965: 291）］

5.2.4　中世 (1192-1602)

中世についても、「腹を立つ」に代表される怒り表現が中心であり、表現パターンとしても『日国』に基づく情報との大きな相違は見られなかった。また、和漢混淆文の増加に伴い、漢語による〈腹〉表現の用例が増加することが予測されたが、今回の調査では特にそのような傾向は見られず、漢文以外の作品中

[19] 長谷川ほか (2005) でも同様の指摘がある。

で得られた漢語表現は第4節で取り上げた「腹中広し」と、「腹心」を用いた「腹心の病」の例であった（「立腹」など和製漢語として知られるものは含めず）。

表 6. 精神作用を表す〈腹〉表現内訳〔中世〕[20]

意味分類	腹	はら	合計	例
怒り（の鎮静）［安定・不安定］	268	15	283	腹を立つ、腹立たし、腹立ち、腹を据えかねる、腹を居かねる
怒り（の鎮静）［その他］	3	1	4	腹に据えかねる、腹こぎ
笑い	1	0	1	腹の皮が切れる
性向	21	4	25	腹悪し、腹汚し、腹黒し、腹中広し
真心・信頼	1	0	1	心を人の腹に置く
不満	1	0	1	おぼしきこと言わぬは腹ふくる
憂い・悩み	1	0	1	腹心の病
合計	296	20	316	

既に後藤 (2019) で指摘した通り、中世では、補助動詞的な「兼ねる」をつけることで、怒りに耐えきれない・怒りがおさまらないことを表す表現（「据えかねる」「居かねる」）が現れる。このうち、「据える」は目的語として「腹」をとる場合が多いが（「腹を据えかねる」）、「腹に」とすることで、〈腹〉に収められた内容物としての怒りの存在を含意する (23) のような用例もみられる。また、(24) は修飾部「一昨日の」が極めて重要な示唆を含んでいるだろう。「腹を据えかねる」は句全体の意味が怒りを表すはずであるが、「一昨日の」が修飾するのはおそらくその構成要素の「腹」であり、ここでの「腹を据えかねる」のゲシュタルト性は薄れている。(17) の「腹止」のように、「腹」が【怒り】として意識された分析的表現の一つとも考えられるだろう。

(23) 朝比奈腹にすえかねて、熊手・薙鎌・金撮棒を、持たする中間のなきままに、閻魔王に閻魔王に、ずっしと持たせて朝比奈は、浄土へとてこそ、急ぎけれ。　（大系デ／鬼山伏狂言　朝比奈）
［飢餓状態の地獄を見かねた閻魔王が、地獄送りにする人間を探しにいくが、運悪く目をつけたのは武勇の朝比奈であった。閻魔王は反対に圧倒されるばかりで、とうとう浄土への道案内をするよう求められる。閻魔王がそれを断った場面］

(24) 大津二郎家に歸りて見ければ、女は一昨日の腹を据へかねて、未だ臥してぞ有（り）ける。
（大系デ／義経記　大津二郎の事）[21]
［夫の大津次郎が宿を貸した山伏が実は義経ではないかと恐れた妻が、協力して捉えてしまおうと夫に告げたところ、余計なことをしないようにと散々痛めつけられた。その後大津次郎が一向を見届けて家に帰った場面。］

性向については、「悪し」（本調査では短気の「腹悪し」も性向に分類した）、「汚し」、「黒し」といった否定的評価を含意する構成要素を持つ表現が使用されるが、徐々に性向を述べる表現から、(25) のようによこしまな考えを一時的に持つことを表す例も出てくる。

(25) 其事はいかゞ候らん、身にをいてはま（ッ）たく御腹ぐろ候はず。起請文をかき進べき
（大系デ／平家物語　一二・土佐房被斬）

[20] 注8でも述べた通り、『日本古典文学大系』の『狂言集』（『狂言集　上』『狂言集　下』）は大蔵流山本東の書写本（幕末〜近代初期書写といわれる）を底本としている。【表6】の316件うち、『狂言集』からの用例は155件（【怒り】に関するもの153件、【性向】に関するもの2件）である。今後、該当箇所を大蔵虎明本などの古い資料と照合していく必要がある。なお、(23) で引いた「腹にすえかね」は、大蔵虎明本の同曲では「はらをすへかね」（大塚, 2006: 468）、大蔵虎寛本では「腹にすゑかね」（笹野, 1943: 397）となっている。

[21] ただし、『日本古典文学大系』（岡見, 1959）では近世初期（元和〜寛永）の刊行といわれる「丹緑絵入の十二行木活字本義経記」（国立国会図書館支部東洋文庫蔵）を底本としたとある。底本の異なる『新編日本古典文学全集』（梶原, 2000）（「田中本義経記」を採用）を見ると「一昨日の」の部分は「未だ」となっている。本調査では、用例の年代への振り分けの際、各作品の底本成立の年代までを考慮していない点が大きな問題であることを述べておかなければならない。

［頼朝に義経の暗殺を依頼された土佐坊昌俊は上京したが、義経のもとへ挨拶へ赴かない。怪しんだ義経から呼びつけられた昌俊が、義経からの質問に対して答える場面。］

長谷川ほか (2005) では、このような「腹黒」の使用は中世の裁判用語としてよく確認されるという指摘がある。「奈良時代古文書フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「古記録フルテキストデータベース」を検索しても、中世の例として「無腹黒由」（古文書デ／石清付 7 271 元仁二年月）「向後更に不忠腹黒野心あるへからす候」（古文書デ／石清菊大 404 応安五年七月五日）などが見つかった。これらは具体的な意図を述べた表現であると考えられ、近世で現れる「腹を探る」などの表現（後藤 (2019) で【考え・意図】、本稿で【本心】と述べてきたもの）に通じるであろう。

6 結論

本稿では、〈腹〉表現が成熟を迎える近世前の時代に焦点を当て、後藤 (2019) で指摘した中世までの〈腹〉表現の特徴について再検討した。後藤 (2019) で扱われていない『日国』の項目を表現収集の糸口とし、実際に各種データベースから用例を収集・観察することで、以下のリサーチクエスチョン (RQ) に取り組んだ。

- 〈腹〉に関して漢語表現を観察対象に含めた場合、和語中心の意味拡張と同様の傾向が見られるか。もし異なる場合、それはどのような特徴であるか。
- 後藤 (2019) において、『日国』の調査に基づき明らかにした〈腹〉の意味拡張の傾向は、中世以前の〈腹〉表現の用例を広く観察した場合に適切な説明として維持されるか。

第 4 節で挙げた漢語表現「心腹」「腹心」「腹中」「腹蔵」はいずれも中世までに現れ、後藤 (2019) で述べた感情・性向中心の中世以前の〈腹〉表現とは異なる意味を実現している。これらは広くいえば、全て【本心】の座としての〈腹〉の理解に通じており、特に後者 2 つについては、近世以降の容器メタファー表現（e.g.「腹の中」「腹に一物」「腹を探る」）に見られるような〈内容物〉－〈本心〉と〈容器〉－〈腹〉の対応関係を前提としている。漢語表現を視野に入れた場合、精神作用の座としての〈腹〉の史的展開は後藤 (2019) で結論づけたものよりも時代を遡ることができるだろう（一つ目の RQ に対する結論）。しかしながら、第 5 節での「日本古典文学大系本文データベース」の調査結果が示すように、これらの漢語表現が中世までに文体関係なく浸透していたわけではない。つまり、これらが近世以降の和語による【本心】表現の代わりを担っていたとまでは直ちに言い切れない。少なくとも中世以前の和文・和漢混淆文において、〈腹〉表現は、【怒り】を中心に独自に発達した和語表現が用いられており、かつ、後藤 (2019) で述べたように近世以降よりも狭い範囲の精神作用を表していたと考えられる。精神作用の座としての〈腹〉の理解を考える上では、漢語の影響を十分に認めつつも、漢語表現と和語表現に一定の線引きをした上で扱うべきであるといえるだろう。その場合に限り、後藤 (2019) での『日国』に基づく結論は、中世以前の〈腹〉表現の特徴を捉える説明として一定の妥当性が保たれる（二つ目の RQ に対する結論）。ただし、第 4 節の「腹蔵」の議論、第 5 節での「腹黒」の用例の観察からわかるように、一部の表現では近世以降に現れる表現と理解様式のレベルで結び付けられる用例がみつかる。このような個別の用例をさらに収集・観察していくことで、理解（概念）レベルでの「精神の座としての〈腹〉」の展開はさらに時代を遡って記述できると考えられる。

今後の課題として、「きも」「はらわた」等の内臓を含めた調査を進めることで、〈腹〉の理解を総合的に考えていく必要がある。五蔵思想によって、内臓に関する漢語の表現形式・意味は複雑かつ精緻であり、その日本語への影響は外の身体部位としての「はら」よりも大きいと考えられる。事実、今回の調査中にも内臓表現の用例が頻繁に確認された。内臓に関する表現の調査結果は別の機会に改めて報告したい。また、第 5 節での調査の方法論的限界として、注 21 でも触れた底本の成立年の問題がある。用例を引く際の諸本の比較を引き続き実施していきたい。

参考文献

道元（著）、石井恭二（訳）(2013).『現代文訳正法眼蔵』. 河出書房新社.

後藤秀貴 (2019).「精神の座としての＜腹＞ー身体部位詞の通時的観察と認知言語学的分析ー」.『言語文化共同研究プロジェクト 2018 レトリックとコミュニケーション』, 23–35. 大阪大学大学院言語文化研究科.

長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克、辻本裕成 (2005).「“虫”の居所ー“腹”と“胸”をめぐってー（上）」.『アカデミア　人文・社会科学編』, 80, 49–102. 南山大学.

堀誠 (2003).「道真断腸詩篇考」.『中国文学研究』, 29, 199–210. 早稲田大学中国文学会.

伊原信一 (1990).「和製漢語「腹立（フクリフ）」の語史ー腹立から立腹へー」.『国語国文学研究』, 26, 1–12. 熊本大学文学部国語国文学会.

岩下隆 (2003).「中国語（漢語）から借用した日本語」.『清泉学院短期大学研究紀要』, 22, 97–113. 清泉学院短期大学.

梶原正昭（校注・訳）(2000).『義経記』（新編日本古典文学全集 62）. 岩波書店.

鎌田正、米山寅太郎 (1992).『大漢語林』. 大修館書店.

小島憲之（校注）(1964).『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』（日本古典文学大系 69）. 岩波書店.

河野多麻（校注）(1961).『宇津保物語　2』（日本古典文学大系 11）. 岩波書店.

小山弘志（校注）(1960).『狂言集　上』（日本古典文学大系 42）. 岩波書店.

小山弘志（校注）(1961).『狂言集　下』（日本古典文学大系 43）. 岩波書店.

前野直彬（注解）(2000).『唐詩選（上）』. 岩波書店.

松村明、三省堂編修所（編）(2019).『大辞林　第四版』. 三省堂.

諸橋轍次 (1984–1986).『大漢和辞典　修訂版』. 大修館書店.

室町時代語辞典編修委員会（編）(2000).『時代別国語大辞典　室町時代編四』. 三省堂.

長沼英二 (2014).「和語成句の和語成句の漢訳表現ー「はらをきる」と「断腸」ー」.『表現研究』, 100, 40–49. 表現学会.

中田祝夫（編）(1976).『応永二十七年本論語抄：東山御文庫蔵称光天皇宸翰』. 勉誠社.

西尾実、鏡島元隆、酒井得元、水野弥穂子（校注）(1965).『正法眼蔵　正法眼蔵随聞記』（日本古典文学大系 81）. 岩波書店.

岡見正雄（校注）(1959).『義経記』（日本古典文学大系 37）. 岩波書店.

大塚光信（編）(2006).『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解　上巻』. 清文堂.

尾崎雄二郎、都留春雄、西岡弘、山田勝美、山田俊雄（編）(1992).『角川大字源』. 角川書店.

笹野堅（校訂）(1942).『大蔵虎寛本能狂言　上』. 岩波書店.

笹野堅（校訂）(1943).『大蔵虎寛本能狂言　中』. 岩波書店.

芹生公男（編）(2015).『現代語古語類語辞典』. 三省堂.

下房俊一 (1987).「注解「七十一番職人歌合」稿（2）」.『島根大学法文学部紀要　文学科編』, 10(1), 65–101. 島根大学法文学部.

新村出（編）(2008).『広辞苑　第六版』. 岩波書店.

矢島忠夫 (2009).「正法眼蔵『仏性』（下）」.『弘前大学教育学部紀要』, 102, 9–23. 弘前大学教育学部.

山路平四郎 (1962).「忍熊王物語の「熊之凝」の歌」.『国文学研究』, 25, 9–16. 早稲田大学国文学会.

渡邊照宏、宮坂宥勝（校注）(1965).『三教指帰　性霊集』（日本古典文学大系 71）. 岩波書店.

データベース

JapanKnowledge Lib (http://japanknowledge.com/)『岩波　世界人名大辞典』『日本国語大辞典　第二版』『例文仏教語大辞典』

人間文化研究機構国文学研究資料館 「日本古典文学大系本文データベース」(http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/)

台湾中央研究院「漢籍電子文献資料庫」(http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm)（2021/3/21 最終アクセス）

東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」(https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/)（2021/3/21 最終アクセス）

アメリカ大統領の就任演説 (1960 年~2021 年) における平行法の分析

博士後期課程 3 年　友繁有輝

はじめに

本稿は、1960 年から 2021 年のアメリカ大統領の就任演説 (1 期目) で、反復の中の平行法 (parallelism) によってどのような事態や大統領の思惑が前景化するのか、またその効果について論じることが目的である。1980 年代頃から始まった認知革命以降、認知言語学の理論が取り入れられ、メタファーを中心に米国大統領のレトリック(Charteris-Black 2004, 2005, 2014; Lakoff 2014) について議論されてきた。だが、伝統的レトリックの分析は少ないのも事実である。それゆえ、本稿では反復を、説得のために用いられる技法 (Charteris-Black, 2014; Lakoff, 2006; 佐藤 et al., 2006; 大山, 1956) として、また言葉の問題だけでなく、イデオロギーを含む重要な「言葉の選択」(Charteris-Black, 2014; Gibbons et al., 2018; Lakoff, 2006) として議論を進める。

手始めとして、平行法の基本的な定義を概観しておこう。Silva Rhetoricae の定義では、"Similarity of structure in a pair or series of related words, phrases, or clauses."と書かれており、下記のように語・句・節に細分化された例が提示されている。

(1) a. parallelism of words:
She tried to make her pastry fluffy, sweet, and delicate.
b. parallelism of phrases:
Singing a song or writing a poem is joyous.
c. parallelism of clauses:
Perch are inexpensive; cod are cheap; trout are abundant; but salmon are best.

(1a) では、N A, A, and A の並列した構成の中に、"fluffy"、"sweet"、"delicate" という形容詞が 3 回連続で使用されており、(1b) では V-ing a N の構成 ("Singing a song"、"writing a poem") が繰り返されている。(1c) においては、N V A の節の構造が 3 回続けて用いられている。(1) の例では、前後の文脈がないため、談話の中でどのように機能しているのかを特定することは困難ではあるが、それぞれの構成が書き手の視座を提供していることは確かだろう。

加えて、佐藤 et al. (2006: 55) は、平行法を「言語表現における同じかたち、もしくはパターンの繰り返し。パターンの基本は構文、すなわち文、節、句におけるかたちだが、これに音声や意味の繰り返しが加味されると、かたちは鮮明なものとなる。」と述べている。反復の構成は例えば、演説の中で繰り返される場合、聞き手は相手の反復する言葉の背後にある意図を汲み取る必要がある。この点について、Gibbons et al. (2018) は "Syntactic parallelisms tend to suggest to readers that there is a relationship between the two parallel structures. In this way, readers are coerced into seeking interpretive associations between elements"と述べている。本稿においてもこの立場をとり、大統領の視点を考察することが目的である。なお、本稿ではスピーチライターの言葉は大統領の言葉と同一視することは断っておかなくてはならない。

このような観点から、1960 年代から 2000 年代の 1 期目の就任演説を順に分析する。第 1 節では、主な研究手法と AntConc のデータを概観し、大統領に特有のコロケーションを観察する。第 2 節では、第 1 節の議論を土台として、演説全体のテーマと一貫性があるメタファーやその他の関連するレトリックも必要に応じて触れながら、大統領の平行法を考察する。大統領のレトリックは国民を「統一」するために使用されることは言うまでもないが、その概念を伝達する仕方や思考のプロセスは大統領によって異なる。その根本的な原因として、社会的背景が異なることが挙げられるため、レトリックと効果、社会的背景の 3 つの視点を並行して参照できるように付録に表を作成している。

1　研究手法とデータ

研究手法として、全 12 件の演説 (21359 語) を AntConc の n-gram 検索によって頻度の高い語やコロケーションを量的に観察した。その理由として、大統領の就任演説として使用されている反復のレトリックを分析する際に、語の組み合わせが大統領に特有のものかを見極める必要があるからである。繰り返し使われているフレーズであったとしても、慣習的に使われているコロケーションの可能性は大いにある。それゆえ、使用されているコロケーションの特徴を掴み、その上で個別の演説の平行法を分析する手順をとった。具体的には、1) AntConc にて、頻度の高い語 (上位 50 語) を検索し、名詞、動詞、助動詞の中で頻度の高いものを特定。(これにより大統領に共通する語を認定することができる)　2) ２語以上のコロケーション (上位 10 語) の中で、反復されている語を特定し、どの大統領によって使用されているのかを調べた。(これにより大統領の個別の表現を特定することができる)

表 1　上位 50 語で頻度の高い名詞・動詞・助動詞

名詞	1. America (上位 28 語) 2. nation (上位 30 語) 3. people (上位 34 位)
動詞	1. is (上位 10 語) 2. are (上位 16 語) 3. be (上位 18 語) 4. have (上位 21 語) 5. has (上位 37 語) 6. do (上位 36 語)
助動詞	1. will (上位 12 語) 2. can (上位 27 語) 3. must (上位 38 語)

一番多く使用されているのは定冠詞の “the” (上位 1 語) である。名詞は、“America” (上位 28 語)、“nation” (上位 30 語)、“people” (上位 34 語)、のように、アメリカ国民や政府、世界を意識した語が利用されている。頻度の高い動詞は 順に “is” (上位 10 語)、“are” (上位 16 語)、“be” (上位 18 語)、“have” (上位 21 語)、“has” (上位 37 語)、“do” (上位 36 語) であり、助動詞の使用も上位 50 語に含まれ、“will” (上位 12 語)、 “can” (上位 27 語)、 “must” (上位 38 語)、が用いられている。ちなみに助動詞は「助動詞＋be 動詞」の組み合わせで使用されることが最も多い。大統領の演説はオーディエンスを説得することが主な目的 (Cavari, 2017)であることを勘案すると、話者の確信度が低い “may be” (n[1]=5) や “could be” (n=1) の頻度が比較的少ない事実にもうなずける。断定的な “is” (n=12) や “are” (n=12) が用いられることや、助動詞の “will” (n=12) や “must” (n=12) が他の助動詞と比較して多く使用されることも自然であろう。2 語のコロケーション (“of the”、“we will”、“of our”、“in the”、“and the”、“the world”、“ to the”、“we are”、“we have”、“we are”) においては、上位 10 語の表現は平均すると 9 人に用いられている。

ところが、3 語以上になると全員に共通するコロケーションはもはや存在しなくなる。3 語のコロケーションで最も共通する表現は、 “of the world”、“or our nation”、“the American people” であり、多くとも約 64% (n=7) の使用である。頻度は全体で 8 回しか観察されない “the American people” は約 64%の大統領が使っているが、一人が使う頻度は “of the world” や “of our nation” と比較すると低いことから、慣例的な使用であることを示唆している。換言すると、あるコロケーションの頻度が高いからといって必ずしも多くの大統領が共通して使用しているとは限らない、ということである。

加えて、一人の大統領がある表現を一人で反復する用法は 3 語のコロケーションまでは多くはないが、4 語以上になるとその使用率が目立ち始める。例えば、4 語のコロケーション “we will make

[1] n は大統領の使用人数を指している。

America” (ドナルド・トランプ (計 5 回))、“America at its best” (ジョージ・W・ブッシュ (計 4 回))、“because of what we” (リンドン・ジョンソン (計 4 回))、 “my whole soul is” (ジョー・バイデン (計 3 回) の 4 人の使用が挙げられる。これらの語の組み合わせは、それぞれの大統領の固有の表現であり、文体的特徴が表出していると予測することは妥当だろう。

興味深いことに、5 語、6 語とコロケーションが増えることで、一人の大統領がある表現を何度も繰り返す割合が増えていく。5 語のコロケーションでは、 “we will bring back our” (トランプ (計 4 回))、“a new breeze is blowing” 、“new breeze is blowing and” (ジョージ・H・W・ブッシュ (計 3 回))、“again we will make America” (トランプ (計 3 回))、“America at its best is” (ジョージ・W・ブッシュ (計 3 回))、“to renew America we must” (ビル・クリントン (計 3 回))、“the will of the people” (バイデン (計 3 回) が用いられている。

6 語のコロケーションを見ると、“a new breeze is blowing and” (ジョージ・H・W・ブッシュ (計 3 回))、“the fate that will fall on” (ロナルド・レーガン (計 2 回))、“all are born equal in dignity” (リチャード・M・ニクソン (計 2 回))、“am putting out my hand to” (ジョージ・H・W・ブッシュ (計 2 回))、“are born equal in dignity before” (ニクソン (計 2 回))、“be finished in the first one” (ジョン・F・ケネディ (計 2 回))、“believe in a fate that will” (レーガン (計 2 回))、“by the common objects of their” (バイデン (計 2 回))、“defined by the common objects” (バイデン (計 2 回)) が見つかる。7 語のコロケーションは、 “in the whirlwind and directs this storm” (ジョージ・W・ブッシュ (計 2 回))、8 語以上のコロケーションでは、上記の例以外の新規な表現が反復されている例は検出されなかった。各々の表現については、第 2 節にて詳述するが、以上の議論をまとめると次のようになる。

(大統領の就任演説 (1960 年〜2021 年) におけるコロケーションの特徴)

- コロケーションの語数が少ないほど慣例的であり、文法的に固定されている。
- AntConc による n-gram の検索では、大統領が同じ表現を 2 回以上反復している表現は、9 語以上のコロケーションでは検出されない。
- 語数が 3 語以上 8 語以下で、かつ頻度が高いフレーズは、一人の大統領が何度も使用している場合が多い。その場合、大統領の個性が観察され、平行法と関係している。

次節から考察する平行法の反復は、大統領特有の表現であるという前提に立ち、次のリサーチ・クエスチョン (RQ) に基づいて年代順に議論を進めるが、演説の中で一貫するメタファーやその他のレトリックについても必要に応じて平行法の効果とともに概観する。(使用されている平行法及び時代背景に関しては付録にまとめている)

(RQ)

- 平行法の使用によってどのような大統領の思惑や事態が前景化され、それによってどのような効果が生み出されているのか。

2 就任演説における平行法の分析

2.1 1960 年代

1961 年のケネディ大統領の演説においては、反共主義の考えが、 “those who foolishly sought power by riding the back of the tiger ended up inside” (愚かにも虎にまたがって権力をえようとしたものが、結局虎に食われてしまった (長谷川　訳) という動物のメタファーと戦争のメタファー (“a struggle against the common enemies of man: tyranny, poverty, disease and war itself”) の中に現れている。その対処法として、ケネディは武力に頼るのではなく、交渉の必要性を “Let us never negotiate out of fear. But let us never fear to negotiate” という A (negotiate)・B (fear) を B (fear)・A (negotiate) とする交互配列[2] (chiasmus) によって強調し、平和主義の思想を顕在化させている。

加えて、ケネディが理想とする世界―「強者は公正であり、弱者は安全であり、平和が保たれる新しい法の世界」(長谷川 訳) ―の実現には、時間がかかることは自明だが、追求していく姿勢を平行法によって顕示している。ケネディは、“All this will not be finished in the first one hundred days. Nor will it be finished in the first one thousand days, nor in the life of this Administration, nor even

[2] A・B を B・A と反覆する技巧 (大山, 1956: 76)。

perhaps in our lifetime on this planet. But let us begin” の中で、 “be finished in the first one” を連呼していることに気がつくだろう。「最初の 100 日間」とはケネディ政権の 1 年目、「最初の 1000 日間」とは 4 年の大統領の任期を指し、「我々が生きている間」とは現世代を指していると考えられる。すなわち、小さい単位から大きい単位へと変化させ、徐々に意味を強めているため、漸層法[3] (climax) の技巧に分類される。その目標を達成するために、ケネディは国民一人一人が立ち上がることを、 “Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country” という交互配列 (A (country) ・ B (you) を B (you)・A (country)) によって情熱的に呼びかけているのである。

続くジョンソンの演説は、「偉大な社会」(Great Society) をキーワードとして提示し、不公平な社会に対して変化を求めている。その姿勢は、変化を武器として見立てるメタファー (“But change has given us new weapons”) に見られ、ジョンソンが想定する正義へとつながる。すなわち、“Justice requires us to remember: when any citizen denies his fellow, saying: “His color is not mine or his beliefs are strange and different,” in that moment he betrays America” の中で示唆されるように、人種差別の撤廃を求めているのである。その意識は、傷と火のメタファーが平行法で使用されている箇所にも看取される。メタファーと平行法の融合は、 “So let us reject any among us who seek to reopen old wounds and rekindle old hatreds” の re-V old N の繰り返しに表れ、米国の過去の傷を開く者と憎悪を再びかきたてる者を断固拒否する姿勢を明示している。

ジョンソンが想定する「偉大な社会」とは、 “I do not believe that the Great Society is the ordered, changeless, and sterile battalion of the ants. It is the excitement of becoming—always becoming, trying, probing, falling, resting, and trying again—but always trying and always gaining” であり、蟻の規則的な変化のない大群のようなものではないことを示している。すなわち、always V-ing と V-ing の動名詞の反復から判断できるが、その「偉大な社会」を築くためには試行錯誤しながら、状況をより良い方法へ流転させていくことが重要である、というスタンスが貫かれている。

2.2 1970 年代

1970 年代初期のベトナム戦争への反戦運動の勢いが増す中で、ニクソンは演説で「平和」をキーワードに国民に語りかける。建物のメタファー (“we can build a great cathedral of the spirit”) との関連で、戦争や分断の解決策として、精神 (spirit) の重要性を際立たせる。その精神性とは、人間にとって根本的なこと “goodness”、“decency”、“love”、“kindness”、であると説明し、平等を求める精神と結びつく。例えば、“What remains is to give life to what is in the law: to ensure at last that as all are born equal in dignity before God, all are born equal in dignity before man” の中で、all are born equal in dignity before N の構成が反復されている。“What” から始まる一文では、法律に息吹をかけること、つまり法律を是正することが提言されている。ニクソンは、神や人の元での平等を確保することを目指しており、その平等に関する視点は、前文の “This means black and white together, as one nation, not two” にも内蔵されている。その背景で、ニクソンは最終目標を明確に掲げる。具体的には、 “Let us take as our goal: where peace is unknown, make it welcome; where peace is fragile, make it strong; where peace is temporary, make it permanent” の中で、where N is V, make it A という平行法を駆使し、戦争がない世界を目指しながらその目標に進んでいくことを、旅のメタファー (“To go forward at all is to go forward together”) と平行法 (“go forward”の反復) を融合させることで、共に国民と目標へ突き進んで行くことを明言している。

ウォーターゲート事件をきっかけに辞任したニクソンの後釜であるジェラルド・R・フォードの演説では、彼の思想が明確には表れてはいない。むしろ、国民が大統領として受け入れてくれるのだろうか、という不安が際立つ。例えば、“I am acutely aware that you have not elected me as your President by your ballot” と述べて、投票によって選出されたわけではないことを自ら認めると同時に、演説自体も、“Not an inaugural address, not a fireside chat, not a campaign speech—just a little straight talk among friends.” (「就任演説ではなく、炉辺談話でもなく、選挙演説でもない」) とし、断定的な言い方を避ける姿勢が観察される。これは、not N が文頭に 3 回連続して使用されているため、

[3] 漸層法とは語や観念を段階的に高めて強めたり、あるいは逆に段階的に低めて弱めたりする文彩である (野内, 2003: 160)。

三つ組表現法 (triad) (堀 2019: 70) に含まれるが、疑惑法 [4](aporia) の一種であると考えられ、フォードの慎重な態度が表れている。

ジミー・カーターの演説では、「人権の尊重」がテーマとして一貫しており、演説の冒頭部分では、“This inauguration ceremony marks a new beginning, a new dedication within our Government, and a new spirit among us all” のように、a new N が 3 回繰り返され、新たな「始まり」「献身」「精神」に軸足が置かれている。A new N のコロケーション自体は、1960 年から 2021 年の演説で 35 例あり、特異な表現ではないが、 “a new beginning”、“a new dedication”、“a new sprit” の組み合わせを用いているのは、カーターのみであるという点で、オリジナリティを含む表現法である。

この組み合わせがどのようにイデオロギーと関連しているのか。それは、“We are a purely idealistic Nation, but let no one confuse our idealism with weakness. Because we are free we can never be indifferent to the fate of freedom elsewhere. Our moral sense dictates a clear-cut preference for these societies which share with us an abiding respect for individual human rights” の中に見出せる。はじめの 1 文で、“idealistic” と “idealism”、 “free” と “freedom” の変奏 [5](polyptoton) が使用され、「私たちと同じように道徳的感覚が個人の人権を尊重している社会に対して明確に優先順位を決定づける」ことを明示している。

2.3 1980 年代

レーガンの演説は、当時の経済状況を病気に見立てる比喩表現 (“the economic ills”、“economic affliction”) により、税金のシステムの問題点を指摘した上で大きな政府を批判する。例えば、 “All of us need to be reminded that the Federal Government did not create the States; the States created the Federal Government” では、A (the Federal Government) ・B (the States) が B (the States) ・A (the Federal Government) の形で用いられ、大統領は連邦政府ではなく州レベルの統治力を重視していると判断できる。

その後、英雄メタファー (“Those who say that we’re in a time when there are not heroes”、 “You can see heroes every day” など) を通して個人の尊重を訴える構造となっている。レーガンは、英雄を一般の国民として示し、国民は大きな夢を志すべきである、という趣旨 (“we’re too great a nation to limit ourselves to small dreams”) を主張する。その上で、“I do not believe in a fate that will fall on us no matter what we do. I do believe in a fate that will fall on us if we do nothing” のように “a fate that will fall on us” の形を平行法として用い、経済の悪化と政府の拡大による個人の自由の喪失を懸念しているのである。それゆえ、この文脈を鑑みると“fate” とは、衰退のこと指しており、その末路を避けるための意識的な行動を呼びかけながら、保守主義の思想が貫かれている。

ジョージ・H・W・ブッシュは、米国の基準に照らし合わせた「自由」に焦点を当て、戦争の正当性を匂わせる。米国は 1989 年にパナマを侵攻し、ノルエガ大統領を麻薬取引などの不正を行っているとして逮捕するが、その前触れとも言えるレトリックが就任演説の後半部分でドラッグをバクテリアに喩える病気のメタファー (“a deadly bacteria”) によって伝達されている。具体的には、“The most obvious now is drugs. And when that first cocaine was smuggled in on a ship, it may as well have been a deadly bacteria, so much has it hurt the body, the soul of our country” と述べ、米国の魂をも傷つけていることを示唆し、一種のプロパガンダとして機能していると考えられる。その所論に至るまでに、風のメタファー、平行法、直喩によって「自由」が前景化されている。例えば、“For a new breeze is blowing, and a world refreshed by freedom seems reborn” と “A new breeze is blowing, and a nation refreshed by freedom stands ready to push on” では風のメタファーと平行法が組み合わさっている。この平行法は、連続して用いられているわけではないが、前者が使用された後、しばらくして後者が姿を現す。A new breeze is blowing, and a N refreshed by freedom の構成が反復されることで、風のメタファーと “freedom” を共起させて「自由」に主眼を置いている。

この点において、 “freedom” を際立たせる構成の繰り返しは “We know what works: Freedom

---

[4] 話し手・書き手が当惑、優柔不断、慎重さなど何らかの理由で語の選択、行動の選択、事象の解釈で決断を下せずためらいを示すこと (野内, 2003: 99)。

[5] ある語を繰り返す時、同じ root (語根) をもつ語を繰り返すもの (大山, 1957: 81)。

works. We know what's right: Freedom is right” のように、We know what V: freedom V の形態にも表面化している。1 つ目の形は、We know what V: freedom V であるが、2 つ目ではその基本形を応用し、We know what V N: freedom V N を作り出している。いずれにせよ、大統領はコロンの直前と直後の形式 (what X: freedom X) を揃えることで、固定の “freedom” を中心軸において周りのスロットを埋め、その重大さを浮き彫りにしている。後半部分では、自由を凧に見立てる直喩 “freedom is like a beautiful kite that can go higher and higher with the breeze” で締め括られ、「自由」のイメージ作りに貢献していると言えよう。このように、「自由」をあえて明確に定義せずに、メタファー、直喩、平行法によってその良いイメージを作り上げ、他国への軍事介入の妥当性を暗示している。

2.4　1990 年代

クリントンの演説は、「米国の更新」をテーマにし、経済の回復と民主主義の重大さを論じている。経済状況に関しては、“we inherit an economy that is still the world's strongest but is weakened by business failures, stagnant wages, increasing inequality, and deep divisions among our own people” と説明し、当時の米国の経済状況を「世界で最も強い」と自負しながらも、そのマイナス面についても認識している。テーマである「更新」は、経済回復も含みながら、米国の民主主義がその原動力であることを示唆している。例えば、クリントンは「米国の更新」を乗り物として捉え、民主主義をエンジンと見なすメタファー (“Our democracy must be not only the envy of the world but the engine of our own renewal”) を使っている。また、米国が抱える問題の原因として、放浪のメタファーと変奏　(polyptoton) のレトリック (“we have drifted. And that drifting has eroded our resources, fractured our economy, and shaken our confidence”) を混ぜ合わせることで、これまでの政府のやり方を間接的に非難していると読めよう。

それを背景として、どのように米国を「更新」するのかが、“To renew America, we must be bold”、“To renew America, we must revitalize our democracy”、“To renew America, we must meet challenges abroad as well as at home” という平行法 (To renew America, we must V の構成の反復) によって伝達されている。つまり、「大胆であること」「民主主義の活性化」「国内外での挑戦」が所論として掲げられている。また、主題となる「民主主義の活性化」に関連する思想は、国家を家族と見立てるメタファー “We must provide for our Nation the way a family provides for its children” にも見られ、国民を子供として国家が親の役割を担う考え (Lakoff, 2002) が見受けられる。レーガンの演説で見られた大きな政府を批判する態度と正反対のイデオロギーが認められる。

ジョージ・W・ブッシュの演説では、“civility” (礼儀正しさ) をテーマにしている。その証拠に全 10 件の演説の中で “civility” は計 5 回 (J F K (1 例)、ジョージ・W・ブッシュ (4 例)) であり、ブッシュがほぼ独占していることに加え、変奏と平行法によっても表面化している。例えば、“America, at its best, matches a commitment to principle with a concern for civility. A civil society demands from each of us good will and respect, fair dealing and forgiveness” の中では、“civility” が “civil” に置き換えられ、「善意と尊敬、公正な取引、許し」を市民社会は求めることが示されている。加えて、“America, at its best” の構成は演説で散りばめられており、“America, at its best, is also courageous”、“America, at its best, is compassionate”、“America, at its best, is a place where personal responsibility is valued and expected” の中で米国の最善の状態がどのようなものかを明確にしている。彼の考えでは、「礼儀正しさ」「勇気」「思いやり」「個人の責任の重要性」に重点を置き、それぞれの要素が尊重される社会が米国にとって最良であることを顕示している。

そしてその土台となるのが、自由と民主主義であることを、嵐のメタファー (“America's faith in freedom and democracy was a rock in a raging sea. Now it is a seed upon the wind, taking root in many nations”) によって提示している。ここでは、自由と民主主義が一つ概念として捉えられていて、それが荒れる海の岩であったこと、つまりどのような状況でも動くことのない確固たる信念であることを示している。だが、後半部分を注意深く観察すると、 “a seed” とは、自由と民主主義のことであり、“taking root in many nations” はその思想が他国で根を張っていることを示している。換言すると、この植物のメタファーによって、「米国の思想を世界に広げていく」という帝国主義的なイデオロギーが影を潜めていることは否めない。

2.5　2000 年代

米国歴史上初の黒人大統領は、米国が直面する戦争、憎悪、経済の悪化、貧困、地球温暖化の問題について言及し、米国が危機的な状況下にいることを提示することから演説は始まる。その流れでアメリカ建国以来、先人たち、それも名も無い人々が、今日の米国を作り上げるために払った犠牲や努力に対する感謝の気持ちを旅のメタファー (“journey”は 3 回、“travel”は 2 回) によって体現し、さらに 同一語句反復[6] (anaphora) によって先人の成し遂げたことの偉大さを再認識している。その反復のレトリック (“For us, they packed up their few worldly possessions and traveled across oceans in search of a new life. For us, they toiled in sweatshops and settled the West; endured the lash of the whip and plowed the hard earth. For us, they fought and died, in places like Concord and Gettysburg; Normandy and Khe Sanh[7]”) の中で、For us, they V が 3 回連続して用いられ、「私たちが今日あるのは先人のおかげだ。先人たちが私たちのために力を尽くしてくれたのだ。だから、私たちは先人たちの生き方とその精神を遺産として継承し、未来につなげていかねばならない。旅を続けていかなければならない。」という、オバマの演説全体を貫く主張の論理の形成に寄与している。さらにオバマは “Our workers are no less productive than when this crisis began. Our minds are no less inventive, our goods and services no less needed than they were last week or last month or last year. Our capacity remains undiminished. But our time of standing pat, of protecting narrow interests and putting off unpleasant decisions” のように、our N と no less を反復と緩叙法[8] (litotes) を駆使して伝達すべき事柄を前景化させている。 ここでは、「米国国民には力がある」ことを伝えながらも、直面している危機に立ち向かうために、「先人たちの努力と犠牲」に敬意を示すオバマの謙虚な思想が現れている。

一方で、トランプは、先人たちの精神や生き方の継承ということは一切考えておらず、“But that is the past. And now we are looking only to the future” というドナルド・トランプの言葉は、継承どころか、過去との決別、自分たちを過去と完全に切り離している。さらにこれに続く “From this day forward, a new vision will govern our land. From this day forward, it’s going to be only America First” という “From this day forward” の反復には、アメリカのこれまでの価値観、世界の中で果たしてきたアメリカの役割を切り捨てて、これからはアメリカ第一主義で危機を切り抜けるのだという、演説全体を貫くトランプの主張を強く訴える働きがある。大統領が語りかける対象も、これまでの大統領と大きく異なる。トランプは、 “We will bring back our jobs. We will bring back our borders. We will bring back our wealth. And we will bring back our dreams” のように、We will bring back our N を 4 回連続して使用しており、N の部分を前景化させている。すなわち、「仕事」、「国境」、「富」、「夢」を取り戻すことを力説している。また、この文脈での “our” とは米国人 (特にラストベルトの白人中産階級) を指しており、仕事などを奪っているのは移民であることを間接的に批難している。白人中産階級の人への呼びかけは、“your voice, your hopes, and your dreams, will define our American destiny” の your N の構成の代名詞の三つ組表現法の中にも見出すことができ、米国を統一ではなく、分裂する思想が表面化している。

2021 年 1 月 20 日に就任したバイデンの課題は、トランプによって分断が加速された米国社会をどう変革するのか、また、感染拡大する COVID-19 にどう打ち勝つかということである。バイデンは「民主主義」と「統一」のテーマを掲げて、国民の感情に訴えかける。演説演説の冒頭では、“This is America’s day” と “This is democracy’s day” の平行法、This is N’s day の繰り返しが、米国と民主主義を結びつける構図となっている。加えて、“Much to do, much to heal, much to restore, much to build and much to gain” という much to V の平行法を 5 回繰り返すことで、問題を多く抱える米国の逼迫した状況が前景化されている。バイデンにとってその問題を解決する糸口は、「統一」であるが、それを前提とする一貫したメタファーも駆使されている。演説を貫くメタファーは、物語メタファー (“American story”) であり、米国の「統一」への歩みが物語として認識されている。そのメタファーと「統一」の結びつきは、“But the American story depends not on any one of us, not some of us, but on all of us” の N of us の平行法によって表されている。これにより、アメリカ物語

---

[6] 同じ言葉や、phrase で各 clause を初めるもの (大山, 1956: 71)。

[7] Concord (独立戦争)、Gettysburg (南北戦争)、Normandy (第二次世界大戦)、Khe Sanh (ベトナム戦争)。

[8] この語は、否定を重ねる表現の他に、文字通りの意味での緩叙 (すなわち、度合いの点で抑制された表現、言い換えれば「小さな」表現) を意味する。(佐藤 et al., 2006: 397)。

は国民全員の物語であることに軸足が置かれ、演説のテーマが効果的に伝達されている。アメリカ国民全員を巻き込むレトリックは、“I will be a President for all Americans. All Americans.” の “All Americans” の反復や、 “We must set aside politics and finally face this pandemic as one nation, one nation” の “one nation” の反復によっても如実に体現されている。

バイデンは、自分の強い感情と意思を “My whole soul is in it today, on this January day. My whole soul is in this. Bringing America together, uniting our people, uniting our nation.” の中で、My whole soul is in N と uniting our N の平行法によって表明している。これからの 4 年間を「統一」に向けて全身全霊で取り組む姿勢が顕著に観察され、uniting our N の平行法からもその意味が強められている。この平行法は、大統領自身の意思であるが、「統一」に向けて国民が意識的に行うべきことを、“Let's begin to listen to one another again, hear one another, see one another. Show respect to one another.” の中で示唆している。具体的には、V one another の平行法の反復によって、互いの意見を聞くことや相手への尊重を呼びかけている。バイデンの就任演説では、政治とは「統一」へと結びつくものであり、国民の一致団結を最優先としている。

結語

本稿は、1960 年から 2021 年の 1 期目の米国大統領の就任演説で、平行法 (parallelism) によってどのような大統領の思惑や事態が前景化され、それによってどのような効果が生み出されているのかを AntConc のデータ並びに手作業で抽出した反復のレトリックを考察した。結論として、平行法というレトリックによって大統領の独自のコロケーションが反復されることで、その流れの中に意識が生まれ、新たなゲシュタルトが形成されるのである。多くの場合、メタファーとの関連で反復の技法が使用されており、その融合により、演説に一貫するイデオロギーがコロケーションとして繰り返される傾向がある。今後は、その他の反復のレトリックを包括的に分析し、レトリックと認知、ひいては大統領のイデオロギーの解明に迫り「言葉の選択」が、いかにして社会を形成する手段として関与しているのかを考察することが課題である。

謝辞

本稿執筆に際し、渡辺秀樹先生、大森文子先生には建設的で有益なご助言を数多くいただいた。深く感謝申し上げたい。なお、本稿に残る不備は全て筆者による。

参考文献

Cavari, Amnon. 2017. *The Party Politics of Presidential Rhetoric*. Cambridge.
Charteris-Black, Jonathan. 2004. *Corpus approaches to critical metaphor analysis*. Springer.
Charteris-Black, Jonathan. 2005. *Politicians and rhetoric: The persuasive power of metaphor*. Springer.
Charteris-Black, Jonathan. 2014. *Analysing political speeches*. Macmillan International Higher Education.
Gibbons, Alison and Sara Whiteley. 2018. *Contemporary Stylistics: Language, Cognition, Interpretation*. Edinburgh University Press.
Lakoff, George. 2002. *Moral Politics*. The University of Chicago Press.
Lakoff, George. 2006. *The political mind: A cognitive scientist's guide to your brain and its politics*. Penguin.
Lakoff, George. 2014. *Don't think of an elephant!*: *Know your values and frame the debate* : *the essential guide for progressives*. Chelsea Green Publishing.
Silva Rhetoricae: The forest of rhetoric. (n.d.). Retrieved from http://rhetoric.byu.edu
大山敏子. 1956. 『英語修辞法』, 篠崎書林.
亀井俊介・杉山直子・荒木純子・渡邊真由美. 2018. 『アメリカ文化年表: 文化・歴史・政治・経済』, 南雲堂.
佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』, 大修館書店.
DK 社編. 2017. 『歴代アメリカ大統領百科』(大間知知子訳), 原書房.
野内良三. 2003.『レトリック辞典』, 国書刊行会.
長谷川潔. 2008.『ケネディ大統領演説集』, 南雲堂.
堀正広. 2019.『はじめての英語文体論』, 大修館書店

付録

表 2 平行法 (その他のレトリック) と前景化される事柄、歴史的背景

大統領	平行法とその他のレトリック	前景化される事柄	主な歴史的背景 (『アメリカ文化年表』と『歴代アメリカ大統領百科』より抜粋)
John Fitzgerald Kennedy (1961 年 1 月 20 日就任)	・V-ing N as well as N の反復 ・動物/ 戦争メタファー ・交互配列 ・漸層法	反共主義の考えを強調/ 国民の力を重視	1961 年 3 月 1 日ケネディ、行政命令で発展途上国に協力することを目的とした平和部隊 Peace Corps 設置。 1961 年 3 月 6 日政府と関係のある業者に対して、求職者と従業員を人種・性別で差別してはならないという大統領命令が出る。(アファーマティブアクションの始まり) 1961 年 4 月 17 日亡命キューバ人で構成した反カストロ軍、CIA の支援を受けたピッグス湾上陸侵攻に失敗。 1963 年 6 月、公民権に関する演説を行い、後にリンドン・B・ジョンソン大統領によって成立する公民憲法案を提出。 1963 年 7 月、ソ連と核実験停止条約を調印する。 1963 年 11 月、46 際の若さで暗殺される。
Lyndon Baines Johnson (1963 年 11 月 22 日就任)	・always V-ing/ re-V old N の反復 ・傷/ 火のメタファー	「偉大な社会」を強調/ 人種差別の撤廃を求める	1964 年 公民権法に署名する。 経済機会法に署名し、「貧困との戦い」を開始。 1965 年 7 月 28 日、米軍のベトナム派遣を許可。米軍の兵力は急速に増加し、1966 年までに 40 万人に達する。 1965 年 7 月 30 日、低所得者と高齢者に病院と医療保険を提供する公的医療保険制度を成立させる。
Richard Milhous Nixon (1969 年 1 月 20 日就任)	・all are born equal in dignity before N/ Where N is V, make it A の構成が反復 ・旅/ 建物のメタファー	「平等」に焦点	1970 年 公害の監視と抑制のために環境保護局を設立する。 1971 年 インフレ抑制のために 90 日間給与と物価を凍結する。 1972 年 2 月、外交関係を結ぶために中国を訪問する。 1972 年 5 月、ソ連との間で両国が保有できる核ミサイルの数を制限する戦略兵器制限交渉 (SALT) をまとめ、条約に調印する。 1974 年 ウォーターゲート事件により辞任。
Gerald Rudolph Ford (1974 年 8 月 9 日就任)	・not N が文頭に 3 回連続して使用 ・三つ組表現法 ・疑惑法	守りのレトリックとして機能	1973 年 副大統領のスパイロ・T・アグニューが脱税を告発されて辞任した後を受けて、副大統領に就任する。 1974 年 ニクソン前大統領に恩赦を与える。 1974 年 財政問題について大統領に助言を与える経済製作委員会を設置する。 1975 年 2 度の暗殺の企てから逃れる。
James Earl Carter (1977 年 1 月 20 日就任)	・a new N の反復 ・変奏	「人権の尊重」をテーマとし、新たな「始まり」「献身」「精神」を重視	1977 年 パナマ運河条約を締結し、運河地帯と運河の管理運営権のパナマへの返還に同意する。 1978 年 エネルギー危機に対処するため、国産の石油と天然ガスの価格規制を解除するが、消費者は大幅な価格の上昇に直面する。 1979 年 ソ連との間に第二次戦略兵器制限条約 (SALT II) を締結するが、ソ連のアフガニスタン侵攻により批准が見送られる。 2002 年 国際紛争の解決、特にキャンプデーヴィッド合意に果たした役割を評価され、ノーベル平和章を受賞する。
Ronald Wilson Reagan (1981 年 1 月 20 日)	・“a fate that will fall on us” の反復 ・英雄メタファー ・交互配列	国民に意識的な行動の呼びかけ/ 保守主義の思想	1981 年 サンドラ・デイ・オコンナーを女性初の最高裁判じに任命する。 1984 年 民主党候補に 20 世紀で 2 番目の大差をつけて大統領に再選される。 1985 年 増加する財政赤字を抑制するために、グラム・ラドマン・ホリングス法に署名する。

George Herbert Walker Bush (1989 年 1 月 20 日就任)	・A new breeze is blowing, and a N refreshed by freedom/ We know what V: freedom V の反復 ・病気/ 風のメタファー ・直喩	「自由」が前景化されている (その中身については実態がない)	1989 年　麻薬の不正取引にかかわった疑いのあるパナマの独裁者ノリエガ将軍を逮捕するため、米軍をパナマに侵攻させる。 1990 年　雇用主が障害を理由に差別することを禁止したアメリカ障害者法に署名する。 1990 年　クウェートからイラク軍を排除するために米軍を派遣する。
William Jefferson Clinton (1993 年 1 月 20 日就任)	・To renew America, we must V の反復 ・家族/ 乗り物/ エンジン/ 放浪のメタファー ・変奏	「米国の更新」がテーマとし、経済回復と民主主義を重視	1978 年　アーカンソー州知事に選出される。 1994 年　国際貿易を促進するための関税貿易一般協定 (GATT) を成立させる協定に署名する。 1995 年　予算の均衡をめぐって、共和党が多数を占める議会と衝突。連邦政府は一時的な機能停止に陥る。 1995 年　北アイルランドを訪問し、のちに結ばれる歴史的なベルファルト合意に重要な役割を果たす。ベルファルト合意によって、ふたつの政治団体の間の 30 年間続いた争いが終結する。 1998 年　ホワイトハウスで働く女性インターンとの情事に関する嘘を咎められ、弾劾裁判にかけられる。弾劾は否決。
George Walker Bush (2001 年 1 月 20 日就任)	・“America, at its best” の反復 ・嵐/ 植物のメタファー ・変奏	米国の最高の状態を定義し、自由と民主主義を一つの概念として捉える	2001 年　3 月、地球温暖化防止のために参加国に温暖化ガス排出削減を求める京都議定書に批准しないことを表明する。 2001 年　5 月、総額 1 兆 3500 億ドルの減税を認める法案に署名する。その結果、政府の財政赤字が増加する。 2001 年　10 月、政府当局が情報収集する権限を拡大する愛国者法に署名する。 2001 年　10 月、アフガニスタンで軍事行動を開始する。 2002 年　新しい学力テストを導入し、学校が生徒の学力向上に責任を負う、いわゆる「落ちこぼれゼロ法」を成立。
Barack Hussein Obama (2009 年 1 月 20 日就任)	・our N と no less 反復/ 緩叙法 ・旅のメタファー ・同一語句反復 緩叙法	先人の偉業を称え、米国国民の力を重視	2009 年　国際的金融危機からアメリカ経済を回復させるため、アメリカ復興・再投資法に署名する。 2011 年　5 月、パキスタンのアボッターバードで、テロ組織の指導者ウサーマ・ビン・ラーディンをアメリカ海軍特殊部隊が殺害したと発表する。 2011 年　12 月、米軍のイラクからの撤退を終了する。 2014 年　イラク国内の IS 支配地域に対する空爆を命じる。 2015 年　アフガニスタンにおよそ 5000 人の米軍を駐留させると発表する。
Donald John Trump (2017 年 1 月 20 日就任)	・We will bring back our N/ N V—but SV (not)の反復 ・三つ組表現法	「アメリカ第一主義」に基づき「白人中産階級」に向けてのメッセージ	2000 年　2000 年の大統領選挙に改革党から出馬するために候補者指名を争うが、のちに指名争いから撤退する。 2016 年　大統領選挙の共和党候補に指名される。
Joe Biden (2021 年 1 月 20 日就任)	・This is N’s day/ Much to V/ N of us/ My whole soul is in N/ uniting our N/ V one another ・物語のメタファー	「民主主義」と「統一」がテーマ	2021 年　1 月 6 日にトランプ支持者の極右等がホワイトハウスを襲撃。分断の加速。 ＊COVID-19 の感染拡大継続。

英語色彩語を含む強意直喩表現の分析 ―文脈と媒体の関係―

竹森ありさ

1. はじめに

色彩語は比喩義を持ち、その認知プロセスについては様々な議論がされている。英語の色彩語メタファーには Adj + N(white lie) ,V + Adj (feel blue) など様々な形式があり、形式を問わない包括的な研究もあれば Adj + N のみを扱ったものなども存在する。

本稿では、色彩語比喩表現の中でも、強意直喩表現を扱う。強意直喩は、概ね [N1 V (as) adj. as N2.]という形式をもっており、”Her cheek is as red as rose.” などがこの例にあたる。形容詞が示す性質の程度を高める表現である。色彩語メタファーには、先述の”white lie”、”feel blue”など、感情や嘘など本来物理的色彩をもたないものが見られるが、これらに比べて強意直喩は視覚的なつながりがある場合が多い。また、メタファーは様々な形式がある一方、強意直喩はシンプルでありコーパスで扱いやすいと言える。

色彩語を含む強意直喩表現は、*red as rose, red as fire, red as blood* などのように N2 のスロットに様々な名詞が入りうる。しかしこれらは全て「真っ赤」という意味を表す。N2 が文脈的にどのように違うのかについて、N1 と文脈の結びつきにより N2 に選択される語彙が決定されているという考えに立った上で、使用傾向を明らかにするのが本研究の目的である。

2 節では先行研究を概観し、3 節で研究方法を説明する。4 節でコーパスの強意直喩表現のデータを示し、5 節で議論、6 節でまとめと課題を述べる。

2. 先行研究

強意直喩表現については 2.1 節と 2.2 節、色彩語については 2.3 節で取り上げ、2.4 節で問題点をまとめる。

2.1 Svartengren (1918), Moon (2008)による強意直喩表現の研究

強意直喩表現の研究は、Svartengren (1918)と Moon (2008)を取り上げる。

Svartengren (1918)は、イギリス英語で見られる 1001 の強意的直喩表現を、形容詞の意味ごとに分類して紹介し、強意直喩表現の主要な特徴をまとめている。形容詞と N2 に注目して分析しており、それぞれの強意直喩の N1 が必ず明記されているわけではない。(1) は形状に関し形容詞 straight の意味をもつ直喩として紹介されている。

(1)a. The highway soon became as straight as a bowstring.
b. He stood up immediately, as straight as a fiddlestring.
c. As straight as a thread.
d. Straight as a surveyor’s line.
e. He usually moves to his quarry as straight as a falcon. (Svartengren 1918: 275)

(1a, b)は N1 が示されているが、(1c, d)は何について”straight” なのかが不明である。そして、(1e) は “falcon”の素早い飛翔という特徴を踏まえると、“he”の姿勢の真っ直ぐさについて述べているものではないので、形状に関し”straight”だと断言できるかは疑問が残る。強意直喩の N1 や前後の文脈を考慮すると、紹介されている例に含まれる形容詞の意味解釈に変更が生じ、分類も変わる可能性がある。

続いて、Moon (2008)は、コーパス Bank of English などを中心に用いた *as*-similes の分布についての調査である。小説において強意直喩が頻繁に使用されている点を指摘し、その理由を、描写説明がメタファーよりわかりやすく伝わるためで、シミリーを選ぶのは読者に配慮した結果であると考察している (*ibid*. 30)。確かに作家の配慮は関係していると思われるが、*as*-similes は一場面に複数現れる傾向がある。これは作家が同じ形式の表現を用いて対比などのレトリックを利用する意図が考えられる (レトリックについては 5 節で詳述する)。一つの表現だけでなく、複数の強意直喩表現が相互に作用する可能性を Moon (2008)は見落としている。

2.3 小原(2016) による英語色彩語のコーパスでの分布の調査

小原(2016)は、Wierzbicka (1990)の「色彩の概念は人間の周りにある自然物(sky, grass, leaf, night, blood, fire, flame, sun など) に根差している」という主張に対し、この自然物の名詞と色彩語がどれほど多く共起するのかを検証した。色彩語(Adj.) + Noun という形式で BNC を検索した結果、*yellow, red* と関連していると言われている sun, fire, flame についてはそれほど共起頻度が高くなかった。表 1 は sun, fire, flame それぞれを修飾する色彩語をまとめたものである。

表 1 (小原(2016)より)

sun を形容する色彩語			fire を形容する色彩語			flame を形容する色彩語		
順位	色彩語	数	順位	色彩語	数	順位	色彩語	数
13	GOLDEN	11	16	BLACK[1]	20	2	BLUE	26
16	WHITE	10	28	BLUE	13	5	ORANGE	13
24	YELLOW	7	31	RED	11	7	YELLOW	12
26	RED	6	36	WHITE	9	10	RED	9
			43	GREEN	7	20	GREEN	5

Blue + fire/ flame で引用されている例には、”Damian snatched the phone from her hand, eyes like blue fire.” (*ibid*.60) “His eyes were like blue flames, she thought, drawing her irresistibly into his fire.” (*ibid*.61) などがあり、目の虹彩の色と、感情が関わることによって意外性のある共起が生じると言えるが、小原(2016)は色彩語のみに注目している。色彩語の周辺の語も重要な情報を含んでいるので分析する価値があるだろう。

2.4 先行研究の問題点

ここまで強意直喩表現と色彩語の先行研究を概観してきた。形容詞と vehicle[2]、色彩語と名詞という形式に注目した分析が中心であり、強意直喩表現の使用傾向の分析は、N1 や文脈を考慮したものではない。N2 の相違点を明らかにするためには、N1 や文脈も観察する必要がある。

3. 研究方法

本節では、N1 と N2 の関係を分析するためにどのように研究を行うかを説明する。

本研究で扱う色彩語は *white, black, red, blue, green, yellow* の 6 色である。Corpus of Contemporary English (COCA)のコロケーション検索で、*white, black, red, blue, green, yellow* のそれぞれに最もよく使用される N2 を 20 ずつ集める。次に、個々の N2 を色彩語ごとに、「身体」「着物・装身具」「自然物」「人工物」「心理・象徴」の 5 つに分類する。この分類は、N2 の言葉がどのように使われるか傾向を見定めるために行う。続いて、強意的直喩表現が肯定的意味、否定的意味のどちらで使用されているか判断する。 “Their hearts were as evil and black as coal.” などのように色彩語以外の形容詞が共起する例があるので、このような語句と、前文脈・後文脈中の表現を参考にする。ただし、強意直喩表現が文学作品に多用される点を考慮すると、肯定や否定をはっきりと示さない表現がある可能性に注意しなければならない。

上述の 6 色は、Biggam (2015) の ModE 基本色彩語 11 色(*white, black, red, yellow, green, gray, blue, brown, purple, orange, pink*) のうちの 6 色である。Biggam (2015) は英語における基本色彩語の発展を、OE, ME, ModE ごとに示した。

[1] この BLACK は固有名詞の一部なので色彩語の例からは外すべきと述べている(小原 2016: 60)。

[2] 本稿では Richards (1936)に倣い喩えられる言葉を tenor、喩える言葉を vehicle と呼ぶ。タイトルの「媒体」は vehicle の訳語である。

(2) OE : hwit, blæc/(sweart) , read, geolu, grene, græg
ME : whit, blak, red, yelwe, grene, grei, bleu, brown
ModE: white, black, red, yellow, green, gray, blue, brown, purple, orange, pink

(*ibid*.129)

white と *black* は OE では無彩色だけでなく明るい色と暗い色をも包含していた基本的な語である(*ibid*.122)。 *red, blue, green, yellow* は光と色の三原色を構成し、これら 6 色は色知覚的に重要な語である。残りの 5 色に関しては、元々色そのものではなく服や植物などを指しており、本研究で扱う 6 色に比べ基本色彩語になるまでに時間がかかっている(*ibid*.130)。また、これら 5 色を定義する際、基本色彩語を 2 つ以上掛け合わせた色であると説明される。

「身体」「着物・装身具」「自然物」「人工物」「心理・象徴」という 5 つのカテゴリーは、上村(1999) にならったものである。この研究は芥川龍之介作品での 7 つの色彩表現(白、黒、赤、青、黄、紫、緑)について、色彩の使用傾向と意味を分析したものである。上村(1999) は色彩表現の向けられている対象を 5 つのカテゴリーに分類し、この対象別分類に基づいて、 色彩がどのような意味を表しているかを考察した。

この対象別分類は、分類が細かすぎず、強意直喩の vehicle の性質を簡潔に示すことができる。また、強意直喩は小説に多く現れる傾向があり、この対象別分類は文学作品に適用されたものなので、本研究にも合うと考え採用した。

次節では、色彩直喩の N2 を提示し、N1 と文脈を確かめながら用例を見ていく。

4. データ

本節では COCA から得られたデータを示し、用例を観察する。4.1 節では 6 色それぞれの N2 を紹介し、4.2 節では、肯定的・否定的使用が顕著な強意直喩表現の例を取り上げる。

4.1 N2 のリスト

COCA で色彩語 + *as* (e.g., white as) を右 5 語に設定してコロケーション検索した結果、*white, black, red, blue, green, yellow* それぞれの N2 に入る語彙の上位 20 項目は表 2 の通りであった[3][4]。名詞の左の数字は COCA での順位、右の数字は頻度である。この表 2 には強意直喩表現ではない例は含まれていない。また、20 位以内に単数形と複数形の両方が含まれている場合は、それらをまとめて一つの項目としている。表 2 では、単複のどちらかでより頻度の高い方が、頻度の低い形を包含している(例 : *white* の SHEET は 100 例あり、単数形は 95 例、複数形は 5 例見られた)。以上の理由から、COCA の順位と頻度は必ずしも一致しない。

これらの N2 の対象別分類を行なった結果、vehicle の語彙には以下の傾向が見られた。

・「着物・装身具」は極めて少ない。服の色は様々であるため N2 に使われづらいと考えられる。
・「心理・象徴」に分類される語は *black* に最も多く見られた(death, soul, hell, ace of spade, sin)。
・「自然物」に分類できた N2 が最も多い。sky, sun, cloud など空に関係するものが特に多い。
・全体的な傾向として、色彩語と N2 を比べると色調の点で意外性が低く、「赤は血の色」「緑は植物の色」などの連想が強く働いているのが分かる。しかし個々の vehicle がもつ色と、ある色彩語の色調とを同じだと捉えていたとしても、つまり、ruby, rose, fire は全て *red* の色調をもつと捉えられているとしても、vehicle によって強意直喩表現の印象は異なるはずである。なぜ印象の異なる喩えを用いるかはそれぞれの用例を確かめなければならない。

---

[3] 以下の N2 は下記の形で使用される。2-25: ace of spade, 4-8 : robin's egg, 4-35: window cleaner, 4-37: gas flame, 5-14: growing corn ,6-17: frog belly, 6-23: spun gold

[4] 3. red, 4.blue, 5. green の項目に所有代名詞があるが、"He also had red hair, red as mine, and freckles over most of his face."のように身体部位の様子を比較する際に用いられている。ちなみに、5. green のみ検索方法が他の色彩語と異なり、名詞に限定した。その場合検索結果に所有代名詞は現れないため、5. green の mine は後から追加したものである。mine の順位が空欄となっているのはそのためである。

表 2

1. white			2. black			3. red		
1	SNOW	112	1	NIGHT	94	1	BLOOD	52
2	SHEET	100	2	COAL	40	2	HAIR	16
3	GHOST	53	3	PITCH	24	3	FIRE	15
5	BONE	22	4	INK	20	4	BEET	14
6	PAPER	15	5	MIDNIGHT	18	5	ROSES	6
7	CHALK	18	6	HAIR	14	8	SUN	6
8	MILK	15	7	TAR	13	9	LOBSTER	7
9	MOON	13	8	DEATH	9	10	APPLE	6
10	LIGHT	2	9	EBONY	10	11	RUBIES	5
11	MARBLE	10	10	RAVEN	11	14	CHERRIES	5
12	HAIR	5	13	SOUL	7	15	CRIMSON	1
13	COTTON	7	14	HELL	8	16	FLAME	3
15	CLOUDS	7	15	EYES	4	17	TOMATO	5
17	CREAM	4	17	PIT	3	18	SUNSET	4
19	ICE	6	18	SKY	10	19	BEETROOT	4
21	MOONLIGHT	4	20	OBSIDIAN	9	21	DEVIL	3
22	LILY	4	21	SIN	9	22	LIPS	3
23	SUGAR	6	22	SACKCLOTH	1	23	WINE	4
24	ALABASTER	5	23	SOOT	8	26	MINE	4
25	PEARLS	5	25	ACE	7	27	HELL	3

4. blue			5. green			6. yellow		
1	SKY	47	1	GRASS	18	2	BUTTER	4
2	SEA	12	4	SEA	5	3	SUN	2
3	EYES	10	5	GLASS	5	5	CHEESE	2
6	ICE	8	6	EMERALDS	4	8	DAFFODIL	2
8	EGG	8	7	MOSS	4	9	BUTTERCUP	2
10	HEAVEN	7	8	APPLES	4	11	PARCHMENT	2
12	LAKE	4	9	OCEAN	3	12	MUSTARD	2
14	MEDITERRANEAN	4	10	LEAVES	4	13	WAX	2
18	ATLANTIC	3	11	GOURD	2	14	BANANA	2
20	OCEAN	3	12	SPRINGTIME	1	15	CHICK	2
25	FORGET-ME-NOTS	2	14	CORN	3	16	SUNSHINE	2
27	SAPPHIRES	2	15	WAVES	1	17	BELLY	1
29	PLUMS	2		MINE	2	18	GRASS	2
30	MARBLES	2	18	SHAMROCK	2	19	FLOWERS	1
33	LAGOON	2	20	LAWNS	2	22	LEAVES	1
35	CLEANER	2	21	DÉCOR	1	23	GOLD	1
36	INK	2	22	JADE	2	31	BIRDSEED	1
37	FLAME	2	23	MEADOW	2	34	CURDS	1
40	HERS	2	24	SPINACH	2	35	CANARIES	1
42	SHADOWS	2	28	FOREST	1	39	BUTTERSCOTCH	1

4.2 N1、文脈と N2 の関係

前節では 6 色の強意直喩の N2 に使用される言葉を概観した。個々の強意直喩には一般的に形容詞—本研究では色彩語—を強調して伝えるという点が共通しているが、N2 には様々な語彙が使用され、これにより多様な印象を生むことができる。強意直喩を用いる際は、使用者がその多様な印象を効果的に利用してそれぞれの表現を使い分けていると考えられるが、その特定の印象を伝える意図には、N1 と N2 のつながりが関わっていると言える。つまり、N1 が肯定的と捉えられるなら、それは肯定的な印象を与える N2 に喩えられることになる。N1 が否定的に捉えられる場合も同じである。Moon (2008) は N2 と形容詞のつながりから生まれる効果を指摘している(*ibid*. 9)。しかし tenor も、vehicle と形容詞と相互に作用するはずである。4.2 節では N1 と文脈を明らかにしながら、色彩語を含む強意直喩の vehicle の違いを明らかにしていく。分析した結果、用例に肯定もしくは否定の使用傾向が分かりやすく表れているのは以下の表現であった。

表 3

肯定的	否定的
white as alabaster/ pearls/ cream	*white as sheet/ ghost/ marble*
black as ebony/ raven	*black as death*
red as cherries	*red as beet(root)/ lobster*
blue as sky/ heaven/ sea/ lake/ Mediterranean/ Atlantic/ ocean / lagoon	*blue as plums*
green as grass/ moss / meadow	*green as glass/ grass/ moss/ corn/ lawn*
yellow: なし	*yellow as (various nouns)*

紙幅の関係で全ての例を取り上げることはできないが、以下にいくつか用例を挙げ、文脈、N1 と N2 のつながりを確認したい。

●*White as marble*

用例数は 10 例であり、うち 9 例の N1 は身体部位である。この直喩は、身体の白さと冷たさの両方を伝える。

(3) The fever faded but left behind a child with eyes dark against a pale face and skin that no longer blushed with life but was **white as marble**.

(3)での身体部位の所有者は亡くなっている。大理石も死体も白く冷たいという点が共通している。*white as marble* は死や体調不良の文脈で用いられるため否定的な使用と言える。比喩表現 “a heart of marble”「冷たい心」[5]からも、大理石はその冷たさという点に注目されているのが分かる。

○*White as alabaster*

COCA には *white as alabaster* の用例が 5 つ見られ、N1 は肌、歯、彫像であった。(4)は N1 が歯の例である。

(4) Handsome, his blond hair neatly side-combed, his face fresh and confidant, his teeth as **white as alabaster**.

White as alabaster は *white as marble* と違い美しさを表し、(4)以外の例では “beauty”, “handsome”, “finely” などの肯定的な言葉が見られる。alabaster が彫刻の材料として使用され、芸術作品が美しいものであるという認識が影響していると考えられる。

[5] 『ジーニアス英和大辞典』参照。

●*Black as death*

用例数は 9 例であるが、うち 3 例は映画版 *Hamlet* の一節である。本研究は現代英語を分析対象にしているためこの 3 例は除外した。残りの 6 例の N1 は”hair”, ”a dog”, ” the sky”, “a tattoo”, “water”, “darkness in a tunnel” など様々である。(5)の N1 は”pistol” である。

(5) " …you do what I say or I'll kill you..." I guess he was talking about the pistol. All I could tell you was that it was massive, squared-off, and **black** **as** **death**.

(5)は語り手が” I'll kill you.”と脅されていること、ピストルが死に至らしめる道具であることなど、*death* の概念が文脈中に存在している。(5)以外の *black as death* が含まれる例も同様に、自殺の話題や殺意が湧く場面など死に関係する文脈である。

○*Black as raven*

COCA での用例数は 11 であり、いくつかは“raven’s feathers”, “raven’s wing(s)”, “raven’s sheen”の形で N2 に現れた。N1 は人間の髪や馬の毛である。”stylishly”、“sensually”、 “shining” などの言葉が文脈中に見られ、肯定的な使用の直喩と言える。

(6) Nazi's hair, stylishly cut, was as **black** **as** a **raven**'s feathers. She had a dimpled square chin and full lips, just like her handsome father, and her beautiful almond eyes …

●*Red as lobster*

COCA での頻度は 7 で、その全ての用例の N1 が人間の肌である。

(7) Didn't I tell you you were getting too much sun? Look at you, you're **red** **as** a **lobster**.

Red as lobster の表現が現れる文脈では、肌が赤くなる原因が示されており、(7)のように日焼けのほか入浴の行為もあり、これらがロブスターの調理される様と重なる。加えて、飲み過ぎが紅潮の理由となっている例もあるが、これには *lobster* のもつ「まぬけ」[6]の比喩義が関係していると考えられる。飲み過ぎや日焼けのし過ぎなどは行為者の不注意によって起こるものである。

○*Red as cherries*

用例数は 5 つで、N1 は頬、唇、ルビー、目が 1 例ずつ、頬が 2 例である。(8)の”gorgeous”のほか、”laugh”, “elite”などの肯定的な語がこの強意直喩の周りに現れた。

(8) Their hair hung down in dark curls and their lips were **red** **as** **cherries**. They were the most gorgeous girls Margaret had ever seen in her life.

cherry は陽気さ、純潔、豊穣の象徴[7]であり、これらのポジティブなイメージが、用例の美しい唇と結びついていると言える。

○*Blue as sea/ lake/ Mediterranean/ Atlantic/ ocean / lagoon*

blue を含む強意直喩表現で、*sea, lake, Mediterranean, Atlantic, ocean, lagoon* が N2 である用例を合計すると 28 例となり、うち N1 が”eyes”である例は 20 見られた。これらは N1 の目の美しさに対する褒め言葉である。(9)の N2 は *Mediterranean* であり、夏の海は良い印象を与えるものであることを示している。

(9) Rose, has anyone ever told you your eyes are as **blue** **as** the **Mediterranean** in summer? ... Or that your lips are as luscious as red raspberries in fall?

○*Blue as sky/ heaven*

澄んだ青い目への賞賛は *blue as sky/ heaven* に例があり、全用例中の約半分を占める。夏の海と同じように夏の空も美しいものと認識されているのが分かる。

(10) Asa's eyes were as **blue** **as** the sweet summer **sky** and often reflected the distant thoughts of the poet he tried to keep hidden.

---

[6] *OED*、『ジーニアス英和大辞典』参照。

[7] 『ジーニアス英和大辞典』参照。

晴天は海を鮮やかに見せるので、夏の海と空は美しさの点でかなり近い印象で捉えられている可能性がある。“blue as the sea and sky”というフレーズが COCA に見られるので、青い海と空は対として認識されていると言える。英語には空の青から生まれた色名が多くあり(福田 2017:249)、sky-blue、horizon-blue、cerulean-blue、azure-blue などが挙げられる。このように空の色を色名にするのは、「「神います天空」を崇める宗教感情をもつ民族に見られる」と福田(2017)は述べている。

○*Green as grass / moss/ meadow*

blue と同様に、*green as grass/ moss/ meadow* は主に目の虹彩の美しさを讃える表現である。 (11)は *green as grass* の例である。

(11) She had the most beautiful green eyes I'd ever seen. **Green** **as** spring **grass**.

肯定的文脈の *green as grass/ moss/ meadow* は”spring”, “springtime”の語と共起する。春の植物の緑が最も美しい緑だという考えから(11)のような表現が生まれると考えられる。[8]

●*Green as grass/ moss/ corn/ lawn*

green には“immature, raw, untrained, inexperienced.”の比喩義がある(*OED*)。*green* を含む強意直喩表現がこの意味をもっている時、N1 は全て人間で N2 は全て植物である。植物は成長する特徴があるが、未熟な人もまた成長の途中である。その類似点から生まれた直喩と言える。(12)は *green as moss* の例である。

(12) He's a buck private **green** **as** creek **moss** who just followed orders, factory-like,...

●*Yellow as (various nouns)*

Yellow の強意直喩はその色彩語の比喩義“Of a person, his or her eyes, complexion, etc.: of an unhealthy yellowish colour, typically as a result of old age or disease.” “lacking in courage; faint-hearted; cowardly.” (*OED*)を強く反映して、否定的な使用傾向が観察できる。(13)は病気によって顔色が黄ばんでいる様子である。

(13) All my babies had jaundice,' and when I flipped back the covers, there was this baby as **yellow** **as** a **banana** from a liver infection.

(14)は臆病さを示す例である。

(14) Rainey's a repeat deserter, **yellow** **as** **butter**.

その他の例の N1 は死体や歯が見られた。このようなネガティブな使用には、上記の *banana, butter* の他に *buttercup, mustard, wax, birdseed* などが N2 に選ばれているが、色調以外にどのような特徴を N1 と共有しているのか不明であるため、選択の理由は把握できていない。

4.3 分析のまとめ

ここまで、N1、文脈と N2 の関係について用例をいくつか示しながら分析してきた。*black* は死, *green* は未熟、 *yellow* は顔色の悪さや臆病などの、色彩語の比喩義に影響されている否定的な文脈が、データの中に見られた。その一方で、色彩語の比喩義が強意直喩表現になると消失する例もあった。*White as marble* は *white* の純粋というポジティブなイメージとは反対の否定的な表現である。*Black* は邪悪や絶望を表すが(加えて *raven* も不吉な鳥である[9])、*black as raven* は美しい髪に用いられる。”Green-eyed” は嫉妬を意味するが、*eyes green as grass* は魅力的な目であることを表す。*blue* は憂鬱の意味があるが、*eyes blue as the sea* は褒め言葉である。このように色彩語の比喩義が失われることが示唆するのは、色そのものが与える印象と物体の色が与えるそれは異なるということである。後者は人間の価値判断や習慣、感覚によって形成されたものであり、これらは比喩表現において生かされている。そして肯定的/否定的に捉えられる N1 は肯定的/否定的に捉

[8] 18 世紀から spring green という色名があり、これは 5 月の草木の美しい緑を指す(福田 1998:79)。

[9] 『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』、福田(2017: 266)参照。

えられている N2 を引き寄せる。個々の N2 は、N1 と文脈に合う特徴と性質を有しており、これが vehicle として選ばれる根拠となると言える。

5. 議論

4 節では文脈が肯定的あるいは否定的だと判断できる例を挙げ、N1 と N2 のつながりを確認したが、肯定にも否定にも分類できない用例もある。判別しにくい用例とはつまり N2 の印象が弱いものであるが、何故弱まってしまうのかを本節で議論する。

原因として考えられるのは、まず、慣用化の影響である。強意直喩表現は何世紀も形が変わっていないものがあり(e.g., *white as snow, brown as berry*)、cliché となってしまったものがある。繰り返し使用され、強意直喩が一つの語彙として認識されると、直喩の形容詞が中心的な意味になる代わりに、N2 の印象が弱まる。また、先行研究でも指摘されているが、強意直喩表現は頭韻や母音韻を踏む特徴があり(e.g., *good as gold, drunk as a skunk*)、これも慣用化を促す要因である(Svartengren 1918: 456, Moon 2008:5)。

N2 の印象を薄めるもう一つの要因は、強意直喩の修辞的使用である。4 節で挙げた直喩は、N2 のもつ比喩義や象徴的な意味が反映されることで、肯定と否定のどちらかに分類できる例が多い。しかし、修辞的に使用されることで肯定/否定の判断が難しくなる場合がある。レトリックは主に以下 4 つのパターン–対比、同一属性、作中参照、質感の類似–が見られた。それぞれのレトリックを以下に例示する。

①対比

色彩語を含む強意直喩表現の対比には、(15)のような例がある。

(15) The springtime sun is as **yellow** **as** a **daffodil** floating in a sea of blue.

強意直喩表現の対比において、比べられるのは色だけではなく、N2 の特徴をも含め様々に対比をなす。(15)では *yellow* と”blue”と共に、空と海を対立させている。小説で外見特徴や情景を説明する場面で、2 つ以上の色彩が使用されることは一般的によく見られる。複数の色彩語があることで、作家は対比のレトリックを使おうという考えをもつのだろう。

② 同一属性

複数の比喩表現を一場面中に用いる際に、同一カテゴリーに属するもので vehicle を揃えるレトリックである。(16)では 3 つの色を挙げ、それぞれの tenor を宝石に喩えている。

(16) Ragnar, a humble but content fisherman, hooks a fish with " scales like sapphires, eyes **green** **as** **emeralds**, and ruby red lips. "

③ 作中参照

強意直喩表現には、作中に出現するものに影響を受けて、それを N2 に使用するというパターンがある。(17)では、vehicle が登場人物の庭に咲いている花である。

(17) A dainty wee lassie she was, in her homespun frock with the baby flush in her cheeks and her eyes as truly **blue as** the **forget-me-nots** peeping at her from the garden grass.

④ 質感の類似

N1 は同様の色と質感をもつものに頻繁に喩えられ、(18)のような例がある。

(18) I'd made her some coffee the way she liked it: **black** **as** **tar**,…,

(18)は N1 の”coffee”と N2 の *tar* の質感が実際に近いというわけではなく、かなり強調しているが、*tar* の thickness という特徴を利用して”coffee” の濃さを効果的に伝えている。

この 4 パターンは必ずしも N2 の印象を弱めるものではなく、むしろ強めることがある。4.2 節に提示した例にもこのレトリックは使われており、また、(17)は “dainty”という言葉から、はっきりと肯定的な文章だと判断できる。重なり合うのは、レトリックを使用した場合も 4.2 節の例と同様に、人間の知覚や習慣が影響していることを示している。また、これらの修辞的使用の例の方が、人間の五感やカテゴリーといった基本的な経験が強く表れていると言える。

6. まとめと課題

本稿では色彩語を含む強意直喩表現の N2 の語彙について、どのような違いがあり、どのように N2 の言葉を使い分けるのかという問いを立て、先行研究で軽視されていた N1 と文脈に着目して考察をした。N2 には、人間の文化や習慣によって作られた様々な印象があり、そこからさらに比喩義や象徴が生まれることもある。使用者が N1 をどう捉えるかによって、その N1 や文脈に最もよく合致する印象をもつ言葉を vehicle に選ぶと考えられる。また、特に修辞的使用においては、人間の基本的な感覚や経験を反映した表現となる。強意直喩表現の主な意味は形容詞、本研究では色彩語であるが、色だけではなく様々な要素を比較した上で N2 は選ばれる。この比較は N1 と文脈、N2 が結びついていることを示唆する。

最後に、研究の課題を 3 つ指摘する。まず 1 つ目に、分析において通時的視点が欠如していることである。慣用化すると N2 の効果が薄まることを指摘したが、どの N2 にそれが生じているのかを確認していない。2 つ目に、肯定・否定に分類した例には、用例数が少ないものがあるので、確実な使用傾向とは言えない。また、強意直喩は文学作品に多用されるという性質上、文脈を肯定・否定のどちらかに二分するのは限界がある。3 つ目は、yellow を含む否定的な表現 についてである。病気によって顔色が悪い様、歯が黄色い様子、臆病さなどを表す傾向があるものの、N2 がどのように選択されるのかは把握できなかったため、vehicle の相違を明らかにする必要がある。

謝辞

本稿は、筆者が 2021 年 1 月に大阪大学大学院言語文化研究科に提出した修士論文 *An Analysis of Intensifying Similes with Color Adjectives in English — The Relation between Context and Vehicle —* の一部を抜粋、修正をしたものである。論文の執筆にあたり、大森文子教授、渡辺秀樹教授からは多くのご指導をいただきました。また、同大学院とコーパス研究会の先生方と学生の皆様も、たくさんのご助言・ご指摘をくださいました。感謝申し上げます。

参考文献

Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic Color Terms, their universality and evolution*. Berkley: University of California Press.

Biggam, C.P. (2015). ‘English colour terms: A case study’, in C. Kay and K. Allan (ed.), *English Historical Semantics*, Edinburgh: Edinburgh University Press Ltd, 113 – 131.

Carter, R. (2004). *Language and Creativity: The Art of Common Talk*. London: Routledge.

Hutchings, J. (2004). “Colour in folklore and tradition−The principles”, *Color Research & Application*, 29(1), 57-66.

Lakoff, G. & M. Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G.& M. Turner. (1989). *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lindquist, H. (2009). *Corpus linguistics and the description of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳(2016).『英語コーパスを活用した言語研究』. 東京：大修館書店.)

Moon, R. (2008). “Conventionalized as-similes in English: A problem case”, *International Journal of Corpus Linguistics*, 13(1), 3-37.

Mylonas, D. & L. MacDonald. (2016). “Augmenting Basic Colour Terms in English,” *Color Research and Application,* 41, 32-42.

Novoselec, Z., & J. Parizoska. (2012). ‘A corpus-based study of similes and cognate adjectival forms in English, Swedish and Croatian’, in A. P. Bertrán, J. M. P. Bretaña, and L. L. Nadal (ed.), *Phraseology and Discourse: Cross Linguistics and Corpus-based Approaches*, Baltmannsweiler : Schneider Verlag Hohengehren, 101-110.

Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.

Svartengren, T. H. (1918). *Intensifying Similes in English.* Lund: Gleerupska.

Tartakovsky, R., Fishelov, D., & Shen, Y. (2019). “Not as clear as day: On irony, humor, and poeticity in the closed simile,” *Metaphor and Symbol*, 34(3), 185-196.
Wierzbicka, A. (1990). “The meaning of color terms: semantics, culture, and cognition,” *Cognitive Linguistics* 1-1, 99-150.
Wyler, S. (1992). *Colour and Language: Colour Terms in English*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
上村和美. (1999). 『文学作品にみる色彩表現分析-芥川龍之介作品への適用』. 東京: 双文社出版
小原真子. (2016) .「英語の色彩語について ： コーパスのデータを中心に」.『島大言語文化 ： 島根大学法文学部紀要』第 41 号, 47-64.
坂本真樹. (2007). 「色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討」. 『メタファー研究の最前線』. 東京：ひつじ書房.
須賀川誠三. (1999). 『英語色彩語の意味と比喩—歴史的研究』. 東京：成美堂.
瀬戸賢一. (1997). 『認識のレトリック』. 東京：海鳴社.
新妻明子. (2013) 「心的状態を表す英語の色彩語メタファー ： 認知意味論に基づく意味拡張のプロセス」『常葉大学短期大学部紀要』第 44 号, 47-62.
橋本邦彦. (2004).「シミリーと関連性から見た伝達機能 」.『認知科学研究』第 2 号, 36- 58.
福田邦夫 . (1994). 『ヨーロッパの伝統色—色の小辞典』.東京：読売新聞社.
ー . (1999). 『色の名前はどこからきたか—その意味と文化』 東京：青娥書房.
ー . (2017). 『色の名前事典 507 』. 東京：主婦の友社.

辞書・コーパス
『ジーニアス英和大辞典』 KONISHI Tomoshichi, MINAMIDE Kosei and Taishukan, 2001 -2011
『ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』 Shogakukan Inc., 1973,1994, and Random House, 1987.
Oxford English Dictionary. Oxford University Press, 2020. (https://www.oed.com)
Corpus of Contemporary American English. (http://corpus.byu.edu/coca/)

Logical Positivism, Metaphor, and (Non)Cognitivism

Luke Malik
lukemalikosaka@lang.osaka-u.ac.jp, lukemalikosaka@gmail.com

Introduction

The view that knowledge is dependent on the senses is called empiricism. From there it isn't very far to an empirical theory of meaning.[1] In modern times, the view has had many advocates and has led to several related theories of meaning. Early in that century, advances in the understanding of formal languages began to influence what research focused on and the way such research was conducted. Married to the empiricist stance, this gave rise to logical empiricism or logical positivism. Logical positivists focused a lot on linguistic phenomena. Metaphor (often) takes a linguistic form. So we might expect positivists to have turned their attention to it. While no lengthy consideration of linguistic metaphor exists, they did, at times, treat it if only indirectly. Assuming the logical positivist's treatment of metaphor amounts to a positivist theory of metaphor, what kind of theory is it? One way to describe the positivists' discussion of metaphor is to call it a non-cognitivist treatment of metaphor. Thus, a positivist theory of metaphor would be a non-cognitivist theory of metaphor. But what does this mean? In this paper, I hope to do two things: First, I aim to define several ways in which a theory of metaphor can be described as non-cognitivist. These definitions draw on positivist literature in the same way as non-cognitivist theories of ethics or aesthetics draw on positivist literature in grounding the sense in which they are seen as cognitivist or not cognitivist. Second, I thereby aim to classify the positivist theory of metaphor in terms of the definitions provided. It turns out there is only one clear sense in which the said theory of metaphor can be described as non-cognitivist, but several senses in which it cannot. The discussion leads to a positivist based contextualisation of metaphor that is flexible and not inconsistent with many contemporary claims made regarding the relationship between literal meaning and metaphor related phenomena. To end I make the following points. First, given the conclusions drawn, the positivist treatment of ethics is different to the positivist treatment of metaphor. Second, it is unclear whether definitions of the cognitive/non-cognitive distinction based on the historical progress of psychology through the 20th century undermine anything that has been said.

To start, I say more about the kind of positivism that is going to be relevant to us. Next, I define the senses in which the theory might be thought of as cognitivist or non-cognitivist. There are three senses of the cognitivist/non-cognitivist distinction to introduce. Based on key positivist claims and interpretations, I argue that a positivist theory of metaphor is clearly non-cognitivist in only one of these senses. The most charitable interpretation is given to the kind of positivism in question and, therefore, when problems arise, where possible, an effort is made to resolve them. Ultimately, this leads to a contextualisation of the theory in question making it interpretable in a way that is not inconsistent with contemporary empirical findings. In a last section, I point out a difference between the non-cognitivist claims made for a positivistic theory of ethics and the non-cognitivist description of the positivist treatment of metaphor. I end by introducing a sense of the cognitive/distinction that is based on a historical treatment of psychology. I argue this does not undermine the argument made. None of this amounts to advocating the positivist position. Rather, it amounts to a clarification of one historical treatment of metaphor.

Logical Positivism, Introduction

Logical positivism is associated with verificationism. For logical positivists, sentences are either analytic or synthetic. The analytic/synthetic dichotomy divides sentences into two types and is referred by positivists like A

[1] Indeed, it appears, one can go from a classic empirical stance quite quickly to the kind of positivism considered here (see discussion in Blandford 1999).

J Ayer (1936) to Immanuel Kant (1781). According to Ayer, Kant did not succeeded in making the distinction clear. However, positivists like Ayer did adopt the distinction. Ayer writes:

> I think that we can preserve the logical import of Kant's distinction between analytic and synthetic propositions, while avoiding the confusions which mar his actual account, if we say that a proposition is analytic when its validity depends solely on the definitions of the symbols it contains, and synthetic when its validity is determined by the facts of experience (Ayer 1936, 42-43)

Examples of the distinction are provided below:

(1) A square is a shape that has four sides of equal length and four right-angles

(2) It is raining outside

The truth of an analytic sentence (or sentence that expresses an analytic proposition) can be established by attending to the meanings of the words alone. (1) is an example. The truth of a synthetic sentence (or sentence that expresses a synthetic proposition) cannot be established by attending to the meanings of the words alone. Its truth is established by attending to the empirical facts. (2) is an example. Though the distinction seems somewhat intuitive, the analytic-synthetic classification is rather difficult to pin down (Hempel 1965). Some have rejected it outright (Quine 1953, 1960). Though others have been more supportive of it (Grice and Strawson 1956). Positivists adopted it.

For positivists the meaning of a sentence that is not analytic is associated with verification. One way to introduce the basic idea behind verification is as follows. A J Ayer writes that "[N]o statement which refers to a 'reality' transcending the limits of sense-experience can possibly have any literal significance" (Ayer 1936, 5). This quite naturally leads to verificationism. For it means that any statement that is literally meaningful is a statement that does not refer to a reality that transcends sense-experience. Given that such a reality is naturally open to the senses, it is open to being verified by the senses. Thus, it follows that any literally meaningful statement is open to sensible verification. Perhaps, too, it is appealing to think that if a statement can be verified by the senses, it is literally significant. Now, this looks like a biconditional is taking form. This gives the kind of positivism in question a logical form and suggests a criterion of meaning. Formalised, this comes to be known as the verification principle.

But we can note, problems have dogged this type of positivism. The most well-known of the complaints against positivism in this form is that the verification principle is self-refuting (Feuer 1951). Indeed, most criticisms centre upon the verification principle itself. For example, consider Carl Hempel (1965). Hempel introduced a version of the principle like this (the "observation sentences" in question are supposed to describe potentially observable phenomena or observable states of affairs):

> A sentence has empirical meaning if and only if it is not analytical and it follows logically from some finite and logically consistent class of observation sentences (Hempel 1965, 104)

Hempel set about demolishing the principle. He argues the principle is too restrictive because it rules out sentences that include universal claims but, at the same time, too liberal because it rules in metaphysical statements of the kind positivists had hoped to eliminate. He claims attempts to revise the principle have fared no better. They seem to render any statement whatsoever meaningful (see also Church 1949). In response Hempel wonders whether it would not be better to start by connecting extralogical subsentential expressions to observable

phenomena. A sentence composed of such terms would be empirically meaningful. This, too, is rejected on the basis that an extensional way of defining dispositions can't be found,[2] and dispositional terms are essential to the scientific understanding of the world—which positivism advocates for.[3]

Is there anything in favour of this form of positivism? Perhaps. It seems intuitively attractive. Indeed, for the positivist, it is completely natural (Schlick 1932, 32). It is, also, said to be presupposed by the scientific method (Schlick 1932, 38). This should appeal to more contemporary students of metaphor. For example, consider conceptual metaphor theory (CMT). A clear sense in which CMT theorists are positivist is in their advocacy of the empirical method. In a sense, CMT theorists are more true to the empirical method than positivists. Positivists did not apply it to the understanding of literal meaning. CMT theorists do apply it to the study of metaphorical phenomena (Gibbs 2008). A second sense in which CMT theorists are empiricists is in making the sensible the ground of meaning. For positivists, it is the source of literal meaning. For CMT theorists, it is, in many cases, the source of metaphorical meaning. For example, Kövecses says, "Our experiences with the physical world serve as a natural and logical foundation for the comprehension of more abstract domains (Kövecses 2010, 7). There are also suggestions that it is the basic source of basic metaphorical schema.[4] Nevertheless, positivists and CMT theories differ in a major respect. Positivism, it is thought, leads to a non-cognitivist theory of metaphor. CMT is resolutely cognitivist (e.g. Knowles & Moon 2006, p. 69). And now we are led to ask, what is it for a theory of metaphor to be called "non-cognitive"? As said, I will introduce three senses and argue that only in one sense is the positivist treatment of metaphor not cognitivist. Further, I will argue that this does not put it at odds with some claims made by contemporary researchers against philosophical treatments of metaphor.

Logical Positivism, Non-Cognitivism (1)

Positivism of the kind in question is taken to lead to a non-cognitivist perspective on metaphor. Non-cognitivism is to be contrasted to cognitivism. What exactly are non-cognitivist and cognitivist theories of metaphor?

In the most common view, non-cognitivism is a label applied to theories of metaphor that deny metaphorical meaning. Sentences or their utterances, it is said, do not have metaphorical meanings. Another way of putting

---

[2] Today, intensional definitions of dispositional terms is favoured. At the time, Hempel rejected this due underdeveloped nature of intensional approaches to meaning (Choi & Fara 2013).

[3] These are not the only problems with verificationism. For example, the verification principle tells us that some statements are meaningless, but they appear meaningful. For example, religious statements and even some scientific statements (see Woit 2007). Some have wondered whether prior to applying the verification principle to a sentence (or deciding whether or not it can be applied), the meaning of the sentence needs to be understood (c.f. Berlin 1938). A last problem to mention is the problem of compositionality. Consider the following set of sentences:

(i) There are brown chocolate **nibs** on your plate
(ii) There are no brown chocolate **nibs** on your plate

Suppose a sentence has meaning iff all of its component expressions have meaning (e.g. morpheme, word, phrase, etc.) This is often called the "principle of compositionality." Suppose one doesn't know the meaning of the expression "nibs" (in bold above). Suppose, next, one examines one's plate and finds nothing there. One has falsified (i) without knowing the meaning of (i). Indeed, one has falsified (i) without knowing what would make (i) true. A similar story can be told for (ii). Given the assumptions in question, one may verify the truth of (ii) without knowing the meaning of (ii), and that without knowing what would make (ii) false. A response might be this. If a sentence is open to verification by the senses, then it can be shown to be either true or false. If a sentence can be shown to be either true or false, the sentence is literally meaningful. Since in both cases above, the disjunction holds, the path from verification to literal meaning is secured. But, given the first supposition, this renders the principle of compositionality false. This is a problem for many philosophers of language and semanticists.

[4] For example, see Mark Johnson introducing a suggestion made by Chris Johnson (1997) re the acquisition of basic metaphorical structure, Chris Johnson's theory suggests babies go through two pertinent stages. First, there is the "conflation" stage, followed by the "differentiation" stage. Babies, for example, held by their careers will experience affection and warmth. Affection and warmth are conflated. Later, the two are differentiated. At this stage, the application of temperature to affection becomes metaphorical. (Johnson 2017, 111).

this is to say non-cognitivist theory denies that there is *propositional* content over and above *literal* propositional content.

To give an example, we can consider a well-known theory of metaphor. One of the oldest theories of metaphor is the comparison theory of metaphor. Metaphors are comparisons. One of the most notorious versions of this theory is the simile theory of meaning. One version of this theory is non-cognitivist. To understand it, consider the following sentence:

(3) Richard is a lion

The literal simile theory of meaning says that (3) is elliptical, which we may represent like so:

(4) Richard is...a lion

Filling in the ellipsis gives us the meaning of (3), which is:

(5) Richard is like a lion

The latter sentence is the literal meaning of (3). It is not the metaphorical meaning of (3), since (3) is just the elliptical version of (5). Assume for a moment that for any metaphor, such a reduction can be engineered (this is unlikely, see Tirrell 1991). On this assumption, there are no metaphorical meanings, there are only literal meanings. This, then, is a non-cognitivist theory of metaphor.

In contrast, consider what we will refer to as a substitution theory of metaphor. It is cognitivist. In its simplest form, the meaning that (3) expresses, in the metaphorical context, is the following:

(6) Richard is brave

Another way of saying this is (6) paraphrases (3). It is not the literal paraphrase of (3). It is the metaphorical paraphrase of (3). It does not paraphrase the literal proposition expressed by (3). It paraphrases the metaphorical proposition expressed by (3). This is a cognitivist theory of metaphor.

It is the contention that a positivist theory of metaphor is not of this type, but of the previous non-cognitivist type. For positivism only allows for literal propositional content. This first sense of cognitivism, I shall denote by adding a subscript character to the expressions in question, giving us a dichotomy: cognitivism$_M$ vs. non-cognitivism$_M$. The subscripted "M" highlights that we are talking about this kind of cognitivism (that type contingent on metaphorical meaning or propositionality). The literal simile theory of metaphor is non-cognitivist$_M$ but the contrasted substitution theory is cognitivist$_M$. Most importantly for us, the positivist theory of metaphor is non-cognitivist$_M$.

Logical Positivism, Non-Cognitivism (2)

It has been said that a positivist theory of metaphor is non-cognitivist in the sense that it eschews metaphorical meanings or propositions. But there is another sense of non-cognitivism that a positivist theory of metaphor does not entail. This is explained below.

For logical positivists, it is contended, only one sort of meaning matters. Hilary Putnam summarises like this:

> [A]ccording to the logical positivists, the 'scientific method' exhausts rationality itself, and testability by that method exhausts meaningfulness ('The meaning of a sentence is its method of verification'), the

> list or canon would determine what is and what is not a cognitively meaningful statement. Statements testable by the methods in this list (the methods of mathematics, logic and the empirical sciences) would count as meaningful; all other statements, the positivists maintained, are 'pseudo-statements', or disguised nonsense (Putnam 1982, p. 105).

There are some things to highlight here. First, the type of meaning in question is linguistic. Second, positivists want to determine cognitive meaning. And since they are interested in linguistic meaning, they want to determine the cognitive meaning of a linguistic unit (above a sentence or statement). Third, empirical testability (or mathematical or logical methods) are individually sufficient for cognitive meaning. The joint negation of the three is sufficient for cognitive meaninglessness. The applicability of the methods in question establish when a sentence or its use has cognitive meaning or not. Last, then, putting the mathematical or logical methods to one side, it is empirical testability that is *the* measure of cognitive meaning or meaningfulness. Thus, we might say, if a sentence is empirically testable, then it has cognitive meaning, and thus the sentence has linguistic meaning. On the other hand, if the sentence is not empirically testable, it has no cognitive meaning, and, therefore, has no linguistic meaning, i.e. it is linguistic nonsense. Cognitive significance or meaning is equivalent to empirical testability (if not mathematical or logical verification). We have seen problems with this kind of principle above, but let us assume that in some sense it is correct.

We, now, seem to have a problem. We have said that a non-cognitivist theory of metaphor denies metaphorical meaning. And, we have seen that the literal simile theory is one such theory as opposed to the substitution view. And, we have noted that the positivist view is supposed to lead to a non-cognitivist view of metaphor. But, if cognitive meaning is equivalent to empirical testing (when not open to mathematical and logical methods), no theory entails the non-cognitivist outcome. What's worse, if denying metaphorical propositionality entails non-cognitivism, then the literal simile theory and the positivist theory lead to confusion. Let me explain.

Consider the literal simile theory. It was said to be a non-cognitivist theory of metaphor. It was said to be a non-cognitivist theory of metaphor because there was said to be no metaphorical content over and above a sentence's literal content. So the sentence:

(7) Richard is a lion

in its non-elliptical form is:

(8) Richard is like a lion

If, as far as the sentence in question is concerned, cognitive meaning is equivalent to empirical testability, then (7) has cognitive meaning. For any sentence, *M*, of the form:

(9) X is Y

if equivalent to:

(10) X is like Y

where both X and Y terms refer to empirical phenomena, *M* is cognitively significant. Thus, literal simile theory cannot entail non-cognitivism.[5]

The same goes for a positivist theory of metaphor. The senses can verify the truth of (7). If, then, the literal simile theory and the positivist way of treating (7) are non-cognitivist because they do not allow for nonliteral propositions, but cognitivist because (7) can be empirically tested, both views lead to contradiction. Our concern is the positivist theory.

It seems the fault lies with confusing two different ideas of non-cognitivism. The first notion has it that if a theory of metaphor denies a sentence like (7) metaphorical meaning, then the theory of metaphor is non-cognitivist. The second notion has it that a sentence like (7) is cognitively meaningless iff it lacks empirical testability (ignoring one of the other types). We must reject one of these senses of non-cognitivism or accept both as two different and distinct senses of non-cognitivism.

Adopting this latter course, leads to a set of divisions explicable in the following way. The first sense of non-cognitivism denies *metaphorical* meaning to a typical sentence. Any theory that denies metaphorical meaning to sentences like (7) is a non-cognitivist theory. The second sense of non-cognitivism denies *literal* meaning to a typical sentence on condition it is not empirically testable (nor susceptible to mathematical or logical methods). A theory that denies literal meaning to sentences in *that* way also divides cognitively significant from non-cognitively significant sentences. And only if the theory denies literal meaning to all sentences like (7) is it non-cognitivist in this sense. Thus, a positivist theory may be non-cognitivist in the first sense, but not in the second sense, since it (a) rules out metaphorical meaning; but (b) allows for sentences like (7) to have cognitive significance or be cognitively meaningful.

Other theorists have charted a similar course. However, they have done so in order to take up a position that is contrary to positivism. For example, for John Searle (1979) a sentence may be literally meaningless but its utterance metaphorically meaningful. Writing on literal meaning, Searle says:

> A sentence may have more than one literal meaning (ambiguity) or its literal meaning may be defective or uninterpretable (nonsense) (Searle, 1979b, 117).

Writing on metaphor, he tells us this:

> Even when we discuss how a nonsense sentence, such as Chomsky's [1957] example, "Colourless green ideas sleep furiously", could be given a metaphorical interpretation, what we are talking about is how the speaker could utter the sentence and mean something by it metaphorically, even though it is literally nonsensical (Searle, 1979a, 77).

Of course, Searle is telling us a different story to the one that the positivist wants to tell us. But there is an important point here. Meaning can be divided between literal propositionality and metaphorical propositionality. For Searle, sentences may have or lack the former whilst their utterances possess or lack the latter. For the positivist, the metaphorical set is just empty.

Drawing directly on positivist writing, there is reason to think metaphorical sentences are to be treated in the manner discussed; *some are cognitively significant* (in the literal sense), entailing a positivist theory of metaphor which is not fully or automatically non-cognitivist (in the literal sense). Consider these remarks from A J Ayer's *Language, Truth, and Logic*:

---

[5] Indeed, in most cases, if not all, the sentences in question will be literally true since everything is like everything else in some respect (Davidson 1978).

> In the vast majority of cases the sentences which are produced by poets *do* have literal meaning… [T]o say that many literary works are largely composed of falsehoods, is not to say that they are composed of pseudo-propositions….If the author writes nonsense, it is because he considers it most suitable for bringing about the effects for which his writing is designed (Ayer 1936, 14)

We can suppose that the poets that Ayer has in mind use metaphor and some of the sentences that Ayer is referring to are sentences that are metaphorical. Supposing too that literal significance and cognitive significance are synonymous, Ayer's comments then suggest that not all sentences used metaphorically imply nonsense. Which ones? The obvious answer is those that are literally false, for example, (7). But, moreover, there are sentences that are literally true that are used to bring about the effects that an author is taking aim at. For example,

(11) The man is an ape[6]

used to insult the man.

There are reasons, then, to divide between two senses of cognitivism. The first sense, I have said, I shall denote by adding a subscript: cognitivist$_M$ vs. non-cognitivist$_M$. The second sense, I shall denote by adding a subscript: cognitivist$_L$ vs. non-cognitivist$_L$. The subscripts denote the kind of meaning that is denied to a sentence. The former denies metaphorical propositionality or meaning. The latter, literal propositionality or meaning. There are reasons to think a further sense of cognitivism is called for.

Logical Positivism, Non-Cognitivism (3)

Thus far, two kinds of non-cognitivism have been identified. There is the type that denies that there are *metaphorical* propositions. There is the type that denies that there are *literal* propositions (based on the lack of empirical or formal verification methods). Sentences that are metaphorical, it seems, are non-cognitivist in the first sense. But they need not be non-cognitivist in the second sense ((7) and (11) give us examples of this).

There are positivists who seem to demand a harder line. Consider Rudolf Carnap (1935). He says,

> The aim of a lyrical poem in which occur the words "sunshine" and "clouds" is not to inform us of certain meteorological facts, but to express feelings of the poet and to excite similar feelings in us. A lyrical poem has no assertive sense, nor theoretical sense, it does not contain knowledge (Carnap 1935, 29)

I will assume complete sentences that appear in lyrical poems can be thought of as metaphorical. For example,

(12)A little cloud stood lonely (Ruby Archer)

This is a sentence that appears in a poem and one that we might call metaphorical. Clouds do not stand and clouds do not feel lonely. According to Carnap, then, the aim of this lyric is not to inform us of anything, but, rather, to

[6] It is difficult to see how CMT theorists can explain this kind of metaphor. CMT holds that a linguistic metaphor, for example, *a is b* is an exemplar of a deeper cognitive relation *A IS B* (capitalisation signifying that it is concepts we are discussing). *A* is called the target. *B* is called the source. Elements of *A* are understood through elements of *B*, exemplified by the linguistic metaphor *a is b*. Elements of *A* belong to one conceptual domain. Elements of *B* belong to another conceptual domain. Target domain and source domain are alien to each other. In most cases, something less concrete is understood in terms that apply to something more concrete, where what is most concrete is something that is sensible and found in one's environment. But, in the case cited, what is the conceptual metaphor? Perhaps, the conceptual metaphor is *HUMANS ARE ANIMALS*. The target domain is neither alien to the source domain nor more abstract.

express, incite, and excite. What Carnap means to say, with respect to our sentence, is that the sentence is not used to inform us about anything.[7] Rather, it is used to express the feelings of the author and excite those same feelings in the audience. This draws out a distinction, between two different kinds of functionality (and related effect), which for the time being we will refer to as simply "cognitive" and "non-cognitive."

In terms of the effects that Ayer has mentioned above, cognitive effect may be distinguished from a non-cognitive effect in the following sense. Cognitive effects are related to shifts in thoughts and beliefs. This suggests they are likely propositional. Non-cognitive effects are related to shifts in attitudes, emotions, feelings, moods, and motivations. They are non-propositional in this sense.

But, also, we are not only talking about cognitive and non-cognitive functionality and effect, but meaning. That is, cognitive and non-cognitive *meaning*. Whilst attacking metaphysical statements, Carnap says this:

> Today we distinguish various kinds of meaning, in particular cognitive (designative, referential) meaning on the one hand, and *non-cognitive (expressive) meaning components*, e.g. emotive and motivative, on the other. In the present paper, the word "meaning" is always understood in the sense of "cognitive meaning." The thesis that the sentences of metaphysics are meaningless, is thus to be understood in the sense that they have no cognitive meaning, no assertive content. The obvious psychological fact that they have expressive meaning is thereby not denied; this is explicitly stated in Section 7 (Carnap 1931, 80-81, my italics).

Carnap, then, accepts distinct kinds of meaning. There is cognitive meaning, associated with a designative, referential function. There is expressive meaning, which is associated with emotive and motivative functions. This is an "obvious psychology fact"—at least, one that *Carnap* can agree with. So far as the sentences of metaphysics are concerned, they do not have a cognitive meaning, though they may have expressive meaning. For Carnap, the lyrical verse associated above with the poets have an affinity to metaphysical statements.

> Metaphysical [statements]—*like lyrical verses*—have only an expressive function, but no representative function. Metaphysical statements are neither true nor false, because they assert nothing, they contain neither knowledge nor error, they lie completely outside the field of knowledge, of theory, outside the discussion of truth or falsehood. But they are, like laughing, lyrics, and music, expressive. (Carnap 1935, 29)

Assuming again that lyrical verse incorporates metaphor, given the passage, we may conclude: metaphor only has an expressive function; does not have a representative function; is not true, nor false; asserts nothing; contains no knowledge; contains no error; has no relation to knowledge, no relation to theory; is expressive; and is rather like laughing, crying, and music. To sum up, the sentences in question have an expressive function, but lack a cognitive function. But just as important, given the previous passage, the verses or sentences in question can be thought to be significant in the non-cognitive sense even if they lack cognitive significance.

There is, then, significance and functionality (and effect) to incorporate into the positivist picture. Along the significance dimension, we have cognitive and expressive significance, which we can read as two distinct types of meaning. The one is cognitive meaning. The other, which we have seen Carnap endorse, is "expressive meaning." This we have referred to as non-cognitive meaning. Along the functionality dimension, we have cognitive functionality and expressive, or non-cognitive, functionality. The poet who uses expressions like "cloud" and "sunshine" to say nothing about the weather, is not using the expressions in question cognitively, but expressively. The effect of these sentences is on the non-cognitive centres of the mind.

[7] Lyric verses or sentences do not have aims.

Perhaps, the positivist that speaks most clearly to this end is the meta-ethicist C L Stevenson. Stevenson has the view that there are two kinds of meaning that matter: descriptive and emotive. Stevenson also identifies two kinds of use (function and associated effect, in the vocabulary above). There are descriptive uses and dynamic uses. Let's think about meaning first.

Descriptive meaning is invariant with respect to individual psychology and context, and, at the level of the sentence, it is propositional (Stevenson 1937). Emotive meaning is referred, by Stevenson (1937), to Ogden and Richards (1923). Basically, emotive meaning is symbolically vacuous (Ogden and Richards 1923, 125) or non-referential. We may suppose this to mean that it is semantically or linguistically vacuous. According to Ogden and Richards, the archetype is the expression "good." It is, they suggest, somewhat polysemic. But in its ethical constituency, it is wholly emotive. So consider the following set of sentences:

(13)This is red

(14)This is good (said in an ethical context)

For Ogden and Richards, the predicate in (13) is symbolically significant. But the predicate in (14) is not. If we suppose this to mean that the predicate in (14) is semantically vacuous, we can see how it might render the sentence in question meaningless. Following a Fregean line of thought, today, many prominent systems of semantic representation take predicates to denote functions (e.g. Heim & Kratzer 1998). But if the predicate in (14) is semantically vacuous, then it denotes nothing and (14), itself, is classified as *undefined*. That is, it, too, lacks a denotative sense. In other words the sentence is semantically meaningless. This rings true for the positivist. Rather, the expression is associated with a somewhat *persistent tendency* to reflect and produce non-cognitive responses in the speaker-hearer (Stevenson 1937, 23). As said, the archetype is the expression "good." Stevenson builds a whole meta-ethical positivist theory based on this line of reasoning. In any case, what is important here is the idea that an expression like (the ethical) "good" can lack semantic value, yet be said to possess a *meaning* where such meaning is just *the tendency to reflect and effect non-cognitive responses in the respective speaker and hearer*.

What of functionality? Non-dynamic descriptive uses track descriptive meanings. The use of a sentence, for example, to ascribe a light-reflecting object a colour, is descriptive. Dynamic use aims for emotive effect. We might say, adopting the language above, non-dynamic uses have a cognitive function and aim for cognitive effects. Dynamic uses have non-cognitive functions and aim for non-cognitive effects. Importantly, Stevenson suggests that meaning and use are not equivalent. Emotive meaning does not demand a dynamic use since an expression can possess the tendency in question even if it is not used dynamically. In turn, we can envisage circumstances in which an expression is used dynamically, but lacks the tendency to reflect and produce non-cognitive effects. Though such an effect may emerge contextually. For example, it is not too difficult to see how a sentence that is true can be used non-cognitively (see (11) above and (15) below). Stevenson is very sensitive to the contextual nature of use and the shifts in function and effect that this produces. This is one reason he eschews any reduction of meaning to use (Stevenson 1937, 22).

Having denied the equivalence between emotive meaning and dynamic use, or non-cognitive meaning and non-cognitive functionality-effect, we note that Stevenson does stress that emotive meaning is well-suited to reflecting and producing non-cognitive results (Stevenson 1937, 23). In fact, it can be so well-suited that a non-cognitive function-effect can be hard to suppress. Stevenson's example is somewhat dated (if interested see Stevenson 1937, 23). Likewise, we can see how an expression is so well-suited to describing the facts that it is difficult to see how it might take on a non-cognitive function-effect.

We are talking about cognitive significance and cognitive functionality, on the one hand; and, non-cognitive significance and functionality, on the other. We can draw on psychological definitions to reframe what we are calling non-cognitive significance and functionality. To do this, I draw upon contemporary definitions provided by the American Psychological Association:

- Cognition: All forms of knowing and awareness, such as perceiving, conceiving, remembering, reasoning, judging, imagining, and problem solving (APA Dictionary, 2020).

- Affect: Any experience of feeling or emotion, ranging from suffering to elation, from the simplest to the most complex sensations of feeling, and from the most normal to the most pathological emotional reactions...both mood and emotion are considered affective states (APA Dictionary, 2020).

- Conation: The proactive (as opposed to habitual) part of motivation that connects knowledge, affect, drives, desires, and instinct to behaviours (APA Dictionary, 2020).

We may use these definitions to make sense of what the positivists are saying. Poetical sentences and lyrics, following Ayer, may have cognitive significance. Following Carnap, they do not have cognitive function, which we now take to mean they do *not* produce a cognitive effect. Rather, they have affective-conative functionality and effect. That is, they act on the affective-conative centres of the mind—expressing and inspiring emotion and motivating behaviours or connecting affect to cognition. This runs parallel to Stevenson. The descriptive meanings he talks of are cognitive. The emotive meanings affective-conative defined by tendencies to produce affective-conative effects. Likewise, the non-dynamic uses, we can think of as cognitive uses associated with cognitive functions and effects; the dynamic uses, we associate with affective-conative functions and effects. But, now, this is very important for the development of our understanding. For if the sentences that we are considering do not *directly* connect to the cognitive centres of the mind, they may *indirectly* do so. Why? Simply enough because they have conative functionality-effect, and, as defined, conation can connect affect to cognition. This is evidentially true when we consider a word like the ethical "good." The positivists believe it is cognitively insignificant. This is a belief. Evidentially, therefore, there is a route from its dynamic meaning and force to a cognitive effect (e.g. the belief).

The positivists, then, allow for linguistic uses that lead to different psychological outcomes. There are cognitive effects, on the one hand, and non-cognitive affective-conative effects, on the other. These may be defined as we have defined them above, psychologically. One aspect of the functionality-effect in question (the conative) may connect circuitously to the cognitive.

But, now, it seems there may be three senses in which a theory of metaphor may be called non-cognitivist: metaphorical, literal, psychological. In the first sense, the theory denies that metaphorical sentences or utterances have metaphorical meaning. In the second sense, the theory denies that metaphorical sentences or utterances have literal meaning. In the last sense, the theory denies that metaphorical sentences or utterances have cognitive functions-effects. The positivist is clearly non-cognitivist in the first sense; there are no metaphorical meanings--no nonliteral propositionality. The positivist is not non-cognitivist in the second sense to the extent positivism does not entail denying literal meaning to sentences that are used metaphorically. Though, such sentences, in the metaphorical context, for example, that of a poem, may not be used with a cognitive function-effect in mind. The positivist is not non-cognitivist in the last sense. A sentence may, lacking emotive sense in ordinary contexts, register cognitively, even when used in Stevenson's more dynamic sense. (11) is an example. In another sense, the most important sense, if a sentence is used with a non-cognitive function-effect in mind and it succeeds in realising its affective-conative function, it may trigger a cognitive response given the connective nature of the

conative faculty whether or not it has cognitive significance in any other sense. It is, that is, cognitively significant circuitously.

Let us add, then, a further sense of the cognitive/non-cognitive division to our list. First, we talked of a cognitive$_M$/non-cognitive$_M$ divide. Next, we introduced a cognitive$_L$/non-cognitive$_L$ duality. We may, given the discussion above, introduce a third, the cognitive$_P$ vs non-cognitive$_P$ distinction. Here the subscript emphasises the psychological underpinnings. Given this, it is being argued that a positivist theory of metaphor is non-cognitive$_M$, but nothing entails that it is non-cognitive$_L$ or that it is non-cognitive$_P$. Yet, there is a lingering issue. We seem to have ignored Carnap's claim that lyric verse, and, thus, metaphor is to be thought of as cognitively insignificant. In which sense does he mean?

Logical Positivism, Cognitive$_L$, Sous Rature

The positivist wishes to eject metaphysical sentences from scientific discourse. This is because they are not cognitively significant. Carnap thinks lyrical verses are like metaphysical sentences. They, too, lack cognitive significance. Assuming lyrical verse includes metaphor, we can conclude metaphor lacks cognitive significance. But I have just argued that metaphor does not lack cognitive$_L$ significance in many cases, and that so far as it has affective-conative meaning it may not lack cognitive$_P$ significance. But Carnap cannot just be saying metaphor lacks cognitive$_M$ significance. So, ultimately, there is a claim attributable to Carnap to explain, lyrical verse and, therefore, metaphor is cognitively insignificant. If that means it is not cognitively$_L$ significant, his claim looks like it is inconsistent with the conclusions drawn. (We can accept that the kind of sentence in question is not directly cognitively$_P$ significant, but circuitously so.) Since the conclusions are based on positivist writings and scientific assumptions, this puts Carnap and odds with his own project. I have said, I want to present the positivist in the best possible light. If we want to pursue that charitable line, we must find some way to make Carnap's claims consistent with the conclusions that we have drawn. Is there a way to do this? I think so. The apparent inconsistency is not a knockout blow at all.

One way to establish consistency is to adopt the following position. The basic idea is that a sentence such as

(15)It is raining

is disposed to have a certain cognitive$_L$ significance (factoring for ambiguity or polysemy) in a context of use given certain contextual factors (pertaining to the use of literality), but that such significance can be erased by certain other contextual factors. Recall, Carnap says that when expressions like "cloud" and "sunshine" do not aim to inform us about the meteorological facts, they lack cognitive significance. I will now suppose that Carnap means that when they are not *used* or do not *function* to inform us about the meteorological facts, they lack *cognitive$_L$ significance.*[8] We can then suppose that some of the contextual factors that erase cognitive$_L$ significance are related to use or function. For the positivist it needn't follow that there is any other meaning that replaces the erased meaning. In this sense, we think of the sentence as meaningless. But not entirely. We can still speak of affective-conative meanings associated with *tendencies* to produce certain affective and conative effects, and we might even think certain secondary cognitive$_P$ effects. Though, in novel cases such tendencies may not exist with. They may need to be nurtured. In any case, this will make sense of Carnap's claim that sentences, here (15), are cognitively insignificant (in this case when not used to speak of the weather—that might be the case in a situation where money is being distributed, bad news is being heard, etc.). It is consistent with our claim that (15) does have a cognitive$_L$ significance, too. That is, when it is considered without reference to contextual factors of the kind that render it as a sentence that does not speak to the meteorological facts.

[8] Linguistic expressions do not have aims.

In addition, to provide the positivist the opportunity to develop the most expansive theory of metaphor, contextual factors that erase cognitive$_L$ significance can be thought of in two ways:

(a) as erasing the cognitive$_L$ significance of the sentence as a whole, or

(b) as erasing the cognitive$_L$ significance of the sentence's cognitive$_L$ significant components either in part or as a whole.

First, following the positivists in question, a sentence is cognitively$_L$ significant or it is not. The positivists in question are engaged in providing criteria that distinguish meaningful sentences from nonsense—not degrees or shades of such meaningfulness.

Second, it is *sometimes* sensible to think that the cognitive$_L$ significance of expressions associated with the nonliteral use of a sentence matters in part to the metaphorical effect. There are a number of theorists who argue that literal meaning is essential to metaphor (non-cognitivists and cognitivists alike (see Magidor 2015)). Positivism, as presented, needn't wholly reject this, even if in the relevant contexts the cognitive$_L$ significance of the sentence is erased. For example, consider:

(16)Biden is square

Since the sentence is not being used to talk about actual shapes, the cognitive$_L$ significance of the sentence is erased. Still, the expression "Biden" has cognitive$_L$ significance here. It is being used to talk about the President of the United States. Even in sentences where every expression is metaphorical, the cognitive$_L$ significance of each expression may figure in producing secondary cognitive$_P$ effects. Sentences whose expressions have cognitive$_L$ significance wholly erased—insofar as they do not function to talk about the facts they are ordinarily used to talk about—may be aimed at producing secondary cognitive effects—cognitive$_P$ significance—through attention to their erased content, rather than anything else. Such sentences exist. This sentence is borrowed from Searle (1978b):

(17)The bad news congealed into a block of ice

Following Carnap, neither the noun phrase nor the verb phrase (nor its contained noun phrase) are used to refer to things that they usually refer to, and, thus, are not cognitively$_L$ significant—or, in the terms, I am advocating, they have had their literal significance erased.

At the same time, focusing on the erased cognitive$_L$ significance may not be possible or even interfere with the related effects. I have associated metaphorical effect with affective-conative effects and secondary cognitive$_P$ effects. We might suppose that literal meanings need not figure in producing any affective effects. We might also suppose that literal meanings need not figure in producing any conative effects; not even in producing any secondary cognitive$_P$ effects. For example, when a sentence contains no cognitively$_L$ significant expressions. That is, for example, a sentence in which every expression is not used to talk about what it is factually used to refer to. (Again, (17) might be such a sentence).

There is some evidence that suggests that focusing hearers-readers on the literal meaning of a non-literal use interferes with the cognitive processing of that non-literal use. Glucksberg (2008) presents the following experimental outline. Consider four sentences:

(18)Lawyers are sharks

(19)Apples taste good
(20)Lawyers are married
(21)Sharks are good swimmers

The first sentence is taken to be metaphorical. The interpretation is that it has a topic, lawyers, and a vehicle, sharks. On this account, the topic is understood through the vehicle through a shared ground. Three experimental scenarios follow:

1. Subjects are given sentences that focus on the topic (20) and asked to interpret (18)
2. Subjects are given sentences that focus on the vehicle (21) and asked to interpret (18)
3. Subjects are given sentences that focus on neither topic nor vehicle (19) and asked to interpret (18)

The second scenario slowed down processing time. It is interpreted that this shows that literal meaning interfered with processing or interpreting nonliteral meaning.[9] If the conclusion is true, our positivist might interpret the experiment as showing cognitive$_L$ significance interferes with secondary cognitive$_P$ effects in contexts in which the erasure of cognitive$_L$ significance is obvious—that is, following Carnap, where "shark" is not being used to talk about the biological category. The conclusion might also be hypothesised of sentences like (17). On the other hand, as said, even though wholly erased, the cognitive$_L$ significance of one or more expressions might matter.

At this point, I think, it is also useful to add that we may think of the erasure of cognitive$_L$ significance, related affective-conative functions-effects, and secondary cognitive$_P$ effects as automatic. For example, in the last scenario, it seems that the erasure of cognitive$_L$ significance, the affective-conative function-effect, and the secondary cognitive$_P$ effects are somewhat automatic—that is, prior to registering the cognitive$_L$ significance of the sentence in question. We can just see this as the tendency for certain affective-conative tendencies (and related secondary cognitive$_P$ effects) to follow immediately in processing the sentence. That may be why the presence of cognitive$_L$ significance interferes with processing the sentence in question.[10] Insults, slurs, and category mistakes might attest to this. This is not antithetical to positivism which, as we have seen considering Stevenson, quite willingly takes up the view that nonliteral significance may take priority over literal significance. It is not a hard stretch to think that such significance can have an automatic cognitive$_P$ significance. One can still deny it cognitive$_L$ significance. One can still deny it cognitive$_M$ significance. This needn't contradict the claim that

[9] A quick comment about the experiment in question. Consider the following syllogism. A:

1. Sharks swim.
2. My lawyer is a shark.
3. My lawyer is a predator.

Now compare it to the following syllogism, B:

1. Sharks are predators.
2. My lawyer is a shark.
3. My lawyer is a predator.

Syllogism A is not valid. Syllogism B is valid. A1 is a sentence that subjects are given before being asked to process the metaphor A2/B2. A3/B3 is the result of processing the A2/B2. Suppose that metaphor processing is a syllogistic or inferential process. If this were the case, then it would be no surprise that A1 interferes with the process. An alternative to A1 might be B1. Given our assumption, we would also expect that B1 would not interfere with the process. Indeed, we might suspect that it would expedite the process. If this were the case, since B1 is no less literal than A1, we could not conclude that literal meaning interferes with the processing of metaphor. Though, we might conclude that obscuring the vehicle-ground relationship does.

[10] However, see the previous note.

cognitive$_P$ significance is circuitous if we have a "career of metaphor" story to tell about the development of the automatic tendency. In other words, automatic cognitive$_P$ significance may be instilled and sustained over time (as a tendency or disposition).

Contextualisation is not alien to the positivist approach. Carnap's words suggest contextualisation. Carl Hempel (1965), belonging to a second wave of positivists, seems to see contextualisation as a natural outcome of theory building the positivist way. And Hempel himself emphasised that practical aspects shape cognitive significance within the context of a theory and its application. Theories are cognitively significant. Theoretical statements are cognitively significant to the extent the theory is cognitively significant. Arbiters of theoretical significance are clarity and precision of formulation, explanatory and predictive power with respect to observable phenomena, simplicity, and confirming evidence (Hempel 1965, 117). This seems to lead to the rejection of metaphor from scientific theory for theories containing metaphor are not as cognitively significant as those without. But this is not a proposition put forward here. Hempel is not the kind of positivist we have in mind.

Last Comments

In this brief last section, I wish to highlight two things. First, the positivist treatment of ethical statements and the positivist treatment of metaphor is to be distinguished. Second, it is unclear whether a historical classification of psychology into cognitivist/non-cognitivist groups undermines the conclusions drawn.

First, a positivistic treatment of sentences said to express ethical truths denies that they express ethical propositions. But other theories assert that they express ethical propositions. We can draw a distinction. A theory is a non-cognitivist$_E$ theory if it denies there are ethical propositions. A theory is non-cognitive$_E$ if it asserts there are ethical propositions. The positivist treatment of sentences thought to express ethical statements is non-cognitive$_E$. This is just like the positivist treatment of sentences that express metaphors. In parallel, it is non-cognitive$_M$. Moreover, a positivistic treatment of sentences said to express ethical truths denies that they express literal propositions. Let's suppose that a non-positivist treatment of sentences that are said to express ethical truths do not deny that they also express literal truths. The first theory is a non-cognitivist$_L$ theory with respect to ethics. The second theory is a cognitivist$_L$ theory with respect to ethics. The positivist theory is a non-cognitivist$_L$ theory. This is different from the positivist treatments of sentences that are metaphorical. That treatment does not entail that they lack literal meaning (only that it can be erased if it is present). Therefore, it is not a non-cognitivist$_L$ theory in the sense defined. In the third sense, of cognitivism defined above, we can take both theories are primarily non-cognitivist$_P$ but circuitously cognitivist $_P$ in that each theory does not rule out psychological functions and effects and it is possible to think such psychological functions and effects engender non-cognitivist$_P$ effects.

A last sense of the cognitivism/non-cognitivism distinction may be grounded in a distinction drawn from the historical development of psychology. At the turn of the century, psychology was marked by a turn to behaviourism. John B Watson (1913) argued that psychology should not study private, subjective, or qualitative events. Rather, psychology should study public, objective, quantitative events. This amounted to studying behaviour, physiological processes, the effects of conditioning, and stimulus-response events, all of which could be produced under experimental conditions. A second wave of behaviourists developed soon after. This school is better known as "neobehaviourist." Three names stand out here: Edward C. Tolman, Clark L. Hull, and B. F. Skinner. In general, neobehaviourists emphasized theory construction grounded on the empirical observation of behaviour. Unlike Watson, however, many neobehaviourists did allow for psychological explanations that included appeals to conscious events, mental processes, and unobservables (theoretical constructs). Cognitivism comes next. Cognitivists indirectly inferred unseen mental processes. Cognitivists thought that stimulus-response relations were much more mediated and complex than the neobehaviourists. Later cognitivists, under the influence of philosophers like Hilary Putnam (1967), came to view the mind as an information processing unit.

This gives rise to the multidisciplinary research field of the cognitive sciences. Cognitivism is to be strongly contrasted to J. B. Watson style behaviourism. Watson does not seem to allow for any type of inferred reality beyond what is given outwardly in behaviour. We may, thus, call Watson a non-cognitivist. But, also, following the history charted, we might want to call any stage prior to the cognitivist school non-cognitivist. Then, if the positivist treatment of metaphor entails one of these non-cognitivist schools of thought, we can call it non-cognitivist (in this historical sense). Sigmund Koch (1964) has suggested positivism has a very close relation to neobehaviourism and, indeed, neobehaviourists themselves stressed this. However, things are not this simple. For neobehaviourist do seem to allow for some psychological outcomes that appear cognitivist and sometimes neobehaviourists took these outcomes as being positivist. A brief introduction to the neobehaviourists introduced above will suffice to show this.

A brief introduction to the neobehaviourists introduced above will suffice to show this. Tolman and Hoznik (1930) developed the idea of latent learning, learning that is not dependent on reinforcement. In consequence of this, Tolman (1948) developed the idea of a "cognitive map." These were representations or internal images. Keep in mind, this was at a time after Tolman had come under the influence of the positivists. Indeed, Tolman thought he was doing for psychology what the logical positivists had done for physics (Tolman 1935). Hull was one of the strongest advocates of the positivists. On a number of occasions, he explicitly talked of the close relation between his work and the logical positivism (e.g. Hull 1938, 1943a). At the same time, Hull that "intervening variables" were inferred from observable behaviour. They were, themselves, unobservable. They were, according to Hull, somewhat like "electrons, protons, positrons, etc." (Hull 1943b, 21). Hull is no Cartesian and Hull is not positing anything like an entelechy, which he is at pains to demonstrate (Hull 1943b, 23). He seems to be introducing a functional theoretical construct, which is indirectly verified. It is difficult not to think of the construct as cognitive. And, yet, Hull seems to think he is working in parallel to Carnap when talking about these variables (Hull 1943a,). B. F. Skinner is associated with the label radical behaviourism. Whilst accepting the existence of mental events, he argued environmental effects (including evolutionary effects) were the most important factor in explaining behaviour. And that, ultimately, behaviour would be given a physiological explanation relating behaviour to environmental factors with respect the species as a whole and the individual in question (Skinner 1974). More pertinently, he rejected the claim that behaviourism does not try to explain cognitive processes (Skinner 1974). Though, at the same time, he also rejected the kind of psychology that explains behaviour by appealing to, in his words, the conceptual nervous system of mathematical models (Skinner 1974). Yet, others have found elements of cognitivism in Skinner (Delprato and Midgley, 1992, 1517). It might also be pointed out, unlike Tolman and Hull. Skinner didn't say he was carrying out the logical positivist project.

In any case, at this point, we can draw the following conclusion. If the positivist theory of metaphor entails neobehaviourism in one of its guises, we cannot simply conclude that the theory entails non-cognitivist thought. The positivist theory needs to do more than that. It needs to entail not just the aforementioned schools of psychology, it needs to entail them in a form that rules out the cognitivist elements associated with these forms. For example, it needs to rule out Tolman's cognitive maps, or Hull's "intervening variables." This might better demonstrate that there is a historical sense in which the positivist theory is antithetical to the cognitivist school. But there is a lot more to say here. For positivists, themselves, talked of psychology (e.g. Carnap 1959) and it is not clear that they were committed to any one school. Wilson (2003), for example, connects positivism to Freud. To connect the positivists and, thereby, the positivist theory of metaphor to behaviourism in order to deem it non-cognitivist requires more careful thought.

Let me sum up. There are three senses of cognitive significance that may be posited to be consistent with positivist writings: cognitive$_M$ significance, cognitive$_L$ significance, and cognitive$_P$ significance. A positivist theory of metaphor is non-cognitivist in the first sense. A positivist theory of metaphor is not non-cognitivist in the second sense and neither in the last sense. To retain consistency, though, in metaphorical contexts, where

factual or literal expressions are not used to speak factually or literally, such expressions may be taken to lack cognitive$_L$ significance (as Carnap would have it). Cognitive$_L$ significance can be erased. But this is no impediment to positivism since it can be interpreted in a way that matches intuitive claims and experimental facts. Last, an attempt to connect the positivist metaphor theory to a historical sense of non-cognitivism via an entailment to a very specific and narrow form of psychological theory remains obscure. This isn't a defence of positivism and there is no advocating for a positivist treatment of metaphor. This is an attempt to say in what senses a positivist theory of metaphor is non-cognitivist in a fair, unbiased, and charitable manner. Whether or not a positivist theory of metaphor is viable today is, positivistically speaking, an empirical matter.

Bibliography

APA Dictionary. 2020. Downloaded March 19th, 2021 from Dictionary.APA.org https://dictionary.apa.org

Archer, R. 1900. "A Little Cloud." Downloaded March 19th, 2021 from DiscoverPoetry.com https://discoverpoetry.com/poems/ruby-archer/a-little-cloud/

Ayer, A. J. 1936. Language, Truth, and Logic. Gollancz.

Berlin, I. 1938-1939. "Verification." Proceedings of the Aristotelian Society, 39: 225-248.

Blandford, J. 1999. "Hume's Theory of Meaning: Insight into the Nature of Religious Discourse." *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association*, Volume 73: 147-158.

Carnap, R. 1931. "Überwindung der Metaphysik durch Logische Analyse der Sprache." Erkenntnis 2: 219–41. Translated by Arthur Pap as "The Elimination of Metaphysics through Logical Analysis of Language", in Logical Positivism, edited by A. J. Ayer, pp. 60–81. Glencoe, Illinois: The Free Press, 1959.

Carnap, R. 1935. Philosophy and Logical Syntax. Kegan Paul, Trench, Trubner.

Carnap, R. 1959. "Psychology in Physical Language." *Logical* Positivism. A J Ayer (ed.). Free Press.

Choi, S. & Fara. M. 2013. "Dispositions", *The Stanford Encyclopaedia of Philosophy* (spring 2021 Edition), Edward N. Zalta (ed.), Download April 2nd, 2021 from https://plato.stanford.edu/archives/spr2021/entries/dispositions/

Chomsky, N. 1957. Syntactic Structures. Mouton.

Church, A. 1949, "Review of Language, Truth, and Logic", Journal of Symbolic Logic, 14: 52–3.

Davidson, D. 1978. "What Metaphors Mean." Critical Inquiry, Vol. 5, No. 1 Special Issue on Metaphor (autumn, 1978): 31-47.

Delprato, D. and Midgley B. D. 1992. "Some Fundamentals of B. F. Skinner's Behaviourism." *American Psychologist*, Vol. 47, No. 11: 1507-1520

Feuer, L. S. 1951. "The Paradox of Verifiability." Philosophy and Phenomenological Research, Vol. 12. No. 1. (Sep., 1951): 24-41.

Glucksberg, S. 2008. "How Metaphors Create Categories—Quickly." In Raymond Gibbs 2008. Metaphor and Thought. Cambridge: 67-83.

Grice, P. and Strawson, P. 1956, "In Defence of a Dogma," Philosophical Review, LXV (2): 141–58.

Heim, I. & Kratzer, A. 1998. *Semantics in Generative Grammar*. Blackwell Textbooks in Linguistics.

Hempel, C. G. 1965. *Scientific Explanation: Essays in the Philosophy of Science*. The Free Press.

Hull, C. L. 1938. "Logical Positivism as a Constructive Methodology in the Social Sciences," *Einheitswissenschaft*, 6: 35-38,

Hull, C. L. 1943a. "The Problem of Intervening Variables in Molar Behaviour Theory," *Psychological Review*, 50: 273-291.

Hull, C. L. 1943b. Principles of Behaviour: An Introduction to Behaviour Theory. New York: Appleton-Century-Crofts.

Johnson, C. 1997. "Metaphor vs. Conflation in the Acquisition of Polysemy: The case of SEE." *Cultural, Typological and Psychological Issues in Cognitive Linguistics*. M. K. Hiraga, C. Sinha, and S. Wilcox (eds.). Current Issues in Linguistic Theory 152. John Benjamins.

Johnson, M. 2017. Embodied Mind, Meaning, and Reason: How Our Bodies Give Rise to Understanding. The University of Chicago Press.
Kant, I. 1781 [1998]. The Critique of Pure Reason. P. Guyer and A.W. Wood (Trans.). Cambridge University Press.
Koch, S. 1964. "Psychology and Emerging Conceptions of Knowledge as Unitary." *Behaviourism and Phenomenology: Contrasting Bases for Modern Psychology*. T. W. Wann (eds.), University of Chicago Press. 1-41,
Knowles, M. & Moon, R. 2006. *Introducing Metaphor*. Routledge.
Kövecses, Z. 2010. Metaphor: A Practical Introduction. Oxford University Press.
Magidor, O. 2015. "Category Mistakes and Figurative Language." Philosophical Studies, 174: 65-78.
Ogden, C. K. & Richards, I. A. 1923. The Meaning of Meaning. Harcourt, Brace & World, Inc. A Harvest Book.
Putnam, H., 1967, "Psychophysical Predicates", in Art, Mind, and Religion, W. Capitan and D. Merrill (eds), Pittsburgh: University of Pittsburgh Press. Reprinted in Putnam 1975 as "The Nature of Mental States": 429–440.
Quine, W. V. O. 1953. From a Logical Point of View. Harvard University Press.
Quine, W. V. O. 1960. Word and Object. MIT Press.
Schlick, M. 1932. "Positivism and Realism." Erkenntnis, Volume 3: 1-31. Reprinted in Positivism and the Real External World/Positivism and Realism. Peter Heath (Trans.). Minkowski Institute Press, pp. 27-63.
Searle, J. 1979a. "Literal Meaning." In Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts. Cambridge University Press, pp. 117-137.
Searle, J. 1979b. "Metaphor." In Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts. Cambridge University Press, pp. 76-117.
Sellars, W. 1963. Science, Perception and Reality, Routledge & Kegan Paul Ltd.
Skinner, B. F. 1974. *About Behaviourism*. Knopf.
Stevenson, C. L. 1937. "The Emotive Meaning of Ethical Terms." Mind, Vol. 46. No. 181 (Jan., 1937): 18-31.
Tirrell, L. 1991. "Reductive and Nonreductive Simile Theories of Metaphor." The Journal of Philosophy, Vol. 88, No. 7 (Jul., 1991): 337-358.
Tolman, E. C., & Honzik, C. H. 1930. "Introduction and removal of reward, and maze performance in rats." *University of California Publications in Psychology*, 4, 257–275.
Tolman, E. C. 1935. "Psychology versus Immediate Experience" Philosophy *of Science*, 2: 356-380
Tolman, E. C. 1948. "Cognitive Maps in Rats and Mem." *The Psychological Review*, 55(4), 189-208.
Watson, J. B. 1913. "Psychology as the Behaviourist Views It," *Psychological Review*, 20: 158-177.
Wilson, F. 2003. "The Vienna Circle and Freud." *Writing the Austrian Traditions: Relations between Philosophy and Literature*. Wolfgang Huemer and Marc-Oliver Schuster (eds.). Wirth-Institute for Austrian and Central European Studies.
Woit, P. 2007. Not Even Wrong: The Failure of String Theory and the Continuing Challenge to Unify the Laws of Physics. Vintage Books.

The Un-cancelable Literary Work:
Does Literature's Relational Ontology Assure Its Survival beyond Cancel Culture?

Alena Govorounova, Gabi Lipede

To Dump or Not to Dump Shakespeare, Aristotle and Plato into the Garbage Can of History?

Cancel culture is not new. Indeed, in America one can rightly speak of cancel cultures. McCarthyism, for example, was itself a form of cancel culture with its demonization of communism. Various other efforts to silence countervailing perspectives critical of capitalism –-the most robust tradition of which is represented by Marxism – and forcibly remove these from the public sphere –- and certainly from economics departments in the United States — have enjoyed a lasting impact to the present day. The likely provisional cancellation of iconic literary works drawn principally from the classical Western canon can hardly compare to the wholesale erasure of socialism from the very history and genome of American social and political life.

But the question raised by the most recent incarnation of cancel culture, particularly as it applies to works of imaginative literature, is one of limits. How do we know when we've gone too far? Clearly, we might put the same question to defenders of neoliberalism, for example, here defined as the extension of market values into all aspects of life. Commodifying human values and social relationships is a cancellation of a kind — a cancellation of intrinsic human value in favor of the extrinsic values determined by these newfound markets—dating markets, marriage markets, rental markets, and healthcare markets, etc. But we nevertheless wonder what cancel culture might do to Japan's literature departments and the future of Japan's humanities education in general should it succeed in gaining currency here. Will it succumb to many of the extremes we have witnessed in the West? Will it go as far as to cancel prince Genji of *The Tale of Genji* on the grounds of his "misconduct with women"? Will it cancel Momotarō ("peach boy") from *The Story of Peach Boy* for exerting violence and hostility towards demons?

If you think that the above proposition is some kind of a twisted joke, let me remind you that a growing number of woke[i] North American academics are currently debating whether or not to remove Shakespeare, Aristotle, Plato and other classics from syllabi at literature and philosophy courses. In fact, many professors and high school teachers have already removed works by these authors from their curricula resulting in much heated public debate on social media[ii]. Shakespeare, Aristotle and Plato are allegedly "guilty" of white supremacy, intolerance, racism, misogyny, classism, toxic masculinity and other social evils. The next in queue to be canceled is the God of the Bible.[iii]

So, let us take a quick glance at the newly revealed "evils" of Shakespeare, for example. In "To Teach or Not to Teach: Is Shakespeare Still Relevant to Today's Students?" a Minnesota-based librarian, bookseller and freelance journalist Amanda MacGregor argues that "Shakespeare's works are full of problematic, outdated ideas, with plenty of misogyny, racism, homophobia, classism, anti-Semitism, and misogynoir.[iv] Which raises the question: Is Shakespeare more valuable or relevant than myriad other authors who have written masterfully about anguish, love, history, comedy, and humanity in the past 400-odd years?"[v] English literature teachers need to "challenge the whiteness" of the assumption that Shakespeare's works are "universal," echoes Jeffrey Austin, the head of a Michigan high school's English literature department.[vi] Former Washington state public school teacher Claire Bruncke banished Shakespeare from her classroom in order to "stray from centering the narrative of white, cisgender, heterosexual men."[vii] Other teachers retain Shakespeare in their curriculum, but reinterpret his works in the light of the woke critique. Thus, Sarah Mulhern Gross, an English teacher at High Technology High School in Lincroft, NJ, said she was teaching "Romeo and Juliet" "with a side of toxic masculinity analysis."[viii]

What does it mean to "cancel" Shakespeare anyway? – one might wonder. It may imply many things – from removing the Bard from prominence in our collective consciousness, to removing his works from school and university curricula, to physically withdrawing his books from libraries and other public sources. As University of Chicago Emeritus Professor Jerry Coyne put it, "If English departments were like police departments, you could say that Shakespeare is getting "defunded."[ix] So, how long before the literal defunding of Shakespeare really takes place – no more research grants devoted to Shakespeare – and will it gradually choke his works out of existence both within the academy and without?

But the more pressing question to ask is what will "canceling Shakespeare" do to our collective consciousness/unconsciousness as human beings? The American literary critic Harold Bloom argues that we should credit Shakespeare with no less than the invention of the human – hence, the title of his controversial book, *Shakespeare: The Invention of the Human* (Forth Estate Ltd., 2008). According to Bloom, Shakespeare is responsible for the invention of the human, the inauguration of personality and consciousness as we understand it today."[x] Not to mention that modern English *is* itself the language of Shakespeare – his works largely contributed to standardizing English grammar and rules in the 17th and 18th centuries.[xi] So, English literature departments should perhaps give careful consideration to this weighty matter: to read or not to read Shakespeare. To be or not to be as humans endowed with a more capacious consciousness.

Headlines of the following kind emerge as one surfs the web for cancel culture news: "University Students Demand Philosophers such as Plato and Kant Be Removed from Syllabus because They Are White," the title of the next article reads (*The Telegraph*, 2017).[xii] "Aristotle and Plato Must Go. After Targeting Statues, Race Activists Now Aim to Topple the Ancient Founders of Western Thought," (*RT: Question More*, 2017).[xiii]

Yet, many academics wrestle with cancel culture and try to justify one or another writer's enduring place in the canon. Alexander Adams, the author of *Iconoclasm, Identity Politics and the Erasure of History* (Societas, 2020), frames the issue in the following terms: "Decolonisation of the curriculum – the removal of white figures of note, to be replaced by figures of a different race, ethnicity or religion – is not a matter of principle but of power. It is a way of demonstrating your political faction has control of education and that you can make changes to damage, demean and remove icons of your supposed opponents. It is tactical and cynical. It is done to demoralize and divide. It is not a matter of empathy for the vulnerable but one of unconstrained expression of the ugliest emotions – ones which the ancient authors warned us to moderate. […] Depriving generations of the wisdom of the past is a recipe for a future racked by ignorance, intolerance and division. Anyone who has read the classics could have told us that."[xiv]

Agnes Callard, an associate professor of philosophy at the University of Chicago, also tries to rescue Aristotle from cancelation while admitting that his prominent status should be revised. "If cancellation is removal from a position of prominence on the basis of an ideological crime, it might appear that there is a case to be made for canceling Aristotle. He has much prominence: Thousands of years after his death, his ethical works continue to be taught as part of the basic philosophy curriculum offered in colleges and universities around the world."[xv] Her sated reason for cancelling Aristotle is that he not only condoned slavery but "defended slavery as beneficial to the slave" and claimed that "women were incapable of authoritative decision-making."[xvi]

His views, as Callard admits, could be understood as mere empirical observation of the norms and values of his time. Callard eventually calls for a "friendly disagreement" with Aristotle and diagnosis cancel culture as "merely the logical extension of what we might call 'messaging culture', in which every speech act is classified as friend or foe, in which literal content can barely be communicated, and in which very little faith exists as to the rational faculties of those being spoken to."[xvii] She calls for the return to "literal speech [that] employs systematically truth-directed methods of persuasion – argument and evidence."[xviii]

We nevertheless find the following statement by Callard troubling, "Yet I would defend Aristotle, and his place on philosophy syllabuses, by pointing to the benefits of engaging with him. He can help us identify the grounds of our own egalitarian commitments; and his ethical system may capture truths — for instance, about the importance of aiming for extraordinary excellence — that we have yet to incorporate into our own."[xix]

The above hardly represent an exhaustive list of reasons we should stick to Aristotle. One might add the outsized influence that Aristotle's metaphysics, rhetoric and ethics had on Western culture. Moreover, it is because of Aristotle that most fields of science exist in the quality they do today. Modern biology, psychology, geology, mathematics, physics and political science also find their roots in Aristotle's natural philosophy, cosmology and political philosophy respectively. He is the father of logic and formal reasoning and the modern scientific method originates from his concepts of inductive versus deductive reasoning. Aristotelian metaphysics had a great influence on Christian theology and Islam for many centuries[xx] And the list goes on.

Cancel culture's logical inconsistencies are striking. Say, we de-canonize Aristotle for his "ideological crimes" of racism and misogyny. Say, we dismantle all "dead white men" from positions of prominence and throw them into the "garbage can of history," (to utilize the rhetoric of the former Soviet censors of history) for their crimes of racism and misogyny. Today we see racism and misogyny as ultimate social evils. But what if our ideological climate changes? Let us imagine – hypothetically – that in a few decades we will evolve into a highly puritanical

society, in which marital infidelity, for example, is considered the highest form of social evil. Shall we then cancel Martin Luther King on the basis of his extramarital affairs? Every new generation will identify its own "ideological crimes," thus, creating an inexhaustible array of reasons to cancel previous generations' idols and heroes ad infinitum.

Surely, we can see the irony here? On the one hand, woke academics fight the tyranny of whiteness universalism ("Teachers should 'go against the whiteness' of the assumption that Shakespeare's works are "universal.")[xxi] On the other hand, they create new woke universalism by appealing to our modern understanding of human rights as unquestionably universal, timeless and ahistorical.

What happened to our respect and appreciation for cultural and historical relativism? Since when is it fair to offer an *ahistoric* critique of Aristotle for his views on slavery when it was all he knew two thousand four hundred years ago? I find the following statement by Callard particularly puzzling: "As I read him, Aristotle not only did not believe in the conception of intrinsic human dignity that grounds our modern commitment to human rights, he has a philosophy that cannot be squared with it." No, he did not. He did not use a microwave, either. I really cannot see how Aristotle can be blamed for not sharing our current worldview.

So, are there timeless universal human values or are there not? And if there *are* indeed, universal human values that transcend time, space and cultures, who gets to decide which values should be greenlighted and which values should be heavily policed?

Meanwhile, fairy-tales like *Cinderella* and *Snow White* and are under fire for misogyny and nursery rhymes by Dr. Seuss such as *And to Think that I Saw It on Mulberry Street* are being canceled for racist imagery.[xxii] Anne Hathaway recently apologized to the disabled community for negatively portraying those with limb differences when playing the role of a fictional witch character in Robert Zemeckis' adaptation of "The Witches" – a mythical creature with three prolonged fingers and exaggerated teeth. Keira Knightly would not allow her little daughter to watch *Cinderella* or *The Little Mermaid*: Cinderella is guilty of waiting for a prince to rescue her, and The Little

Mermaid stupidly gave up her beautiful voice for a man.[xxiii]

It is somewhat hard to process how fictional blobs and fairy-tale images can be ideologically censored. How did we come to reduce complex archetypal images like Cinderella and The Little Mermaid to one-dimensional political caricatures? Or how can we nonchalantly shake off crucial cultural signifiers that were birthed into being by the works of Shakespeare and Aristotle? What price will we pay for this cultural holocaust one day? Will the destruction of the very cultural signifiers that created and sustained our society for centuries survive this form of modern ostracism? How can we find a balance between the long-overdue decolonization of the canon, on the one hand, and a non-reductionist approach to the literary text on the other? Perhaps it is time for us, as academics, to refresh our memory regarding the polyphonic nature of literary texts and the rich potentialities of the reader-response? Is there not more than one way to read a given text?

Let me try to illustrate with the example from *The Sleeping Beauty*. The feminist reading of *The Sleeping Beauty* is pretty straightforward: a weak and feeble female cannot fend for herself and needs to wait for a prince to rescue her. How much more sexist can it get, really? And if this is not enough, a prince kisses a princess without her consent (!) while she is sleeping, God forbid – sexual harassment alert (!) and an ultimate patriarchal nightmare.

A psychoanalytic reading of the same text, as proposed by public intellectual and Toronto University professor of psychology Jordan Peterson[xxiv], suggests the reading of this text as an Oedipal allegory: the story of a mother (father) who devours her child by overprotecting her. The Sleeping Beauty is born to elderly parents and she is their only miracle child. Their urge to protect her from the terrors of the outside world is all-consuming. The king and the queen refuse to let their precious daughter face the real world. When Maleficent the witch (symbolically representing the dangers of this world) shows up at the little girl's christening party, the king and the queen apologize for "forgetting" to invite her to the party and the witch is mad. You don't forget about the dangers of this world when you have a child! You do not forget to invite Maleficent to the party! You want to teach your child about the world's dangers and help her mature to be able to face the world on her own. You "forget" to invite the evil witch to the party only if you want your child to be unconscious, socially disabled and forever depend on you. And The Sleeping Beauty wants to be unconscious: she had been protected her whole life, she is naïve and scared and she wants to fall asleep and never wake up. Now she has to wait for the prince to come and rescue her. But the prince in this story is not just the actual man who comes to rescue the woman, no. The prince symbolically represents the woman's own consciousness: she needs to wake herself up, she has to put her own masculine consciousness to the forefront so that she can survive in the world. Consciousness is frequently presented in stories as symbolically

masculine using the logos idea, that is, the idea that without this forward-going courageous consciousness the woman herself will drift into unconsciousness and terror. You can read *The Sleeping Beauty* as a story where "a sleeping woman needs a man to wake her up just as a sleeping man needs a woman to wake him up." A prince, too, has to wake up from the sleep of the naïve and the damned: he has to fight the dragon and mature. On this reading of the fairy-tale, The Sleeping Beauty serves as an archetype of the female hero who overcomes her fears of the world and breaks through the debilitating constraints of her parents' codependent relationship cycle. She represents maturity, courage and self-will. And *The Sleeping Beauty* story thus understood is a highly symbolic polyphonic text, which appeals to our deepest primordial psychological structures.

Which of the above readings – the feminist or the psychoanalytic – is preferable? Which should be greenlighted? Which should be canceled? Clearly, this is a false dilemma. These two readings – and many others besides – can coexist in creative tension and create a constructive dialogue. Canceling the classics and children's fairy-tales will not purge our semiotic systems of our moral shortcomings. But it may destroy deep-seated powerful imagery and cultural signifiers which have sustained our collective consciousness for millennia.

Theoretical Analysis and Final Considerations

Woke Hermeneutics' Failure to Appreciate the Aesthetic Experience of Art and Literature

Cancel culture's campaign against targeted works of literature carries with it a certain number of implicit and untested hypotheses concerning (1) the nature of the literary arts; (2) the ostensibly benign impact that the cancellation of select works within more traditional canons will have on the continued flourishing of the literary arts; (3) and lastly and most topically the effectiveness of cancelation as a means of furthering cancel culture's proscriptions and assuring more just and equitable outcomes for *the least of these* — that is, a running list of evermore minutely defined, oppressed socio-demographic groups. The few unstated hypotheses examined here, albeit cursorily, do not bare scrutiny and bode poorly for cancel culture as a research program and social agenda. This diagnosis is entirely consistent with cancel culture's demonstrable success as a form a modern ostracism. In other words, I argue that the cancellation of select literary works will not move society in the direction of greater social justice, equity, and diversity. It would seem on the contrary to establish a precedent for a relentlessly chronic self-effacement: any work produced today can be cancelled tomorrow if it is found to offend the sensibilities of one or another of an ever minutely defined. An appraisal of cancel culture's unstated hypotheses is therefore in order. Proposed correctives to cancel culture's perceived theoretic shortcomings lead to the following: (1) a renewed emphasis on aesthetics as the locus of productive literary inquiry, thereby deprioritizing political discourse about literature while paradoxically establishing a surer empirical ground on which to examine literature's function as a potent vector for the propagation of sociopolitical values. For if works of art are effective vectors of social values it is in part due to (a) their markedness, to borrow an anthropological term, that is, their capacity to stand apart from other socio-cultural activities as emphatically atypical and thereby capture and retain the attention of beholders. Artists achieve markedness through the strategic use of various aesthetic devices; (b) equally noteworthy in this regard is the historic role that art has played across all cultures in mediating human interactions with the supernatural — a cognitive domain of human ability, on a purely naturalistic account, that is often coterminous with a given culture's value system. In other words, art's function as a potent vehicle for the dissemination of sociopolitical values can be understood in evolutionary terms as an exaptation — a repurposing of art's original putative, mediating function at the interface between mankind and the supernatural toward the promotion of values across a broader range of cultural domains — for example, the political sphere. In so far as all cultures have historically drawn heavily upon religious world views in order to establish their value systems, an extra-religious co-option of art's proposed immanent function remains plausible, however speculative; and (2), an impractical 'runaway ostracism' or exponential increase in the things or states of things in the cultural universe against which cancel culture could potentially level its proscriptions using the various instruments at its disposal — namely, defunding and other more direct roles in defining public and private policies. I will touch upon these topics briefly in what follows. My analysis is, however, primarily concerned with what I here label 'woke hermeneutics' — namely, an interpretive approach devoted to the wholesale reduction of literature to political discourse, which in turn implies, more abstractly, the reduction of cultural artifacts whose immanent function is aesthetic to their discursive dimensions solely. Ultimately, I argue that a woke hermeneutic fails to apprehend literary works as works of art.

Champions of cancel culture within the academy endorse, at least implicitly, an a-theoretic approach to works of imaginative literature and works of art more broadly. Consequently, cancel culture's woke hermeneutics usually involve a hypostatization of a given work of imaginative literature at the site of moral questioning: the moral issues raised by a given text, that is, its putative role in furthering inequities, injustice, the patriarchy, etc. become the whole story behind a text which, consequently, hypertrophies into an urgently cancelable monadic whole. Woke hermeneutics would, therefore, appear to involve a cognitive style in relation to literary works that is better suited to pragmatic texts. And in fact, woke hermeneutics reduce literary works to banal messages. This interpretive approach is hardly prohibited; however, it breaks with the nature of literary works as works of art. This fact combined with woke hermeneutics' impoverished implicit ontological theory of the literary work run precisely counter to literature's status as a culturally and historically privileged locus for aesthetic experience, which we will define in keeping with recent work in cognitive poetics as a polyphonic attentional mode.

Attention in the aesthetic mode so defined reactivates the polyphonic relations and potentiality endemic to written language that are deliberately exploited by the artist resulting in an artistic reading of the literary text. In theory, written languages' stratified nature is such that even pragmatic texts can similarly give rise to the polyphonic attentional modes outlined above. Pragmatic texts have not been designed to maximize either the polyphonic vertical play between the strata that make up the texts or the horizontal associations a reader might establish between the text and the universe outside of the text or other texts.

A failure to engage with a literary text by adopting a polyphonic cognitive style results in the reduction of the text to given that the artistic exploitation of the stratified nature of written language does not compromise the text's constituent discursive elements. One is hardly prohibited from reading a literary work in this vain. A poem can be read as merely a simple message. And indeed, cancel culture's strident declamations about select authors and literary works quickly devolve into interpretive orthodoxy about a given text for the same reason. This is hardly the product of an artistic reading as defined above. You can only cancel these works on the altar of their purported ideological crimes to the extent that you fail to engage with them as works of art.

It is clearly the case that pragmatic texts also lend themselves to a variety of interpretations. Legal texts, philosophical essays, religious tracts are hardly interpretively neutral; however, these texts are also bound to a means ends type logic — they serve some instrumental, extrinsic function which does not critically depend on the pleasure derived in reading them and they are evaluated on the basis of criteria which are not strictly aesthetic. In contrast, the immanent function of a literary text is aesthetic pleasure — the pleasure or displeasure derived in reading the text in fact dictates whether or not the reader will continue to engage with the literary text in question. We don't stop reading legal texts, instruction manuals, letters from estranged loved ones, medical documents, emails, etc. simply because we fail to derive pleasure in reading them. They respond to so many extrinsic instrumental values that we must respond to as conscious, free moral agents. Literary texts, however, fulfil first and foremost their aesthetic function. Note that woke readings of these same literary texts adopt the cognitive style outlined above in relation to pragmatic texts and are therefore more appropriately characterized as schematized, convergent and bottom-up. In consequence, woke readings quickly devolve into orthodoxy.

Are Virtual Texts Cancelable?

It is uncertain how the cancelation of specific texts in their materialized form — be it digital or analog — will help further the struggle toward a more equitable, just and diverse society. To borrow an oft cited example from the philosophy of art, if we were to tragically rid the world of every material impression of the score for Beethoven's 9th symphony it can hardly be said that this specific musical work would somehow cease to exist. Beethoven's 9th enjoys a virtual presence in our culture that is in no longer anchored to notes on a page or other strictly material semiotic media. Virtual instantiations of the text persist albeit in a diminished form as objects of aesthetic contemplation and can nevertheless survive the cultural holocausts aimed strictly at their destruction as material artifacts. This argument cannot be easily extended to include Shakespeare's *Hamlet* or Hart Crane's *The Bridge* short of committing these works to memory. Some genres, for example, the folk tale are more spontaneously and readily virtualized. But cancel culture is hardly concerned with literary works as objects of aesthetic contemplation.

In the absence of any single theory or body of theories advanced by champions of cancel culture in support of a more optimistic future for their research program and social agenda, the preceding should naturally lead to a kind of nihilism about cancel culture's stated aims. For how can cancel culture help move us as a society toward

greater freedom, equity, justice if it cannot ultimately apprehend the very harbingers of injustice and oppression it has identified in so many literary texts. Assuming of course that the text is in fact a harbinger of inequality, injustice, etc. that these moral failings are somehow intrinsic to it and that cancel culture's interpretation of a text is not also itself activated by the vagaries of specific cultural and historical contexts, extrinsic to the text itself, that bias and inform woke hermeneutics from the outset. Cancel culture's hypostatization of semantic content — it's misplaced concreteness — assumes that *meaning must necessarily inhere in the text itself rather than be projected onto the text from without.* Cancel culture knows no pragmatics. If it did, it might be encouraged to multiply its potential targets exponentially and move in the direction of a more thoroughgoing, society-wide semiotic purge. Instead, cancel culture's woke hermeneutic belies an impoverished implicit theory of cultural evolution one in which the causal arrow is assumed to run unilaterally from the literary work to the world. [A strangely anti-dialectical proposition to be sure given cancel culture's roots in Marxist literary theory.]

Will Cancel Culture Liberate Us Eventually?

It is, therefore, unclear what impact cancellation will ultimately have in moving us toward a more just and equitable society. If champions of cancel culture within the academy were to grapple with these matters seriously, they might perhaps take aim at particular readings of texts as opposed to the texts themselves. Instead, cancel culture's cancellations — impotent to effect the societal change they purport to carry out — amount to little more than public acts of moral absolution – all too easily compared with Pagan sacrificial rites in which the victims themselves are believed to be guilty of the evils projected onto them. Regretfully, a universally redemptive, Christian sacrificial moment — to be performed once and never again — is nowhere in sight. A Hegelian dialectic has predictably emerged here: the liberation of one group translates into the oppression of another group. Cancel culture's efforts to free the oppressed will in turn, paradoxically, oppress others.

Bibliography

Adams, A., "Aristotle and Plato Must Go. After Targeting Statues, Race Activists Now Aim to Topple the Ancient Founders of Western Thought," *RT: Question More*, February 10, 2021. https://www.rt.com/op-ed/515179-white-supremacy-classics-university

Alter A., Harris, E. A., "Dr. Seuss Books Are Pulled, and a 'Cancel Culture' Controversy Erupts," The New York Times, March 4, 2021. https://www.nytimes.com/2021/03/04/books/dr-seuss-books.html

Blum, H., *Shakespeare: The Invention of the Human*, Forth Estate Ltd., 2008

Brown, L., "William Shakespeare Ditched by Woke Teachers over 'Misogyny, Racism," *The New York Post,* February 16, 2021. https://nypost.com/2021/02/16/shakespeare-ditched-by-woke-teachers-over-misogyny-racism

Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html

Coyne, J., "Shakespeare Gets Canceled," *Why Evolution Is True?* February, 18, 2021. https://whyevolutionistrue.com/2021/02/18/shakespeare-gets-canceled

Harriet, A., "Revealed: How 'Woke' English Teachers Have Cancelled Shakespeare because of his 'White Supremacy, Misogyny, Racism and Classism' - and Are Instead Using His Plays to Lecture in 'Toxic Masculinity and Marxism," Mail Online, Dailymail.com, February, 16, 2021. https://www.dailymail.co.uk/news/article-9263735/Woke-teachers-cut-Shakespeare-work-white-supremacy-colonization.html

Johnson, K., *Shakespeare's English: A Practical Linguistic Guide,* Routledge, 2014

"Jordan Peterson's Analysis of Sleeping Beauty," *Bite-sized Philosophy*, July, 11, 2017

"Keira Knightley Bans Daughter from Watching Some Disney Films," *BBC News*, October, 18, 2018. https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-45900794

MacGregor, A., "To Teach or Not to Teach: Is Shakespeare Still Relevant to Today's Students?" In "To Teach or Not To Teach: Is Shakespeare Still Relevant to Today's Students?" https://www.slj.com/?detailStory=to-teach-or-not-to-teach-is-shakespeare-still-relevant-to-todays-students-libraries-classic-literature-canon

Sgarbi, M., *Kant and Aristotle: Epistemology, Logic, and Method*, Albany: State University of New York Press, 2016

"University Students Demand Philosophers such as Plato and Kant Are Removed from Syllabus because They Are White," *The Telegraph*, January, 8, 2017. https://www.telegraph.co.uk/education/2017/01/08/university-students-demand-philosophers-including-plato-kant

Weinberg, D. M., "Could the Bible Be Cancel Culture's Next Victim? The terror of 'Woke' Cancel Culture Knows No Bounds," The Jerusalem Post, March, 11, 2021. https://www.jpost.com/opinion/could-the-bible-be-cancel-cultures-next-victim-opinion-661732

[i] The term refers to awareness of social and racial injustice – A.G.
[ii] Harriet, A., "Revealed: How 'Woke' English Teachers Have Cancelled Shakespeare because of his 'White Supremacy, Misogyny, Racism and Classism' - and Are Instead Using His Plays to Lecture in 'Toxic Masculinity and Marxism," Mail Online, Dailymail.com, February, 16, 2021. https://www.dailymail.co.uk/news/article-9263735/Woke-teachers-cut-Shakespeare-work-white-supremacy-colonization.html
[iii]Weinberg, D. M., "Could the Bible Be Cancel Culture's Next Victim? The terror of 'Woke' Cancel Culture Knows No Bounds," The Jerusalem Post, March, 11, 2021. https://www.jpost.com/opinion/could-the-bible-be-cancel-cultures-next-victim-opinion-661732
[iv] The term refers to a hatred of black women – A.G.
[v] MacGregor, A., "To Teach or Not To Teach: Is Shakespeare Still Relevant to Today's Students?" In "To Teach or Not To Teach: Is Shakespeare Still Relevant to Today's Students?" https://www.slj.com/?detailStory=to-teach-or-not-to-teach-is-shakespeare-still-relevant-to-todays-students-libraries-classic-literature-canon
[vi] Brown, L., "William Shakespeare Ditched by Woke Teachers over 'Misogyny, Racism," *The New York Post,* February 16, 2021. https://nypost.com/2021/02/16/shakespeare-ditched-by-woke-teachers-over-misogyny-racism
[vii] Brown, L., "William Shakespeare Ditched by Woke Teachers over 'Misogyny, Racism," *The New York Post,* February 16, 2021. https://nypost.com/2021/02/16/shakespeare-ditched-by-woke-teachers-over-misogyny-racism
[viii] Brown, L., "William Shakespeare Ditched by Woke Teachers over 'Misogyny, Racism," *The New York Post,* February 16, 2021. https://nypost.com/2021/02/16/shakespeare-ditched-by-woke-teachers-over-misogyny-racism
[ix] Coyne, J., "Shakespeare Gets Canceled," *Why Evolution Is True?* February, 18, 2021. https://whyevolutionistrue.com/2021/02/18/shakespeare-gets-canceled
[x] Bloom, H., *Shakespeare: The Invention of the Human*, Forth Estate Ltd., 2008
[xi] Johnson, K., *Shakespeare's English: A Practical Linguistic Guide,* Routledge, 2014
[xii] "University Students Demand Philosophers such as Plato and Kant Are Removed from Syllabus because They Are White," *The Telegraph*, January, 8, 2017. https://www.telegraph.co.uk/education/2017/01/08/university-students-demand-philosophers-including-plato-kant
[xiii] Adams, A., "Aristotle and Plato Must Go. After Targeting Statues, Race Activists Now Aim to Topple the Ancient Founders of Western Thought," *RT: Question More*, February 10, 2021. https://www.rt.com/op-ed/515179-white-supremacy-classics-university
[xiv] Adams, A., "Aristotle and Plato Must Go. After Targeting Statues, Race Activists Now Aim to Topple the Ancient Founders of Western Thought," *RT: Question More*, February 10, 2021. https://www.rt.com/op-ed/515179-white-supremacy-classics-university
[xv] Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html
[xvi] Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html
[xvii] Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html
[xviii] Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html
[xix] Callard, A., "Should We Cancel Aristotle? He Defended Slavery and Opposed the Notion of Human Equality. But He Is Not Our Enemy" *The New York Times*, July, 21, 2020. https://www.nytimes.com/2020/07/21/opinion/should-we-cancel-aristotle.html
[xx] For more on Aristotle's long-term influences, see: Sgarbi, M., *Kant and Aristotle: Epistemology, Logic, and Method*, Albany: State University of New York Press, 2016
[xxi] Brown, L., "William Shakespeare Ditched by Woke Teachers over 'Misogyny, Racism," *The New York Post,* February 16, 2021. https://nypost.com/2021/02/16/shakespeare-ditched-by-woke-teachers-over-misogyny-racism
[xxii] "Dr. Seuss Books Are Pulled, and a 'Cancel Culture' Controversy Erupts," The New York Times, Alter A., Harris, E. A., March 4, 2021. https://www.nytimes.com/2021/03/04/books/dr-seuss-books.html
[xxiii] "Keira Knightley Bans Daughter from Watching Some Disney Films," *BBC News*, October, 18, 2018. https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-45900794
[xxiv] "Jordan Peterson's Analysis of Sleeping Beauty," *Bite-sized Philosophy*, July, 11, 2017

執筆者紹介（掲載順）

渡辺 秀樹	大阪大学大学院言語文化研究科	教授（編集）
大森 文子	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
後藤 秀貴	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程 3 年
友繁 有輝	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程 3 年
寺浦 麻由	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程 3 年
岡部 未希	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程 1 年
竹森 ありさ	大阪大学大学院言語文化研究科	博士前期課程 2 年
Luke Malik	大阪大学大学院言語文化研究科	特任准教授
Alena Govorounova	大阪大学大学院言語文化研究科	特任准教授

言語文化共同研究プロジェクト 2020

感情・感覚のレトリック

2021 年　5 月 31 日　発行

編集発行者　大阪大学大学院言語文化研究科